



東北大学

ISSN 2185-6990

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告 4
芦ノ口遺跡第9次調査
青葉山E遺跡第9次調査
—東日本大震災復旧事業関係調査報告書—

芦ノ口遺跡第9次調査

青葉山E遺跡第9次調査

—東日本大震災復旧事業関係調査報告書—



芦ノ口遺跡第9次調査で確認された沢跡

東北大学埋蔵文化財調査室

2015

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告 4
芦ノ口遺跡第9次調査
青葉山E遺跡第9次調査
— 東日本大震災復旧事業関係調査報告書 —

東北大学埋蔵文化財調査室

2015



1. 芦ノ口遺跡第9次調査区全景（北東から）



2. 芦ノ口遺跡第9次調査区沢跡西側土層断面（東から）



3. 青葉山E遺跡第9次調査区東側全景（北西から）



4. 青葉山E遺跡第9次調査区東側遺物出土状況（南西から）

序

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、本学も大きな被害を受けました。その復旧のため、2012年度から建物新営等の本格的な復旧が始まることとなり、それに伴う発掘調査が実施されることとなりました。本報告書は、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』の4冊目として、この復旧作業のため実施した、富沢地区R I排水処理施設設備新設に伴う芦ノ口遺跡第9次調査、青葉山地区の総合研究棟新営に伴う青葉山E遺跡第9次調査の成果を報告いたします。

東北大学埋蔵文化財調査室では、以前は『東北大学埋蔵文化財調査年報』として、年度ごとに事業概要と調査成果の報告をまとめて刊行してきました。2007年度より年度ごとの事業概要の報告は、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』として別に刊行し、東北大学構内における埋蔵文化財調査の発掘調査の報告については『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』というシリーズで刊行しております。本報告書は、その4冊目となります。

今回報告する芦ノ口遺跡第9次調査では、縄文土器や土師器などが出土するとともに、自然の沢状の地形を確認しました。芦ノ口遺跡の立地面の古地形を考える上で、重要な知見を得ることができたと考えております。また、青葉山遺跡第9次調査では、縄文時代早期中葉と中期中葉の土器・石器が多量に出土し、中期中葉のものと考えられる土坑なども検出することができました。青葉山E遺跡の広がりや、当時の人々の土地の使い方を考える上で重要な成果であったと言えます。

調査の実施から報告書の刊行まで、大学内外の関係機関の御協力を得て、滞りなく事業を進めることができました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、本書で報告されるデータが各方面で活用されることを望むものです。

東北大学埋蔵文化財調査室

室長 阿子島 香

例 言

1. 本調査報告は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査室が2012年度に行った芦ノ口遺跡、青葉山E遺跡の調査成果をまとめたものである。
2. 報告する遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。

芦ノ口遺跡第9次調査（TM9）	2012年8月1日～8月30日
	藤沢 敦・柴田恵子・菅野智則
青葉山E遺跡第9次調査（AOE9）	2012年9月3日～10月31日
	藤沢 敦・柴田恵子・菅野智則
3. 調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査室が行った。
4. 本報告の編集・執筆は、菅野智則・柴田恵子が担当した。分担は第Ⅰ章、第Ⅱ章1～5・6（3）・7・8、第Ⅲ章1～5・6（3）・7は菅野、第Ⅱ章6（1）・（2）、第Ⅲ章6（1）・（2）は柴田が担当した。
5. 英文要旨については、柴田恵子が作成し、阿子島香が校訂した。
6. 「第Ⅱ章6出土遺物（2）石器」と「第Ⅲ章6出土遺物（2）石器」については、調査に参加した傳田惠隆氏（現宮城県教育庁文化財保護課）に執筆いただいたものを、本報告書の体裁に合わせて柴田が編集した。
7. 芦ノ口遺跡第9次調査出土の土師器・須恵器については、2013年度調査補助員（技能補佐員）であった大久保弥生氏（現大崎市教育委員会）が図化（図10）・観察（表7）したものを、本報告書の体裁に合わせて柴田が編集した。
8. 「第Ⅱ章7芦ノ口遺跡のテフラ分析」については、バリノ・サーヴェイ株式会社による分析報告を、本報告書の体裁に合わせて菅野が編集した。
9. 「第Ⅲ章3調査経緯（1）調査地点の位置、（2）調査の経過」の大部分は、『年次報告』2012から該当箇所を抜き出し、菅野が編集したものである。
10. 遺物実測図の作成にあたっては、原図はすべて手描きで作成している。遺物実測図のうち、石器については手描きのトレースによって原版を作成した。土器の実測図と遺構の測量図は、デジタルトレースによって原版を作成した。
11. 遺物写真については、有限会社仙台写真工房に委託して撮影した。
12. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申しあげる（敬称略）。

柳田俊雄、鹿又喜隆、東北大学考古学研究室
13. 出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査室で保管・管理している。

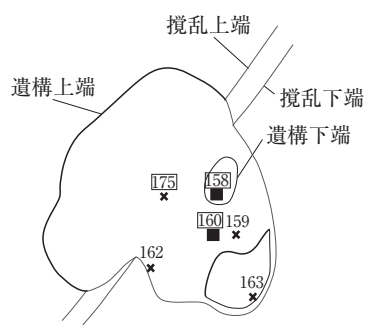
凡 例

1. 図1は、国土地理院発行の1万分の1地形図（『青葉山』：平成19年修正）を使用したものである。図2は、国土地理院発行の2万分の1地形図（『仙臺南部』：明治38年測量）、2.5万分の1地形図（『仙台西南部』：昭和3年測量・平成4年修正測量）、1万分の1地形図（『仙台南部』：昭和28年測量）、米軍撮影の空中写真（整理番号USA、コース番号R349、写真番号48、地図番号NJ-54-21-3、：昭和22年10月23日撮影）を使用したものである。同様に図14は、国土地理院発行の2万分の1地形図（『仙臺南部』：明治38年測量）、2.5万分の1地形図（『仙台西南部』・『仙台西北部』：昭和3年測量・昭和39年改測・平成19年更新）、米軍撮影の空中写真（整理番号USA、コース番号R349、写真番号36、地図番号NJ-54-21-3、：昭和22年10月23日撮影）を使用したものである。
2. 挿図・写真等の方位は、それぞれに示した。
3. 表4・5、表12～14に掲載した座標のうち、X・Yの値は、調査のため設定した任意座標である。Xは南北軸、Yは東西軸となる。また、Z座標は標高を示す。芦ノ口遺跡は、調査区南西方向を原点としている（図4）。青葉山E遺跡は、BQ区南西隅を原点としている（図16）。
4. 遺物の実測図および写真の縮尺は、それぞれに示した。
5. 引用・参考文献は、巻末にまとめた。また、本文中で当室が刊行した報告書類を引用する際には、下記のように略した。

例 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 1 … 『年報』 1
『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』 2008 … 『年次報告』 2008
『東北大学埋蔵文化財調査報告』 1 … 『調査報告』 1

6. 挿図中の表記は、特に指示しないものについては、以下の通りである。これら以外については、それぞれに指示した。

①遺構平面図



記号のドットは遺物の位置を示す。
遺物の種別については、それぞれの図で示す。
また、番号はその取上げ番号である。
□ はその中でも図示した遺物を示す。

②遺構断面図



③遺物座標基準点



目次

巻頭カラー図版

序

例言

凡例

目次

図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章 震災復旧に係る調査の概要	1
第Ⅱ章 芦ノ口遺跡第9次調査 (TM9)	3
1. 芦ノ口遺跡の立地と周辺の遺跡	3
(1) 芦ノ口遺跡の立地	3
(2) 芦ノ口遺跡の周辺遺跡	3
2. これまでの調査	5
3. 調査経緯	7
(1) 調査地点の位置	7
(2) 調査の経過	7
(3) 調査の方法	7
4. 基本層序	7
5. 検出遺構	7
6. 出土遺物	13
(1) 土器	13
(2) 石器	19
(3) 遺物の分布状況と遺物包含層の形成について	20
7. 芦ノ口遺跡のテフラ分析	21
(1) 目的	21
(2) 試料	21
(3) 分析方法	21
(4) 結果	21
(5) 考察	21
8. まとめ	23
第Ⅲ章 青葉山E遺跡第9次調査 (AOE9)	25
1. 青葉山E遺跡の立地と周辺の遺跡	25
(1) 青葉山E遺跡の立地	25
(2) 青葉山E遺跡の周辺遺跡	25
2. これまでの調査	27
3. 調査経緯	29
(1) 調査地点の位置	29
(2) 調査の経過	29
(3) 調査の方法	29
4. 基本層序	29
5. 検出遺構	32
6. 出土遺物	39
(1) 土器	39
(2) 石器	46
(3) 分布状況	51
7. まとめ	53

引用・参考文献

東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

英文要旨

写真図版

報告書抄録

目 次

図1 東北大学と周辺の遺跡……………	2	図15 青葉山地区調査地点……………	28
図2 富沢地区周辺の地形……………	4	図16 青葉山E遺跡第9次調査平面図……………	30
図3 富沢地区調査地点……………	6	図17 青葉山E遺跡第9次調査断面図……………	31
図4 芦ノ口遺跡第9次調査平面図……………	8	図18 青葉山E遺跡第9次調査遺構平面図・断面図……………	33
図5 芦ノ口遺跡第9次調査断面図 (1)……………	9	図19 青葉山E遺跡第9次調査遺物分布図……………	34
図6 芦ノ口遺跡第9次調査断面図 (2)……………	10	図20 青葉山E遺跡第9次調査出土土器 (1)……………	41
図7 芦ノ口遺跡第9次調査断面図 (3)……………	11	図21 青葉山E遺跡第9次調査出土土器 (2)……………	42
図8 芦ノ口遺跡第9次調査における層の対応関係……………	12	図22 青葉山E遺跡第9次調査出土土器 (3)……………	43
図9 芦ノ口遺跡第9次調査出土土器 (1)……………	17	図23 青葉山E遺跡第9次調査出土石器 (1)……………	47
図10 芦ノ口遺跡第9次調査出土土器 (2)……………	18	図24 青葉山E遺跡第9次調査出土石器 (2)……………	48
図11 芦ノ口遺跡第9次調査出土石器……………	19	図25 青葉山E遺跡第9次調査出土石器 (3)……………	49
図12 芦ノ口遺跡第9次調査で確認されたテフラと火山ガラス……………	22	図26 青葉山E遺跡第9次調査における 早期中葉・中期中葉土器の分布……………	52
図13 テフラ試料中の火山ガラスの屈折率……………	22	図27 青葉山E遺跡第7・9次調査グリッド別 土器密度図……………	54
図14 青葉山地区周辺の地形……………	26		

表 目 次

表1 震災復旧に係る調査一覧……………	1	表13 青葉山E遺跡第9次調査遺物座標一覧表 (2)……………	37
表2 芦ノ口遺跡における調査一覧……………	5	表14 青葉山E遺跡第9次調査遺物座標一覧表 (3)……………	38
表3 芦ノ口遺跡第9次調査遺物集計表……………	13	表15 青葉山E遺跡第9次調査出土土器観察表 (1)……………	44
表4 芦ノ口遺跡第9次調査遺物座標一覧表 (1)……………	14	表16 青葉山E遺跡第9次調査出土土器観察表 (2)……………	45
表5 芦ノ口遺跡第9次調査遺物座標一覧表 (2)……………	15	表17 青葉山E遺跡第9次調査出土石器観察表……………	50
表6 芦ノ口遺跡第9次調査出土縄文土器観察表……………	16	表18 青葉山E遺跡第9次調査地区・層位別 出土土器・石器点数……………	50
表7 芦ノ口遺跡第9次調査出土須恵器・土師器 観察表……………	18		
表8 芦ノ口遺跡第9次調査出土石器観察表……………	19		
表9 青葉山E遺跡における発掘調査一覧……………	27		
表10 青葉山E遺跡第9次調査遺構属性表……………	35		
表11 青葉山E遺跡第9次調査遺物集計表……………	35		
表12 青葉山E遺跡第9次調査遺物座標一覧表 (1)……………	36		

図 版 目 次

図版 1	芦ノ口遺跡第 9 次調査全景……………65	図版11	青葉山 E 遺跡第 9 次調査全景・土層断面…75
図版 2	芦ノ口遺跡第 9 次調査土層断面 (1)…………66	図版12	青葉山 E 遺跡第 9 次調査土層断面・土坑…76
図版 3	芦ノ口遺跡第 9 次調査土層断面 (2)…………67	図版13	青葉山 E 遺跡第 9 次調査土坑……………77
図版 4	芦ノ口遺跡第 9 次調査沢跡断面……………68	図版14	青葉山 E 遺跡第 9 次調査土坑・ 遺物出土状況……………78
図版 5	芦ノ口遺跡第 9 次調査火山灰堆積状況・ 遺物出土状況……………69	図版15	青葉山 E 遺跡第 9 次調査遺物出土状況……79
図版 6	芦ノ口遺跡第 9 次調査出土土器 (1)…………70	図版16	青葉山 E 遺跡第 9 次調査出土土器 (1)……80
図版 7	芦ノ口遺跡第 9 次調査出土土器 (2)…………71	図版17	青葉山 E 遺跡第 9 次調査出土土器 (2)……81
図版 8	芦ノ口遺跡第 9 次調査出土石器……………72	図版18	青葉山 E 遺跡第 9 次調査出土土器 (3)……82
図版 9	青葉山 E 遺跡第 9 次調査全景 (1)…………73	図版19	青葉山 E 遺跡第 9 次調査出土石器 (1)……83
図版10	青葉山 E 遺跡第 9 次調査全景 (2)…………74	図版20	青葉山 E 遺跡第 9 次調査出土石器 (2)……84

第 I 章 震災復旧に係る調査の概要

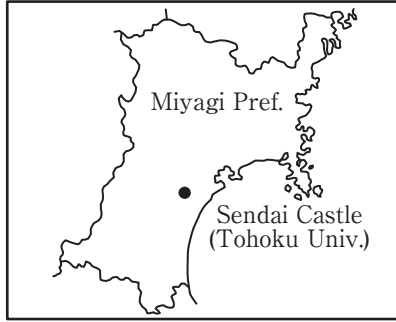
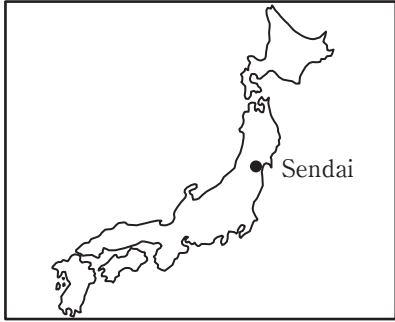
東北大学の各キャンパスには、縄文時代から近世までの各時期にわたる遺跡群が存在している（図1）。川内地区には、仙台城跡二の丸地区（川内南地区）、仙台城跡北方武家屋敷地区（川内北地区）などが位置し（図1-1）、これまでに複数回の調査が実施されている。また、青葉山地区には旧石器・縄文時代を主体とする青葉山の遺跡群（図1-6～8）が存在し、青葉山E遺跡を中心とした発掘調査が行われている。そのほかは、富沢地区に縄文時代・古代の粘土採掘坑が多数発見されている芦ノ口遺跡（図1-11）や、川渡・小乗浜地区に縄文時代の遺跡が位置している。これらの発掘調査の詳細については、これまでに『東北大学埋蔵文化財調査年報』や、2007年度からは『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』、2011年度からは『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』にて報告している。なお、これらの報告書は、東北大学の機関リポジトリTOUR (<http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/> 2015年3月参照) や、宮城県遺跡リポジトリ (<http://rar.miyagi.nii.ac.jp/> 2015年3月参照) でも公開している。

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、東北大学の施設も大きな被害を受けた。そのため、埋蔵文化財調査室では、これまでに復旧に伴う調査を実施してきた（表1）。2011年度には、仮設校舎・宿舎建設など応急的な工事がなされ、それに伴う立会調査6件を実施している。これらの調査については、『年次報告』2011にて報告している。

本格的な復旧工事は、平成23年度補正予算で措置されることとなった。この補正予算決定を受けて、2011年度末には、使用不能となった長町宿舎に代わり、富沢地区における新規宿舎の新築工事が計画された。この工事に伴う確認調査を2011年度末に行ったが、遺構・遺物などは確認できなかった（『年次報告』2011）。そして、2012年度には、本調査2件、確認調査1件、立会調査9件を実施した。確認調査は、青葉山北地区の青葉山E遺跡において実施したが、厚い盛土がなされている地域であり、包含層などは確認することはできなかった。また、立会調査では、いずれの調査でも遺構・遺物などは確認されていない。これらの確認調査・立会調査の詳細については、『年次報告』2012にて報告した。本調査は、青葉山北地区の青葉山E遺跡にて第9次調査、富沢地区の芦ノ口遺跡にて第9次調査を実施した。これらの本調査の報告が、本報告書となる。

表1 震災復旧に係る調査一覧
Tab.1 List of excavation for reconstruction from the great east japan earthquake.

調査種類	年度	地区	調査地点 (略号)	原因	調査期間	面積 (㎡)	時期	報告
本調査	2012	富沢	電子光学研究センターR I 実験棟東側 (TM9)	電子光学研究センターRI排水処理設備災害復旧工事	8/1~30	89.6	縄文・古代	『調査報告』4 (本報告書)
		青葉山北	サイバーサイエンスセンター 青葉山分室東側 (AOE9)	総合研究棟 (理学系) 新営その他工事	9/3~10/31	342.5	縄文	
確認調査	2011	富沢	富沢宿舎独身宿舎南側 (2011-13)	宿舎新築計画に伴う試掘調査	3/5・7・8・13・21・22	99.0	—	『年次報告』2011
	2012	青葉山北	生物学棟西側駐車場 (2012-10)	理学研究科車庫新築計画	11/19-20	36	—	『年次報告』2012
立会調査	2012	川内南	文系大講義棟A・B周辺 (2012-1)	講義棟回廊とりこわし柱補強工事	4/9	—	—	
		川内南	川内南キャンパス全域 (2012-2)	災害復旧 (文系4学部等) 改修工事	8/30、9/11・20	—	—	
		青葉山北	惑星プラズマ大気研究センターほか北側 (2012-3)	理学部構内道路外灯取設工事・圧送管理設工事	8/21、10/22	—	—	
		富沢	東北大学職員寮周辺 (2012-5)	地域支援施設新営その他工事	9/14~10/4	—	—	
		青葉山北	自然史標本館北側 (2012-6)	自然史標本館外構修繕工事	9/26	—	—	
		青葉山北	数学棟北側・南側 (2012-7)	数学棟改修その他工事	10/10・30、11/1、2/20	—	—	
		川内南	附属図書館1号館北側 (2012-9)	附属図書館改修機械設備工事	11/6	—	—	
		小乗浜	複合生態フィールド教育研究センター (2012-16)	総合研究棟等新営その他工事	3/7	—	—	
		青葉山北	理学部工場棟東側 (2012-18)	衛星データ解析風洞実験室新営工事	3/26	—	—	



- 1 : Ruin of Sendai Castle
- 2 : Kawauchi steles
- 3 : Kawauchi A Site
- 4 : Kawauchi B Site
- 5 : Sakuragaoka kouen Site
- 6 : Aobayama B Site
- 7 : Aobayama E Site
- 8 : Aobayama C Site
- 9 : Aobayama A Site
- 10 : Aobayama D Site
- 11 : Ashinokuchi Site



- 1 : 仙台城跡 2 : 川内古碑群 3 : 川内A遺跡 4 : 川内B遺跡 5 : 桜ヶ岡公園遺跡 6 : 青葉山B遺跡 7 : 青葉山E遺跡
- 8 : 青葉山C遺跡 9 : 青葉山A遺跡 10 : 青葉山D遺跡 11 : 芦ノ口遺跡 12 : 片平仙台大神宮の板碑 13 : 郷六大大日如来の碑
- 14 : 葛岡城跡 15 : 郷六城跡 16 : 郷六建武碑 17 : 沼田遺跡 18 : 郷六御殿跡 19 : 郷六遺跡 20 : 松ヶ岡遺跡
- 21 : 向山高裏遺跡 22 : 萩ヶ丘遺跡 23 : 茂ヶ崎城跡 24 : ニツ沢横穴墓群 25 : 萩ヶ岡B遺跡 26 : 八木山緑町遺跡
- 27 : ニツ沢遺跡 28 : 青山二丁目遺跡 29 : 青山二丁目B遺跡 30 : 杉土手 (鹿除土手) 31 : 砂押屋敷遺跡 32 : 砂押古墳
- 33 : 富沢遺跡 34 : 泉崎浦遺跡 35 : 金洗沢古墳 36 : 土手内窯跡 37 : 土手内遺跡 38 : 土手内横穴墓群 39 : 三神峯遺跡
- 40 : 金山窯跡 41 : 三神峯古墳群 42 : 富沢窯跡 43 : 裏町東遺跡 44 : 裏町古墳 45 : 原東遺跡 46 : 原遺跡 47 : 八幡遺跡
- 48 : 後田遺跡 49 : 町遺跡 50 : 神瀧山遺跡 51 : 御堂平遺跡 52 : 上野山遺跡 53 : 北前遺跡 54 : 佐保山東遺跡

図1 東北大学と周辺の遺跡
Fig. 1 Archaeological sites and Tohoku University

第Ⅱ章 芦ノ口遺跡第9次調査（TM9）

1. 芦ノ口遺跡の立地と周辺の遺跡

(1) 芦ノ口遺跡の立地

芦ノ口遺跡は、宮城県仙台市太白区三神峯一丁目に所在し、現在は東北大学の富沢地区として利用されている（図1-11）。この富沢地区は、隣接する三神峯公園とともに、第二次大戦後までは仙台陸軍幼年学校が置かれていた。戦後、旧制第二高等学校などの利用を経て東北大学により活用されてきた。

この芦ノ口遺跡の位置する場は、仙台市南部の三神峯丘陵北側に位置し、仙台上町段丘面に相当するとされている（中田高ほか1976、中川久夫1998）。三神峯丘陵は、台ノ原段丘面に位置する標高65m前後の丘陵で、南東側には沖積平野が広がる。台ノ原段丘面の形成年代は、約10万年前の酸素同位体ステージ5cに対比され（豊島正幸ほか2001）、仙台上町段丘の形成年代は約2.6万年前より新しいと推定されている（板垣直俊ほか1981、小岩直人ほか2005）。しかし、これまでの調査の結果からは、芦ノ口遺跡の下層から検出される泥炭層の年代は、約3万年前より古く、約6～8万年前より新しいことが指摘されている（『年報』14）。したがって、芦ノ口遺跡立地面の段丘対比、泥炭層の年代については今後検討が必要である。また、三神峯丘陵と沖積平野の境が、北西上がりの逆断層である長町-利府線（中田高ほか1976）に相当する。長町-利府線の北西側には、大年寺断層と鹿落坂断層が併行して走っており、副断層を形成している。長町-利府線と大年寺断層に挟まれた隆起帯が三神峯丘陵となる。なお、現在も確認できる三神峯丘陵と芦ノ口遺跡との間に存在する急斜面は、大年寺断層により形成された低断層崖にあたる。

芦ノ口遺跡は、最も標高が高い現在の大学宿舎がある地点近辺から北側に向かって舌状に張り出し、北側にある丘陵へと繋がる地形の上に位置している（図2-2・3）。東西両方向には沢が存在し、そちらに向かって傾斜している。今回の調査区は、その東側斜面部の谷頭部に相当する位置にあたる。この場所は、陸軍幼年学校時には運動場となっていて、その後も建物は存在していない（図2-4・5）。そのため、今回の調査では厚い盛土の下に旧表土層が確認でき、近代以降の攪乱は少なかったことがわかる。

(2) 芦ノ口遺跡の周辺遺跡

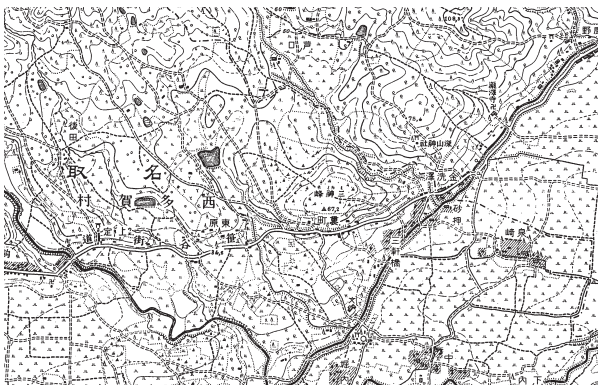
芦ノ口遺跡の周辺遺跡には、多くの遺跡が存在している。芦ノ口遺跡南側の三神峯公園一帯は、古くより縄文時代の遺跡として知られ（伊東信雄1950）、現在は三神峯遺跡として登録されている（図1-39）。これまでに6次の調査がなされ、縄文時代前期・中期の遺構・遺物が多数検出されている（1次：白鳥良一1974、2・3次：岩渕康治ほか1980、4・5次：佐伯修一2010、6次：大久保弥生ほか2009）。また、三神峯遺跡の南側には三神峯古墳群、富沢窯跡がある（図1-42・42）。三神峯古墳群は、円墳2基からなる古墳時代中期後半（5世紀後半頃）の古墳群とされてきた（伊東信雄1950、藤沢敦1995a）。しかし、平成19年（2007年）の三神峯遺跡第5次調査時に、新たに1基の円墳と円筒埴輪片を多く含む溝が1条検出され、さらに古墳群が広がるものと推定されている（佐伯修一ほか2010）。富沢窯跡には、4基の埴輪窯跡の存在が確認されており、うち1基は昭和49年（1974年）に発掘調査がなされている（渡部泰伸ほか1974、藤沢敦1995b）。

西側には、土手内横穴墓群、金山窯跡がある（図1-38・40）。土手内横穴墓群は、金洗沢を挟む両斜面に位置する。西側は昭和24年（1949年）の工事中に発見され、人骨4体分などが発見されている（伊東信雄1950）。また、対岸のB地点では、8世紀前半期の8基の横穴墓が調査されている（主浜光朗ほか1992）。

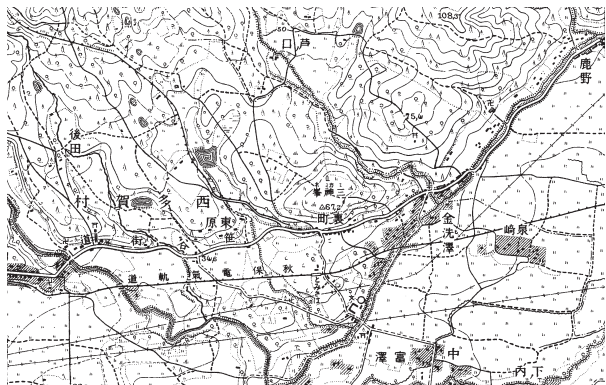
また、旧制第二高等学校正門前の道路傍には、かつて木戸口瓦窯跡と命名された古代の瓦窯跡も存在していたようである（内藤正恒1944、伊東信雄1950）。現在、その痕跡は確認できていないが、富沢窯跡、三神峯遺跡第5次調査時にも布目瓦などが出土している（渡邊泰伸ほか1974、佐伯修一ほか2010）。



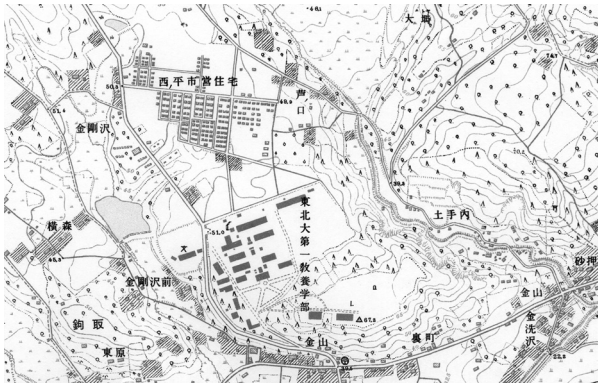
1. 富沢地区周辺地形空撮 (昭和22年 (1947年) 10月23日撮影)



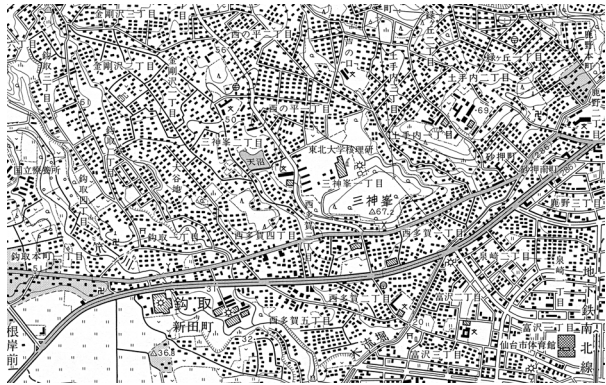
2. 富沢地区周辺地形図①
(明治38年 (1905年) 測量【仙臺南部】)



3. 富沢地区周辺地形図②
(昭和3年 (1928年) 測量【仙臺西南部】)



4. 富沢地区周辺地形図③
(昭和28年 (1953年) 年測量【仙臺南部】)



5. 富沢地区周辺地形図④
(平成4年 (1992年) 修正測量【仙臺西南部】)

図2 富沢地区周辺の地形
Fig. 2 Topographical map around Tomizawa campus

2・3・5 : S=1/40,000
4 : S=1/20,000

2. これまでの調査 (図3・表2)

芦ノ口遺跡は、昭和51年(1976年)の野球場建設工事の際に発見され、東北大学文学部考古学研究室により緊急の発掘調査がなされた(『年報』3)。その結果、縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器、須恵系土器などの遺物や、平安時代の竪穴住居などが発見され、周知の遺跡として登録されることとなった。その後、原子核理学研究施設において大規模な施設拡充計画が持ち上がったため、その計画に先立ち昭和60(1985)年度、昭和64(1989)年度、平成3(1991)年度の3次(TM1~3)にわたり、遺跡の内容と範囲確認のための調査がなされている(『年報』3・9)。それらの調査により、各所において縄文時代、古墳時代、平安時代の遺構・遺物などが確認され、富沢地区の全域を含む形に遺跡範囲が拡大した。また、それらの遺構確認面より下位から泥炭層が発見されている。この泥炭層の範囲は遺跡の北・西部に限られ、南・東部からは検出されていない。

平成8(1996)年度には、施設の電源室と照射・測定室の新営、排水管改修工事に伴う第4次調査(TM4)が実施された(『年報』14)。そのうちの1区からは、縄文時代晩期前葉の土器とそれに伴う粘土採掘坑12基などが発見された。排水管区からは古代の竪穴住居跡の一部が確認された。また、泥炭層から出土した植物遺体の同定、花粉分析がなされ、亜寒帯性針葉樹林がかつて存在していたことが判明している。

平成13(2001)年度には、第4次調査地点に予定されていた建物が変更されたため、新たな調査が必要となり、第5次調査(TM5)が実施された(『年報』19)。その結果、古墳時代前期塩釜式の土師器と共に粘土採掘坑と推定される土坑が10基発見された。また、平成16年(2004)年度には屋外排水管の改修に伴い、第3次調査N12区の隣接区域において第6次調査(TM6)がなされ、同様に古墳時代前期の粘土採掘坑と考えられる土坑7基が検出されている(『年報』21)。

平成21(2009)年度には、第7次(TM7)、第8次調査(TM8)が実施された(『調査報告』3)。第7次調査では、縄文土器や古墳時代中期引田式の土師器と共に、縄文時代と古代の粘土採掘坑が多数検出された。また、調査区南側にて泥炭層端部に近いと考えられる地点を確認することができ、泥炭層の分布範囲を新たに推定した。第8次調査では、遺構は確認できなかったが、旧表土層や自然の沢状の地形を確認することができた。

その後は、本報告の平成24(2012)年度第9次調査(TM9)のほか、平成25(2013)年度に第10次調査(TM10)を実施している。第10次調査では、遺構などが存在する層は全て削平されており、粘土採掘坑などは確認できなかった。この調査の詳細については、『年次報告』2013にて報告している。

表2 芦ノ口遺跡における調査一覧
Tab. 2 List of excavation of Ashinokuchi site

調査 回数	調査 年度	略称	目的	主な遺構など	主な遺物	文献	調査面積 (㎡)
試掘	1976	-	遺跡確認調査	竪穴住居(平安)、ピット	縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器	『年報』3	126
第1次	1985	TM1	遺跡範囲の確認と性格究明のための調査	溝跡、ピット、泥炭層など	縄文土器(前期)、石器、土師器、須恵器、埴輪		745
第2次	1989	TM2			縄文土器、石器、土師器	『年報』9	305.8
第3次	1991	TM3					202.5
第4次	1996	TM4	実験棟新営に伴う調査	竪穴住居跡(平安)、粘土採掘坑(縄文)、ピット、埋没林など	縄文土器(晩期)、石器	『年報』14	323
第5次	2001	TM5	実験棟新営に伴う調査	溝跡、粘土採掘坑(古墳)	土師器、石器	『年報』19	512
第6次	2004	TM6	屋外配水管布設に伴う調査	粘土採掘坑(古墳)	土師器	『年報』21	24.5
第7次	2009	TM7	実験棟新営に伴う調査	粘土採掘坑(縄文・古墳)	縄文土器、土師器	『調査報告』3	330.3
第8次	2009	TM8	特高変電所整備改修工事に伴う調査	沢跡	縄文土器(前期・中期)、石器	『調査報告』3	90.2
試掘	2011	2011-13	宿舍新築計画に伴う調査	無し	無し	『年次報告』2011	99
第9次	2012	TM9	設備災害復旧工事に伴う調査	沢跡	縄文土器(前期・晩期)石器	『調査報告』4 本報告	89.6
第10次	2013	TM10	研究棟増築に伴う調査	無し	土器	『年次報告』2013	292.1

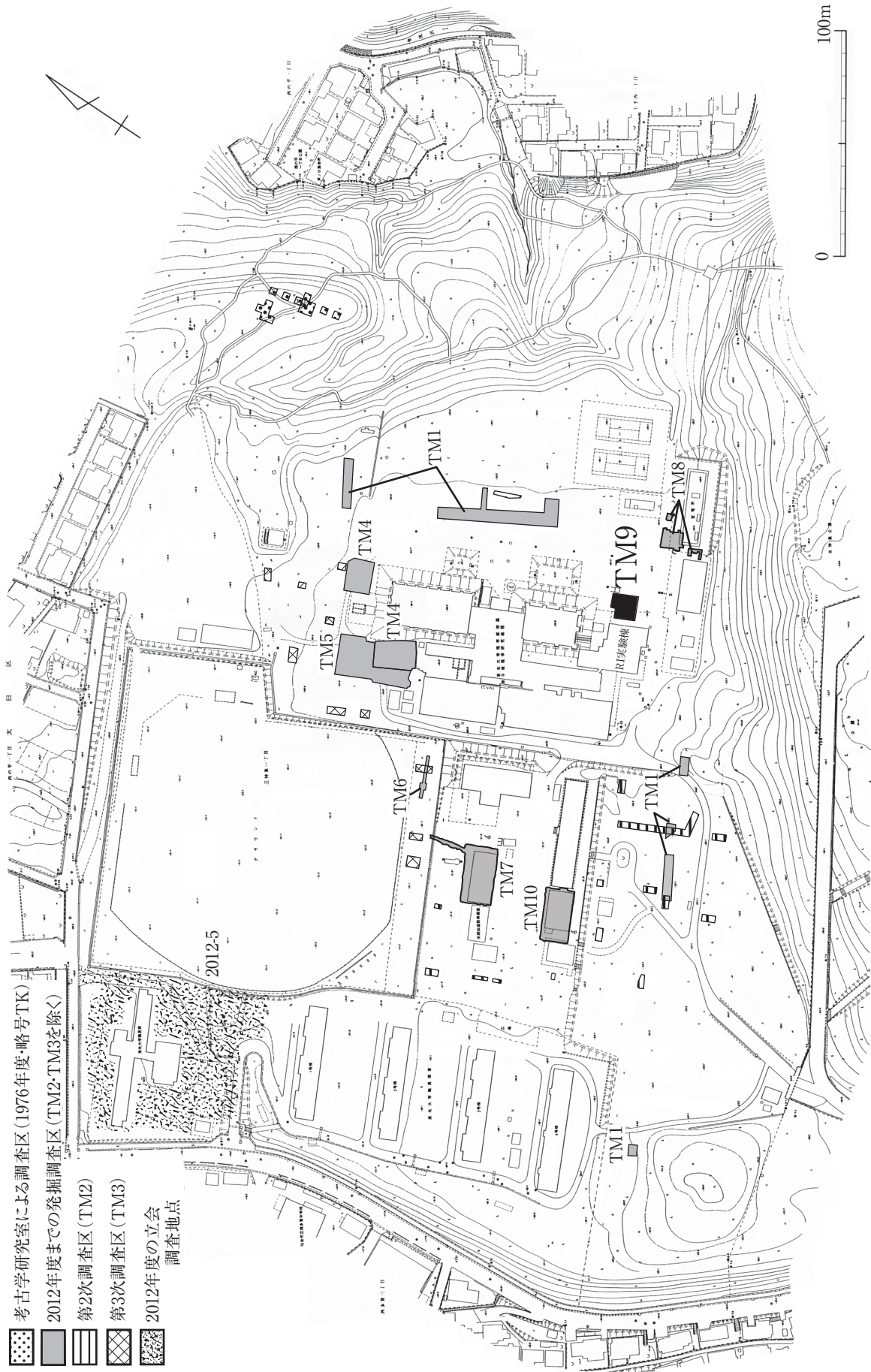


図3 富沢地区調査地点
 Fig. 3 Location of excavations at Tomizawa campus (TM i.e. Tomizawa Ashinokuchi site)

3. 調査経緯

(1) 調査地点の位置

今回の調査は、東日本大震災により被害を受けた電子光物理学研究センターのR I排水処理施設の新設工事に伴うものである。調査対象範囲は本体部の89.6㎡となり、R I実験棟の東側に位置する(図3)。その他の給排水管理設部分などについては、立会調査で対処することとした。しかし、本調査の結果から、給排水管設置などの深さの掘削には問題がないと判断し、立会調査は実施していない。

(2) 調査の経過

本調査区では、重機により現表土や盛土など(1層)を除去後、黒色の旧表土層(2層)をほぼ全面に検出した。この2層以下に関しては、手掘りにより調査を進めた。その結果、縄文土器・土師器・石器を主体とする遺物約150点を回収すると共に、調査区中央部にて東西に走る沢状の落ち込みを確認した(図4)。また、調査区北東側は、既存の施設により深くまで掘削されていることが明らかであったことから、調査区へ下るためのスロープとした。

(3) 調査の方法

調査にあたっては、調査区に合わせて任意座標を設定し、それに基づき遺物の取上げ、平面図、断面図の作成を行った。3層以下の遺物については座標を計測し取上げ、1・2層の遺物は層別に取上げている。座標の基準点は図4に示してある。平面図・断面図は、縮尺1/20で作成した。写真は35mmのモノクロとカラーリバーサル、デジタルカメラ(ニコンD5100)で適宜撮影した。出土した土器は非常に脆いため、洗浄後にアクリル系合成樹脂「バインダーNo.17」を含浸させて補強した。

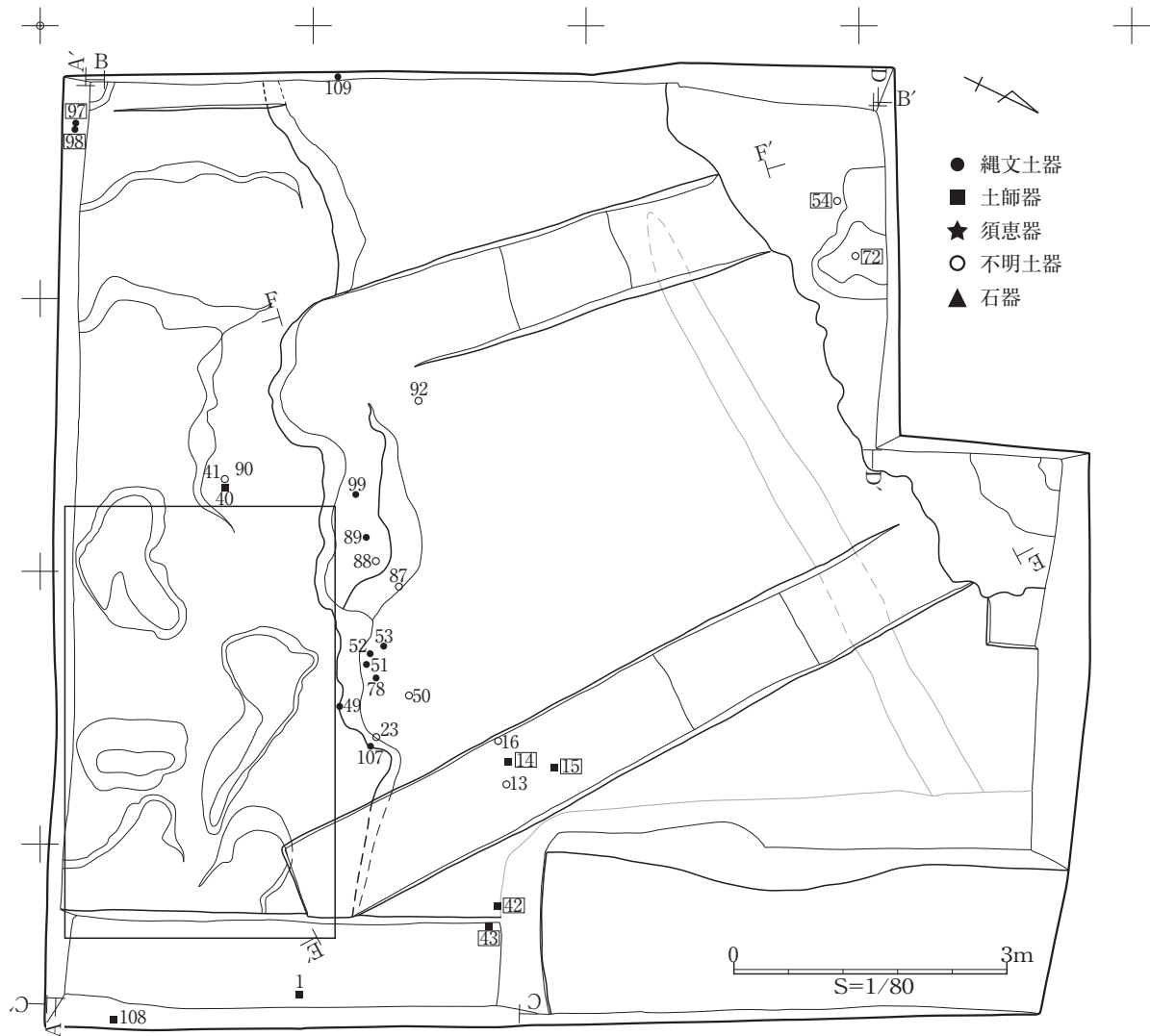
4. 基本層序

本調査区の基本層序は、大きく6層に分けることができる(図5・6)。1層は現表土、近現代の盛土・攪乱層である。2層が旧表土層となる。この2層は、色調・含有物などの差異により2a~2e層に細分した。遺物も多少出土しているが、煉瓦などの新しい遺物も含まれる(表3)。3層は主体となる遺物包含層であり、褐色を呈する。4層は、地山と考えられる5層と含有物などの特徴が類似するが、やや褐色を呈し、全体としての特徴は3層に近い。色調や含有物などの特徴により4a層と4b層に分けられる。この4層からは、遺物が出土していない。5層は粘土層、6層は砂礫層である。5層上面は侵食による凹凸が著しい。4層がこの5層上面を覆うように形成され、窪んだ箇所には3層が堆積する。また、確認のため、5・6層を部分的に掘り下げたが、この5・6層からは遺物などは確認されていない。

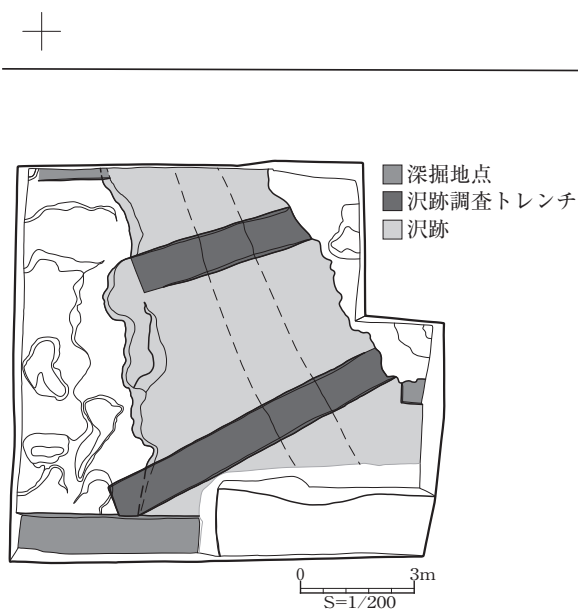
5. 検出遺構

明らかに人為的な遺構は確認できなかったが、自然に形成された沢状の落ち込みを確認した(図4)。この沢状の落ち込みは、西端幅約4.4mほどであるが、東端に向かうにつれて幅が広がる。この沢状の落ち込みの確認のため、2箇所幅1mほどのトレンチを設定した(図4-②)。この沢状の落ち込みの深さは、確認面から40cmほどであり、底面の標高の最低値は東側の方が僅かに低い。底面はほぼ平らで、岸部に向かって緩やかに立ち上がる。こうした調査の結果、西から東へと流れる沢跡であることが判明した。

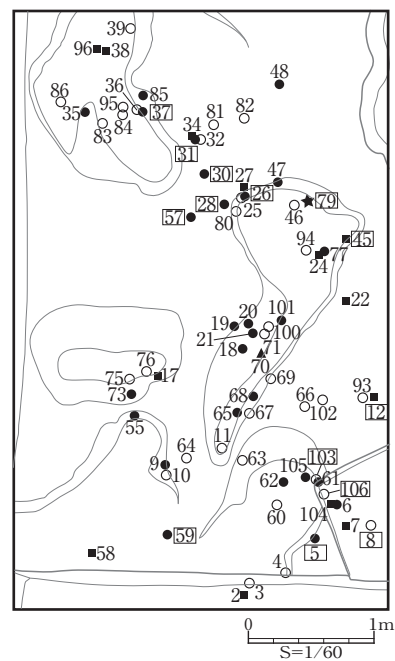
沢跡の埋土は、東側で6枚、西側で8枚を確認した(図7)。これらの埋土は、地点によって細かな特徴は異なっているが、東側と西側の埋土の対応関係、基本層序との対応関係は把握することができた(図8)。沢跡埋土の1層と2層は、基本層序の2d層と2e層にそれぞれ相当し、黒色を基調とする旧表土層である(本文では①層と



① 芦ノ口遺跡第9次調査最終状況平面図



② 調査状況模式図

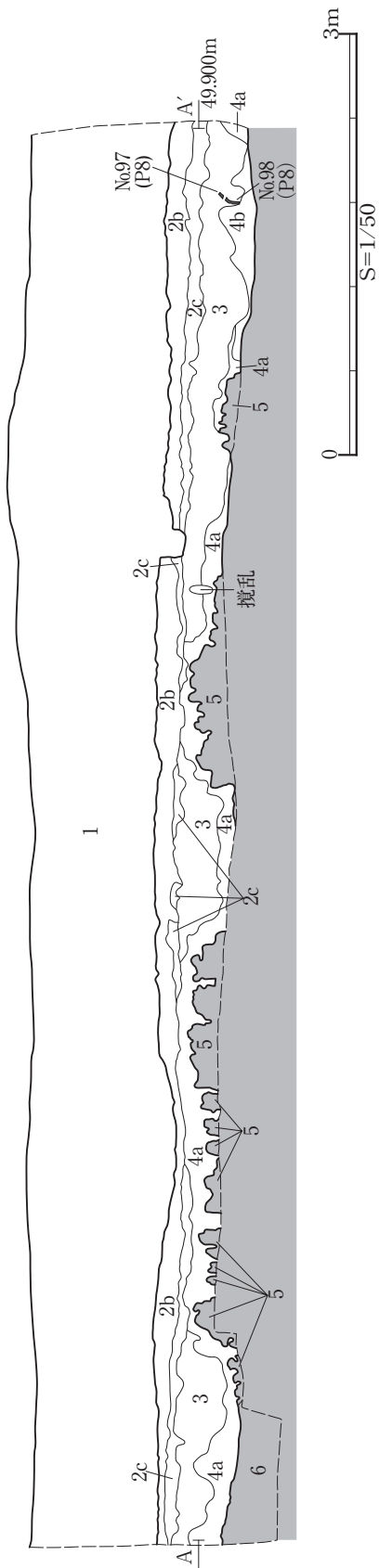


③ 遺物分布状況拡大図

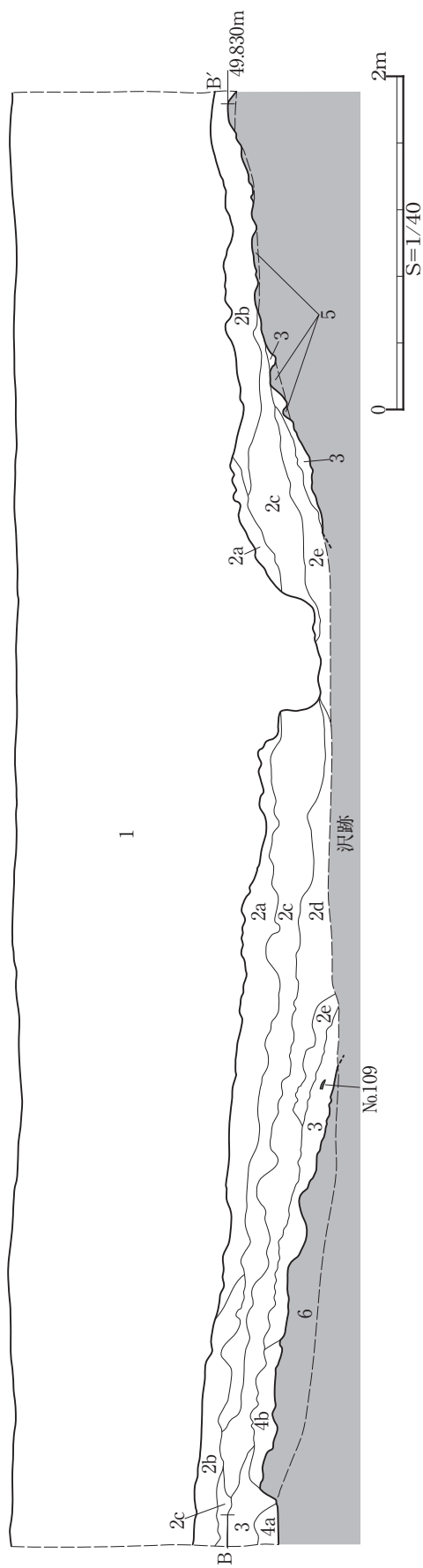
* 図中遺物の番号は、表4・5に対応する。

図4 芦ノ口遺跡第9次調査平面図
Fig. 4 Plan at TM9

①調査区南壁土層断面図



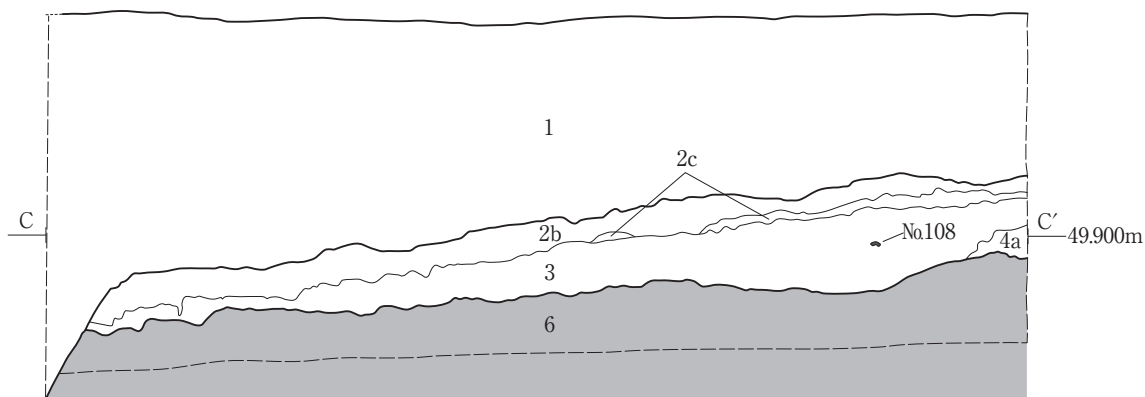
②調査区西壁土層断面図



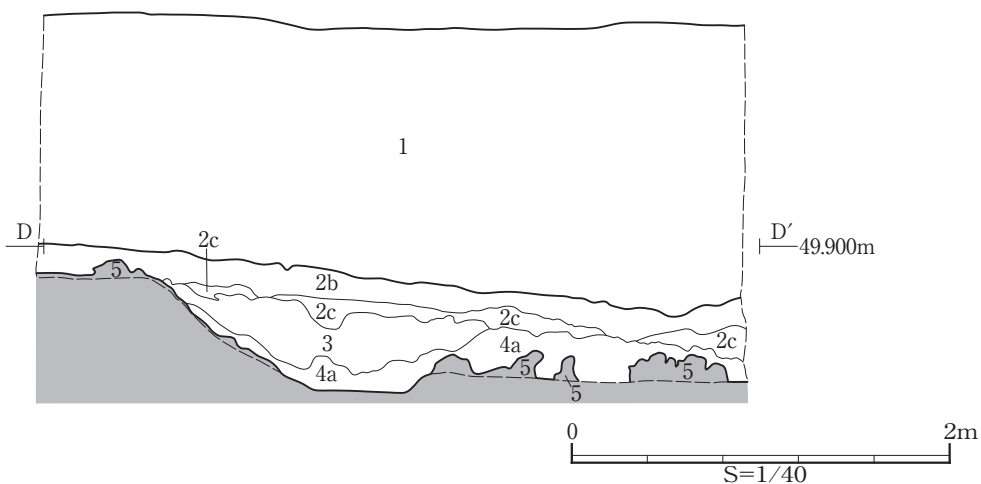
* 図中遺物の番号は、表5に対応する。

図5 芦ノ口遺跡第9次調査断面図(1)
Fig.5 Cross sections of TM9(1)

①調査区東壁土層断面図



②調査区北壁西半土層断面図



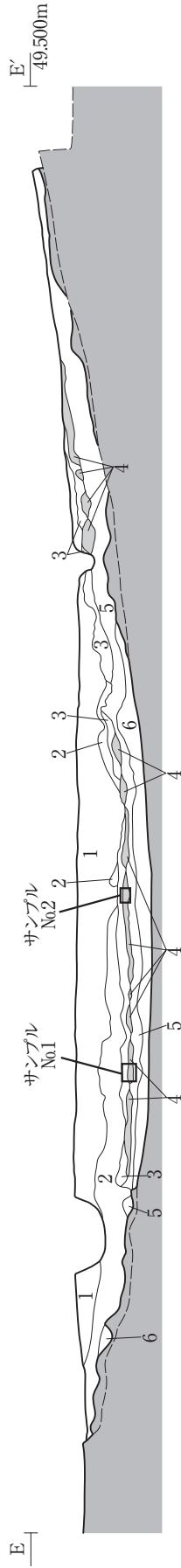
* 図中遺物の番号は、表5に対応する。

基本層序

- 1 近現代の表土及び盛土等の攪乱
- 2a 10YR2/3黒褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 径1mm-5mm程度の白色土粒、黄色土粒を極少量含む 植物の根が部分的に入る 礫が僅かに含まれている
- 2b 10YR3/4暗褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 径1mm-20mm程度の白色土粒、黄色土粒を多く含む
- 2c 10YR2/2黒褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 径1mm-5mm程度の白色土粒、黄色土粒を極少量含む 植物の根が部分的に入る 礫が僅かに含まれている
- 2d 10YR3/2黒褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり中 径1mm-5mm程度の白色土粒、黄色土粒を少量含む
- 2e 10YR1.7/1黒色 粘土質シルト 粘性強・しまり弱 径1mm程度の白色土粒、黄色土粒を少量含む 2d層よりも粘性が強い
- 3 10YR4/4褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり中 径1mm程度の白色土粒、黄色土粒を極少量含む 遺物が含まれる 礫を少量含む
- 4a 10YR5/6黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 鉄分を斑状に含む
- 4b 10YR4/6褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 径1mm-5cm程度の礫を少量含む
- 5 10YR6/2灰黄褐色 粘土 粘性中・しまり中 鉄分を多く含む 径1mm-5mm程度の白色土粒を多く含む 地山と考えられる
- 6 2.5Y5/2暗灰黄色 砂 粘性なし・しまり中 礫を多量に含む 地山と考えられる

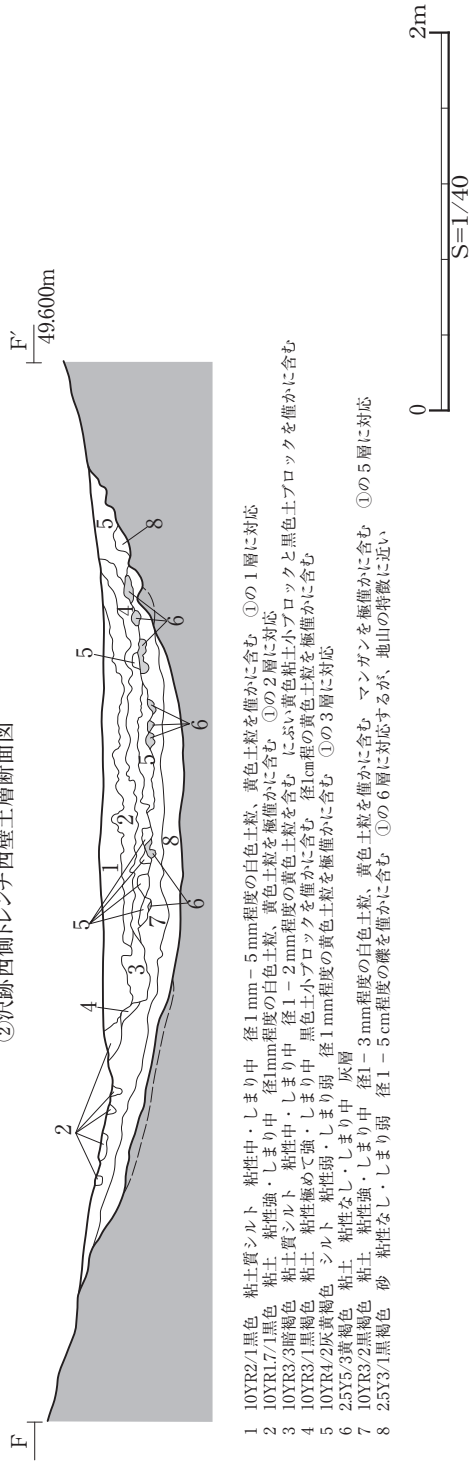
図6 芦ノ口遺跡第9次調査断面図(2)
Fig. 6 Cross sections of TM9 (2)

① 沢跡東側トレンチ東壁土層断面図



- 1 10YR2/2黒褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 径1mm-5mm程度の白色土粒、黄色土粒を多く含む ②の1層に対応
- 2 10YR1/7黒色 粘土 粘性強・しまり中 径1mm-5mm程度の白色土粒を僅かに含む、また径5mm程度の黄色土粒を部分的に含む ②の2層に対応
- 3 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性弱・しまり弱 径1mm程度の黄色土粒を僅かに含む、4層の火山灰が僅かに混入している ②の5層に対応
- 4 2.5Y5/3黄褐色 粘土 粘性なし・しまり中 灰層 鑑定のためのサンプルをNo.1、No.2の場所にて採取した。
- 5 10YR4/4褐色 粘土 粘性強・しまり中 径1mm-5mm程度の白色土粒、黄色土粒を僅かに含む ②の7層に対応
- 6 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 径1mm-5mm程度の白色土粒、黄色土粒を多く含む ②の8層に対応

② 沢跡西側トレンチ西壁土層断面図



- 1 10YR2/1黒色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 径1mm-5mm程度の白色土粒、黄色土粒を僅かに含む ①の1層に対応
- 2 10YR1/7黒色 粘土 粘性強・しまり中 径1mm程度の白色土粒、黄色土粒を僅かに含む ①の2層に対応
- 3 10YR3/3暗褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 径1-2mm程度の黄色土粒を多く含む、細かい黄色粘土小ブロックを僅かに含む
- 4 10YR3/1黒褐色 粘土 粘性極めて強・しまり中 黒色土小ブロックを僅かに含む、径1cm程度の黄色土粒を僅かに含む
- 5 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性弱・しまり弱 径1mm程度の黄色土粒を僅かに含む ①の3層に対応
- 6 2.5Y5/3黄褐色 粘土 粘性なし・しまり中 灰層
- 7 10YR3/2黒褐色 粘土 粘性強・しまり中 径1-3mm程度の白色土粒、黄色土粒を僅かに含む、マンガンを僅かに含む ①の5層に対応
- 8 2.5Y3/4黒褐色 砂 粘性なし・しまり弱 径1-5cm程度の礫を僅かに含む ①の6層に対応するが、地山の特徵に近い

図 7 芦ノ口遺跡第9次調査断面図 (3)
Fig. 7 Cross sections of TM9 (3)

まとめる。以下同様)。そして西側埋土3～5層、東側埋土3層は、基本層序3層の土質に類似するが、部分的に2層由来の黒色土が混ざる(②層)。西側埋土6層・東側埋土4層として灰層が認められた。この灰層は、最大で10cmほどの層厚で、所々途切れてはいるが面的に広がる(③層)。この灰は、十和田aテフラであるという鑑定結果が出ている(p. 21)。灰層の下層の西側埋土7層、東側埋土5層は、基本層序の3層に対応する(④層)。最下層の西側埋土8層、東側埋土6層は地山に類似する土層であり、ほぼ基本層序4層に対応するものと考えられる(⑤層)(図8)。

この沢跡を調査した2本のトレンチ内の出土遺物は、東側のトレンチから4点のみである。出土層は④層であり、基本層序3層の遺物となる。その種類は土師器(図版7:P18・19)と不明土器であった。これらの土師器は、ロクロ整形の内面に黒色処理がされたものである。

また、この沢跡の岸部では、落ち込みに向かって侵食された不整形な窪地が多数認められた。当初は遺構として調査を進めたが、形状が不規則であること、埋土が基本層序3・4層の特徴と変わらないことなどから、自然の窪みとして認定した。

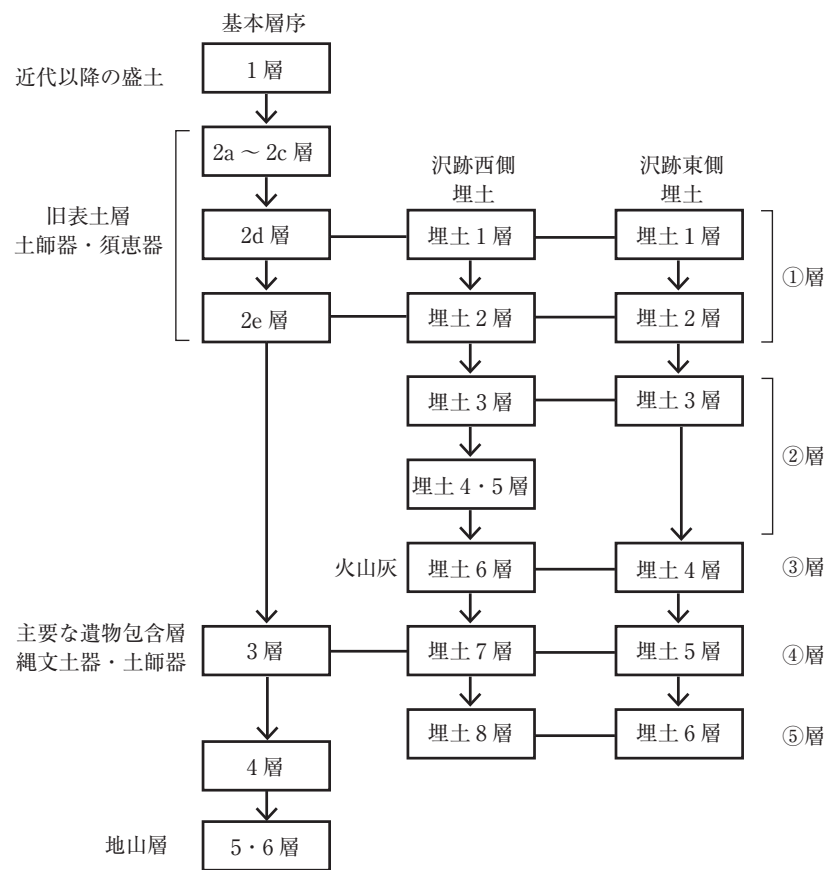


図8 芦ノ口遺跡第9次調査における層の対応関係
Fig. 8 Stratigraphic relationship of TM9

6. 出土遺物

出土した遺物は、1層、2層（旧表土）出土の遺物については、日付と層位を記録し、基本層序3層出土の遺物については、日付、層位のほか、出土位置を平面図に記録して取り上げている（図4、表4・5）。

出土遺物の点数は、表3に示す通りである。2層（旧表土）からは、煉瓦など近代以降の遺物を除くと、土師器5点、石核1点のみの出土である。3層からは、縄文土器（可能性が考えられるものも含む）36点、土師器（可能性が考えられるものも含む）20点、須恵器1点、時期不明の土器41点、石器1点の合計98点が出土した。

調査時には、ピット1、ピット2として取り上げた遺物が8点ある。検出遺構の項目でも述べているが、これらのピットは、形状が不規則であること、埋土が基本層3層の特徴と変わらないことから、自然の窪みと判断した。そのため、遺物は基本層序3層に帰属させて報告している。沢状の地形のため、3層からは縄文土器も土師器も出土しており、層位的な時期差は認められない。

図化して掲載した土器には、登録番号P1～20の番号を、石器には登録番号S1～2の番号を付している。遺物出土位置属性表、観察表には、登録番号と、調査時に出土位置を記録した取上げ番号の両方が記載されている。図、図版に付されている番号は、登録番号である。

(1) 土器（図9・10、表3～7、図版5～7）

芦ノ口遺跡の調査で出土した土器に共通することであるが、大部分の土器は、保存状態が非常に悪く、「水を含んだクッキー」状であることが多い。今回の調査で出土した土器も、脆弱なものが多く、そのまま取り上げると崩壊して土器の形状を留められないものも多数あった。そのため、調査現場では、濡らしたキムタオルで養生し周囲の土ごと取り上げ、整理室に持ち帰ってから土を洗浄するなど、遺物の取り上げには細心の注意を払った。また、洗浄・乾燥の後には、アクリル系合成樹脂「バインダーNo.17」を含浸させて補強をしている。それでも、土器の器面はひび割れた状態のものがほとんどである。破片の割れ口がもろいため、微細に剥落してしまうものも多く、接合できる資料は少なかった。例えば、P5の土器は、出土状況の写真（図版5-3）からもわかるように、破片に分かれてはいるものの、一個体として比較的まとまって出土した土器である。しかし、整理作業の課程で接合を行っても、割れ口がしっかりと接合する状態にはなかった。

接合、同一個体の同定を行った後、口縁部破片や底部破片を中心として、残存状態のよいもの、文様や調整痕などの土器の特徴がわかるものを抽出して図化している。抽出した資料は、20点である（図9・10、図版6・7）。これらの特徴については、観察表にまとめている（表6・7）。

脆弱な土器では器面の様子が不明瞭なものも多く、文様や調整痕が観察できないものも多かった。縄文土器、土師器と断定できないが可能性が考えられるものについては、「縄文土器?」、「土師器?」とし、これら以外の時期が断定できない土器については、時期不明土器とした。

表3 芦ノ口遺跡第9次調査遺物集計表
Tab. 3 Distribution of various implements from TM9

	土器												石器			その他	合計 点数	
	縄文土器			土師器			須恵器			不明土器			点数	点数	重さ (g)			重さ/ 点数
	点数	重さ (g)	重さ/ 点数	点数	重さ (g)	重さ/ 点数	点数	重さ (g)	重さ/ 点数	点数	重さ (g)	重さ/ 点数						
1層				2	7.9	4.0							2					2
2層				5	33.9	6.8							5	1 (石核)	81.5	81.5	煉瓦 7	13
3層	36	924.9	25.7	20	152.2	7.6	1	13.7	13.7	41	224.1	5.5	98	1 (剥片)	4.4	4.4		99
合計	36	924.9	25.7	27	194.0	7.2	1	13.7	13.7	41	224.1	5.5	105	2	85.9	43.0	7	114

*土器の重さは保存処理後の重さである。

表4 芦ノ口遺跡第9次調査遺物座標一覧表(1)
 Tab. 4 The coordinates of the implements from TM9 (1)

取上げ番号	登録番号	層	種類	X座標	Y座標	Z座標	図	図版	
1		3層	土師器	2.850	10.655	49.660	—	—	
2		3層	土師器	2.091	9.920	49.708	—	—	
3		3層	不明土器	2.138	9.821	49.704	—	—	
4		3層	不明土器	2.423	9.738	49.669	—	—	
5	P06	3層	縄文土器	2.659	9.466	49.640	9	6	
6		3層	縄文土器	2.840	9.194	49.599	—	—	
7		3層	土師器?	2.909	9.370	49.618	—	—	
8	P12	3層	不明土器	3.103	9.362	49.574	—	7	
9		3層	縄文土器	1.470	8.881	49.728	—	—	
10		3層	不明土器	1.479	8.964	49.739	—	—	
11		3層	不明土器	1.920	8.750	49.710	—	—	
12	P17	3層	土師器	3.131	8.337	49.553	10	7	
13		3層相当	不明土器	5.126	8.343	49.279	—	—	
14	P18	3層相当	土師器	5.145	8.084	49.248	—	7	
15	P19	3層相当	土師器	5.654	8.157	49.104	—	7	
16		3層相当	不明土器	5.035	7.865	49.256	—	—	
17		3層	土師器?	1.413	8.182	49.708	—	—	
18	接合	3層	縄文土器	9.944	7.963	49.718	—	—	
19				2.022	7.782	49.727	—	—	
20		3層	縄文土器	2.132	7.761	49.718	—	—	
21		3層	縄文土器	2.167	7.837	49.704	—	—	
22		3層	土師器	2.907	7.587	49.585	—	—	
23		3層	不明土器	3.692	7.819	49.495	—	—	
24		3層	土師器	2.694	7.219	49.570	—	—	
25		3層	不明土器	2.073	6.764	49.740	—	—	
26	接合	3層	縄文土器	2.103	6.756	49.736	9	6	
28				1.939	6.809	49.696			
27		3層	土師器?	2.091	6.679	49.720	—	—	
29				欠番					
30	P10	3層	縄文土器	1.782	6.574	49.665	—	6	
31	P02	3層	縄文土器	1.709	6.303	49.683	9	6	
32		3層	不明土器	1.753	6.301	49.725	—	—	
33				欠番					
34		3層	土師器	1.685	6.275	49.668	—	—	
35		3層	縄文土器?	0.835	6.084	49.668	—	—	
36		3層	不明土器	1.245	6.062	49.671	—	—	
37	P01	3層	縄文土器	1.293	6.081	49.692	9	6	
38		3層	土師器	1.008	5.604	49.684	—	—	
39		3層	不明土器	1.201	5.421	49.673	—	—	
40		3層	土師器	2.038	5.081	49.703	—	—	
41		3層	不明土器	2.030	4.985	49.693	—	—	
42	P20	3層	土師器	5.028	9.675	49.327	—	7	
43	P16	3層	土師器	4.928	9.896	49.359	10	7	
44				欠番					
45	P15	3層	土師器	2.902	7.084	49.583	10	7	
46		3層	不明土器	2.496	6.820	49.660	—	—	
47		3層	縄文土器?	2.365	6.640	49.615	—	—	
48		3層	縄文土器	2.378	5.864	49.573	—	—	
49		3層	縄文土器	3.291	7.482	49.585	—	—	
50		3層	不明土器	4.055	7.363	49.436	—	—	
51		3層	縄文土器	3.586	7.021	49.514	—	—	
52				3.627	6.902	49.521	—	—	
53		3層	縄文土器	3.775	6.819	49.456	—	—	
54	P11	3層	不明土器	8.760	1.922	49.319	—	6	

表5 芦ノ口遺跡第9次調査遺物座標一覧表(2)
 Tab.5 The coordinates of the implements from TM9 (2)

取上げ番号	登録番号	層	種類	X座標	Y座標	Z座標	図	図版	
55		3層	縄文土器	1.229	8.496	49.715	—	—	
56		欠番							
57	P09	3層	縄文土器	1.673	6.918	49.691	9	7	
58		3層	土師器	0.889	9.584	49.733	—	—	
59	P04	3層	縄文土器	1.488	9.436	49.693	9	6	
60		3層	不明土器	2.359	9.202	49.660	—	—	
61		3層	縄文土器	2.689	9.017	49.574	—	—	
62		3層	縄文土器	2.411	9.018	49.662	—	—	
63		3層	不明土器	2.084	8.846	49.687	—	—	
64		3層	不明土器	1.640	8.829	49.701	—	—	
65		3層	縄文土器?	2.043	8.468	49.654	—	—	
66		3層	不明土器	2.578	8.417	49.577	—	—	
67		3層	不明土器	2.139	8.474	49.621	—	—	
68		3層	縄文土器	2.170	8.338	49.601	—	—	
69		3層	不明土器	2.310	8.201	49.573	—	—	
70	S2	3層	石器	2.230	8.001	49.578	11	8	
71		3層	不明土器	2.259	7.844	49.586	—	—	
72	P13	3層	不明土器	8.958	2.527	49.402	—	7	
73		3層	縄文土器	1.202	8.320	49.653	—	—	
74		欠番							
75		3層	不明土器	1.188	8.202	49.696	—	—	
76		3層	不明土器	1.322	8.140	49.643	—	—	
77		3層	縄文土器	2.736	7.189	49.489	—	—	
78		3層	縄文土器	3.692	7.168	49.432	—	—	
79	P14	3層	須恵器	2.603	6.796	49.549	10	7	
80		3層	不明土器	2.035	6.870	49.648	—	—	
81		3層	不明土器	1.857	6.182	49.671	—	—	
82		3層	不明土器	2.099	6.132	49.628	—	—	
83		3層	不明土器	0.975	6.172	49.618	—	—	
84		3層	不明土器	1.134	6.106	49.658	—	—	
85		3層	縄文土器	1.296	5.947	49.604	—	—	
86		3層	不明土器	0.644	6.003	49.661	—	—	
87		3層	不明土器	3.945	6.163	49.391	—	—	
88		3層	不明土器	3.690	5.884	49.438	—	—	
89		3層	縄文土器?	3.584	5.623	49.438	—	—	
90		3層	不明土器	2.119	4.958	49.604	—	—	
91		欠番							
92		3層	不明土器	4.158	4.117	49.194	—	—	
93		3層	不明土器	3.037	8.350	49.532	—	—	
94		3層	不明土器	2.590	7.179	49.451	—	—	
95		3層	不明土器	1.139	6.040	49.602	—	—	
96		3層	土師器	0.935	5.588	49.550	—	—	
97	接合	P08	3層	縄文土器	0.390	1.065	—	9	6
98					0.380	1.135			
99		3層	縄文土器	3.470	5.152	49.296	—	—	
100		3層	不明土器	2.292	7.787	49.527	—	—	
101		3層	縄文土器	2.395	7.737	49.491	—	—	
102		3層	不明土器	2.722	8.366	49.525	—	—	
103	P07	3層	縄文土器	2.669	8.998	49.563	9	6	
104		3層	土師器?	2.786	9.187	49.539	—	—	
105		3層	縄文土器	2.585	8.980	49.549	—	—	
106	P03	3層	縄文土器	2.730	9.116	49.487	9	6	
107		3層	縄文土器	3.630	7.919	49.320	—	—	
108		3層	土師器	0.809	10.932	—	—	—	
109		3層	縄文土器	3.271	0.557	—	—	—	

【縄文土器】(図9、表6、図版6・7)

縄文土器は、13点を提示した。P1は、体部の小破片であるが、特徴的な文様がみられ、S字状連鎖沈文(撚糸文)ではないかと推測される。縄文時代前期前葉の大木2b式に相当する土器と考えられる。宮城県利府町六田遺跡(庄子敦ほか1987)の第1段階の土器群では、S字状連鎖沈文をもつ大木2b式土器が多数出土している。

P2は、粗製深鉢の口縁部である。文様はなく、LR縄文が施文される。P3~7は、口唇部に刻み目が施され、小波状口縁を呈する土器である。口縁部には2条もしくは3条の平行沈線文が施文されるが、いずれも平行沈線文に刻み目などは伴っていない。P6・7は、小波状口縁に小突起が展開し、平行沈線の1条目は小突起に沿うように施文される。器形から、P5は深鉢に、P3・4・6・7は鉢と考えられる。P8は、鉢の体部下半部分である。2条の平行沈線で区切られ、それより下部は縄文が磨り消されているが、沈線の間には縄文が残っている。P9は、深鉢の底部である。底部外面には網代痕が観察される。体部下半には、縄文が施文されているとみられるが、器面がひび割れし、表面が剥落した部分があるなど、器面の状態が悪く、詳細は観察できない。

P3~7は、口唇部の小突起や小波状口縁、口縁部の平行沈線文などの特徴から、縄文時代晩期前葉の大洞BC式に相当する土器と考えられる(須藤 隆ほか1995、小林圭一2010)。P2は縄文のみの破片であり、P8、P9は口縁から体部の文様が不明なため、年代を絞ることは難しいが、縄文時代晩期の土器と推測される。

これまでの調査では、東北大学考古学研究室による調査において、縄文時代早期、前期大木2式相当、中期大木9~10式、後期宮戸Ⅲb式の土器が出土している(『年報』3)。第1次調査では、近代以降の層に含まれて縄文土器が出土している。時期の判明するものでは、縄文時代前期大木4式から中期初頭大木6式の土器が確認されている(『年報』3)。第2次・3次調査では、縄文土器は出土しているが、時期が判明する土器は出土していない。第4次調査から縄文時代の粘土採掘坑から、晩期の大洞BC式土器が多く出土している(『年報』14)。第7次調査では、縄文時代と古墳時代の粘土採掘坑が検出され、縄文土器が出土している。保存状態の悪い土器が多く、時期が判明するものはなかったが、縄文時代前期あるいは中期頃の土器と推測された(『調査報告』3)。第8次調査では、調査地点の南側に三神峯公園に続く急斜面があり、丘陵側から崩落したと考えられる層序から、縄文時代前期後葉の大木5式から縄文時代中期初頭の大木7a式までの縄文土器が出土している(『調査報告』3)。今回出土した縄文時代晩期前葉の土器は、第4次調査で確認された土器とほぼ同じ時期と考えられる。

表6 芦ノ口遺跡第9次調査出土縄文土器観察表
Tab.6 Attribute list of Jomon pottery from TM9

登録番号	取上げ番号	層位	器種	時期	部位	内面調整	外面調整	特徴	器厚(mm)	備考	図	図版
P01	37	3層	深鉢	前期?	体部	不明	不明	撚糸文? (S字状沈文?)	9		9	6
P02	31	3層	深鉢	不明	口縁	ナデ	LR縄文		6		9	6
P03	106	3層	鉢	晩期前葉	口縁	ミガキ	縄文	口唇部刻み目充填 平行沈線文3条	4	海綿骨針	9	6
P04	59	3層	鉢	晩期前葉	口縁部	不明	RL縄文	平行沈線文2条	4		9	6
P05	26・28 接合	3層	深鉢	晩期前葉	口縁~ 体部	ナデ	RL縄文	口唇部刻み目充填 平行沈線文2条	5	口縁部外面炭化物付着	9	6
P06	5	3層	鉢	晩期前葉	口縁~ 体部	ミガキ	LR縄文?	口縁部小突起 口唇部刻み目充填 平行沈線文3条	4	海綿骨針 口縁~体部内面炭化物付着	9	6
P07	103	3層	鉢	晩期前葉	口縁~ 体部下	ミガキ	LR縄文	口縁部小突起 口唇部刻み目充填 平行沈線文3条	4	海綿骨針 体部上半内面炭化物付着	9	6
P08	97・98 接合	3層	鉢	晩期	体部下	ミガキ	縄文、 ミガキ	LR縄文? 平行沈線文2条	4		9	6
P09	57	3層	深鉢	晩期?	底部	ナデ	LR縄文?	底部網代圧痕	5		9	7
P10	30	3層	深鉢	晩期?	体部	不明	RL縄文		5		—	6
P11	54	3層	深鉢?	不明	体部	ナデ	縄文		6	海綿骨針	—	6
P12	8	3層	深鉢?	不明	体部	ナデ	不明		11		—	7
P13	72	3層	不明	不明	体部	ナデ	ナデ?	沈線文?	6	海綿骨針	—	7

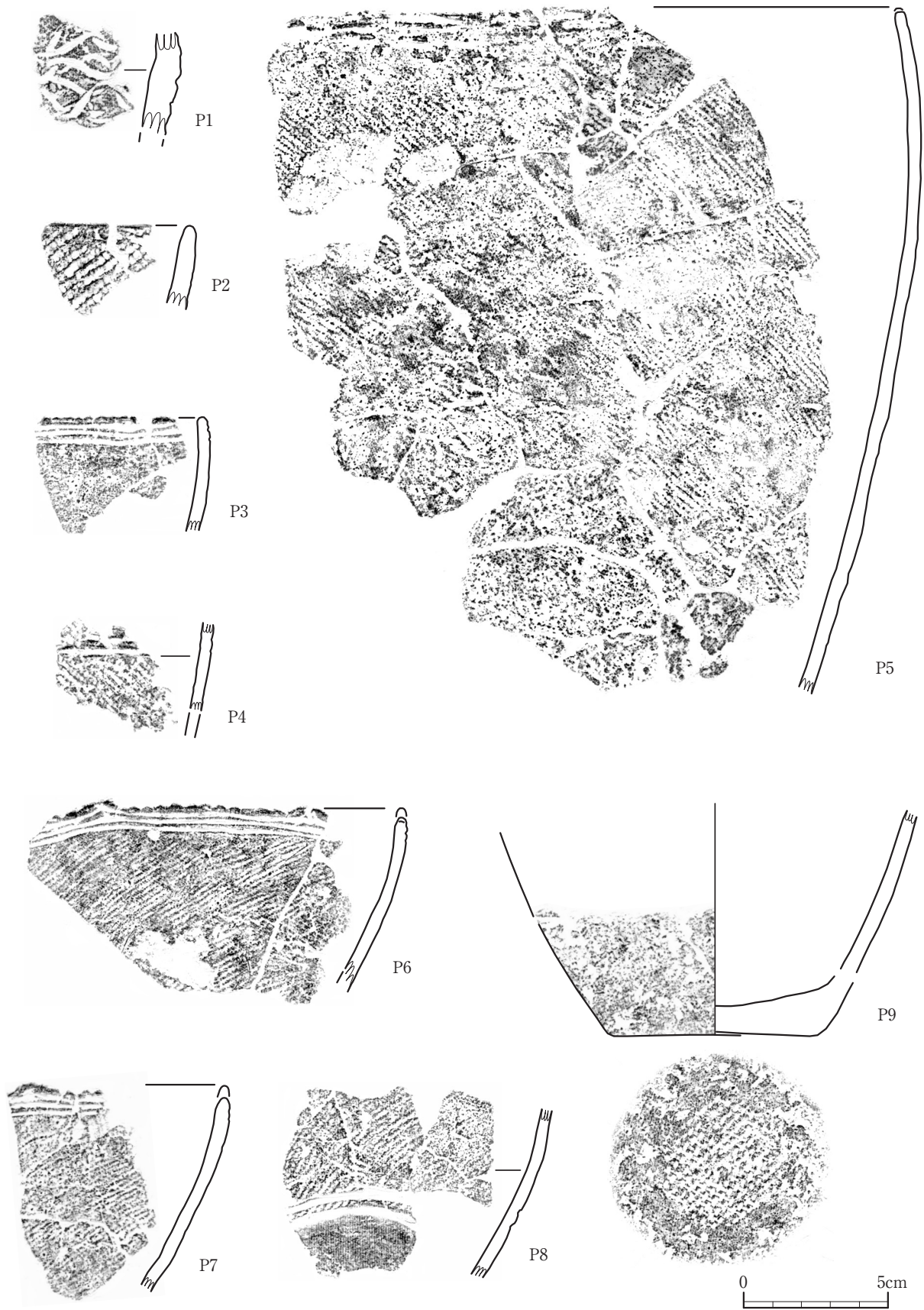


図9 芦ノ口遺跡第9次調査出土土器 (1)
 Fig. 9 Pottery from TM9 (1)

【土師器・須恵器】（図10、表7、図版7）

須恵器は1点の出土である（P14）。坏の底部破片で、平安時代に属すると考えられるが、詳細は不明である。

土師器は、比較的器面の状態のよい6点を提示した（P15~20）。坏の破片資料のみで、器形全体がわかるものはない。器面が摩滅していて不明瞭なものもあるいが、いずれもロクロ成形で、内面が黒色処理されたものである。平安時代に属する資料と考えられるが、破片資料のみのため、詳細な年代のわかるものはない。

芦ノ口遺跡における平安時代の遺構・遺物は、昭和51（1976）年度の東北大学考古学研究室による調査において、平安時代の竪穴住居などの遺構が確認されている。土師器、須恵系土器、須恵器が多数出土しており、11世紀頃の年代が推定されている（『年報』3）。芦ノ口遺跡第1次調査のA区、B区からは、平安時代の土師器、須恵系土器、須恵器が出土している。特にB区ピット25からは、土師器、須恵系土器が一括出土しており、10世紀中葉の年代とされている（『年報』3）。また、破片の状態が悪く詳細は不明であるが、第2次調査のAI-7~AF-18区から内面を黒色処理した土師器の坏が1点出土している（『年報』9）。

表7 芦ノ口遺跡第9次調査出土須恵器・土師器観察表
Tab. 7 Attribute list of Sue ware and Haji ware from TM9

登録番号	取上げ番号	層	種類	器種	外面調整	内面調整	器厚(mm)	胎土	焼成	図	図版
P14	79	3層	須恵器	坏	体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、手持ちヘラ削り	体部：ロクロナデ	7	骨針を少量	やや良	10	7
P15	45	3層	ロクロ土師器?	坏	体部：摩滅により不明瞭	摩滅により不明瞭	3	微細白色粒を少量	良	10	7
P16	43	3層	ロクロ土師器	坏	体部：ロクロナデ	ロクロナデ→ミガキ、黒色処理	3	骨針を少量	良	10	7
P17	12	3層	ロクロ土師器?	坏	体部：摩滅により不明瞭 底部：摩滅により不明瞭 切り離し技法不明	摩滅により不明瞭 黒色処理	4	径2mm程の白色粒、 石英を少量	やや良	10	7
P18	14	3層	ロクロ土師器	坏	体部：ロクロナデ	ロクロナデ→ミガキ、黒色処理	3	骨針を少量	良	—	7
P19	15	3層	ロクロ土師器?	坏	体部：摩滅により不明瞭	ミガキ、黒色処理	3	微細白色粒を少量	良	—	7
P20	42	3層	ロクロ土師器?	坏	体部：摩滅により不明瞭	ミガキ、黒色処理	2	骨針を少量	良	—	7

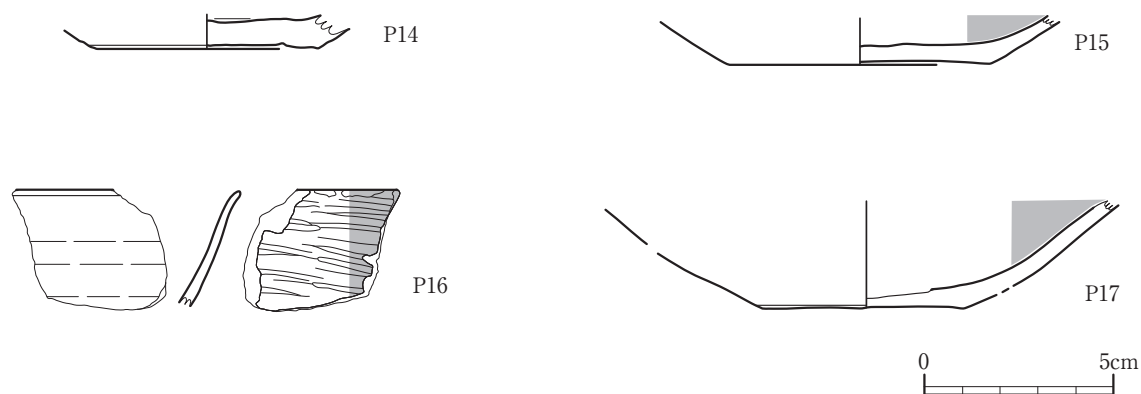


図10 芦ノ口遺跡第9次調査出土土器（2）
Fig. 10 Pottery from TM9 (2)

(2) 石器 (図11、表8、図版8)

石器は、石核1点、剥片1点の2点が出土した。石材は、石核は頁岩、剥片は珪質頁岩である。

石核 (S1) には、自然面が表面の一部に残されている。各側面の剥離面から、打面転移が頻繁に行われていることが認められる。明確な打面調整は確認できない。

剥片 (S2) は、先端部が欠損している。表面には明確な被熱痕跡が認められる。打面は比較的大きく打面構成は複剥離面である。打面部の一部に自然面が残されている。

表8 芦ノ口遺跡第9次調査出土石器観察表
Tab. 8 Attribute list of stone implements from TM9

登録番号	取上げ番号	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考	図	図版
S1	—	2層	石核	341	602	419	81.5	頁岩		11	8
S2	70	3層	剥片	240	338	142	4.4	珪質頁岩		11	8

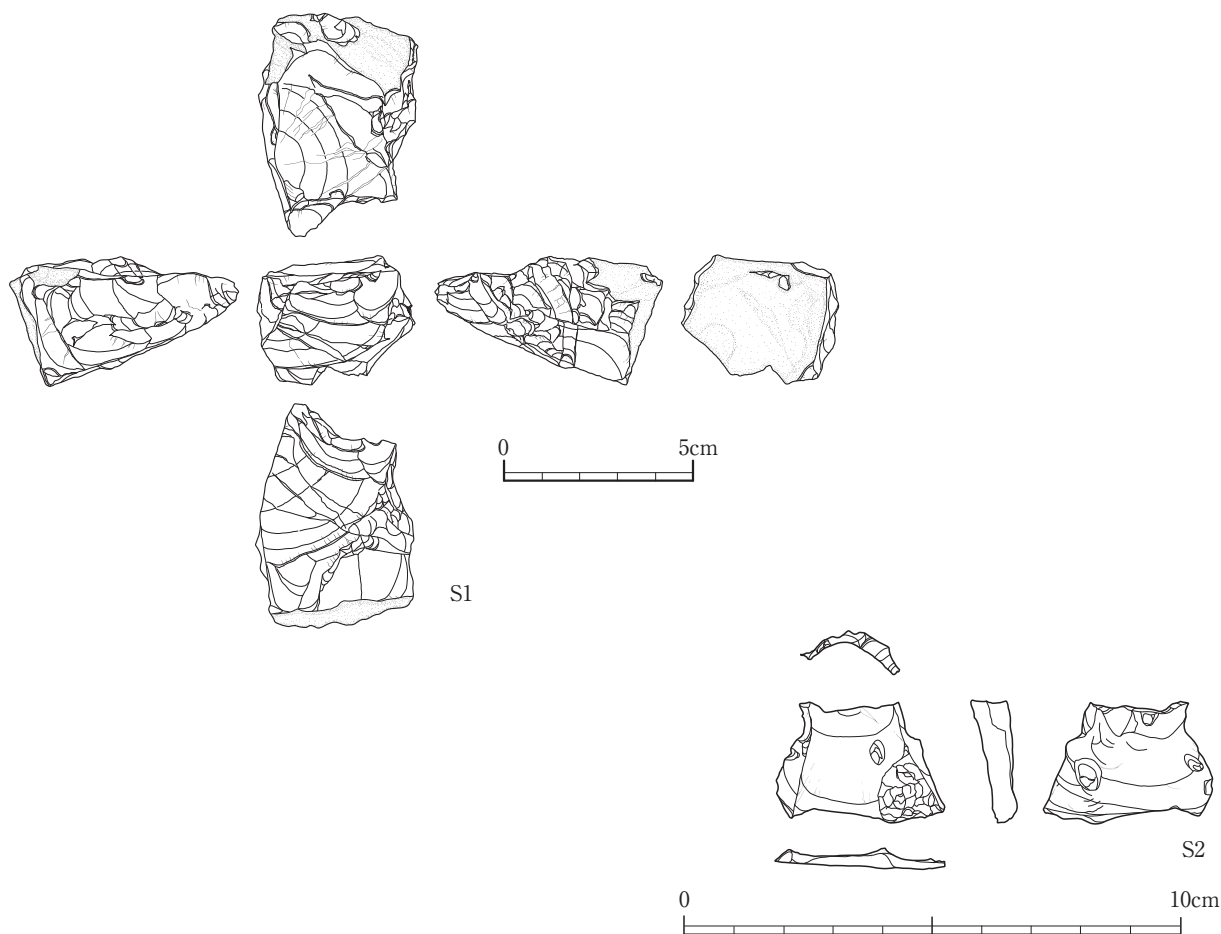


図11 芦ノ口遺跡第9次調査出土石器
Fig. 11 Stone tools from TM9

(3) 遺物の分布状況と遺物包含層の形成について

沢状の落ち込みの岸部で確認された窪地からは、遺物が集中して発見されている（図4-③）。これらの出土遺物のうちP5だけはやや大きい、ほかの大体は小破片である（図9）。P5の土器は、大型の部分が割れた状態で発見されており（取上げ番号No28：図版5-3）、近接して発見された少破片のNo.26が接合している。その他の接合した2点の土器（表4・5）も、離れて接合することは無く、非常に近接した場所から発見されている。断面が摩耗しきっており、技術的に難しいということもあるが、接合する個体あるいは認定できる同一個体は非常に少ない。これらの土器の遺存状態や出土状況からは、流水などにより流されてきた遺物が土砂と共にこの窪みの周辺に堆積したものと推定したい。

このような堆積が繰り返されることにより、遺物包含層が形成される状況は、南東25m程に位置する第8次調査区でも認められた（『調査報告』3）。この調査区の遺物包含層（基本層序3層）からは、縄文時代前期から中期初頭頃の土器が主体的に出土している。土師器なども認められたが、非常に少量で、より上の層から出土している。これらの土器片は、ほとんど接合できない摩耗しきった小破片であった。この第8次調査区における遺物包含層が形成される原因として、南側に位置する三神峯遺跡からの崩落によるものである可能性を指摘した。今回の調査区と比較するならば、崩落や流水などの自然的要因により遺物包含層が形成されたという点では、類似した堆積状況であったと言える。

今回の調査で主体となる遺物包含層（基本層序3層）から出土した縄文土器と土師器の重さ／点数の値、つまり1点あたりの重さは、縄文土器で25.7g（36点）、土師器で7.6g（20点）となる（表3）。土師器の方が縄文土器より薄く、出土した破片が小形であることもあり、重さは縄文土器のほうが重くなる。

一方、第8次調査区における主要な遺物包含層から出土した縄文土器は、1点あたりの重量5.8g（378点）、それより上層から出土した土師器は2.9g（8点）となる（『調査報告』3：表8、p.43）。土師器が軽いのは、今回の調査区と同様である。しかし、縄文土器に関しては、今回の調査区から出土した縄文土器に比べ1点あたりの重さが軽い。なお、両調査区から出土した土器は、バインダーを含浸させているため、実際の重量よりは重くなっているが、こうした違いは相対的に変化無いものと想定できる。

一般的に第8次調査区で出土した縄文時代前期・中期土器の器厚は厚く、今回出土した縄文時代晩期土器は薄いことから、単純に考えるならば、今回の調査区から出土した土器のほうが1点あたりの重量が軽くなることが予想される。しかし、そのような結果とはならなかったことも踏まえ、今回の調査区に比べ、第8次調査区出土土器の方が小形の破片が多かったことを示しているものと考えられる。

今回の調査区と第8次調査区の遺物包含層は、自然的要因により形成されたものではあるが、遺物の状態は異なっていたことが理解できた。こうした違いには、遺物を移動させた自然的要因のほか、そもそもの土器の廃棄の仕方などの文化的要因、あるいは当初に廃棄された場からの距離などの様々な要因が、複雑に絡み合っているものと考えられる。第8次調査区と今回の調査区のように、近接する異なる調査地点における遺物包含層の形成を、「流れ込みによるもの」と解釈した場合であっても、その背景には個別の様々な要因が考えられる。

今回は、遺物の分布と重さなどから遺物包含層の形成について簡単な検討を行ったが、調査面積は狭く、遺物点数もそう多くはないことから、確実な遺物包含層の形成要因は不明と言わざるをえない。しかしながら、このような個々の検討の積み重ねは、この場における遺跡形成過程を考える上で重要なデータとなるものと考えられる。

7. 芦ノ口遺跡のテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) 目的

仙台市に所在する芦ノ口遺跡は、広瀬川と名取川に挟まれた青葉山丘陵の南縁部に付随する河岸段丘上に位置する。本報告では、調査区内で検出された沢跡部分の覆土中に認められた火山灰（テフラ）と考えられる堆積物について、その性状を明らかにし、テフラである場合には、噴出年代の明らかにされている指標テフラとの対比を行う。

(2) 試料

試料は、芦ノ口遺跡の調査区内で検出された沢跡に堆積する覆土である黒色土層中に狭在する厚さ数cmのにぶい黄褐色を呈するシルト層から採取された（図7：サンプルNo.1・2）。発掘調査所見によれば、本層は面的な広がりをも有し、また直上と直下には褐色を呈する堆積層が認められており、褐色堆積層からは縄文前期・晩期の土器と、古代の土師器・須恵器が混在して出土する。

(3) 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤明（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(4) 結果

処理後に得られた砂分は、多量の細砂～極細砂径の火山ガラスから構成される（図12）。火山ガラスのほとんどは無色透明の塊状の軽石型であり、少量の繊維束状のものも混在する。また、微量の無色透明のバブル型も認められた。火山ガラスの他には、少量の斜長石や石英などの鉱物片と安山岩やチャートと思われる岩石片などが認められた。火山ガラスの屈折率測定結果を図13に示す。n1.504～1.506のレンジに入り、n1.505にモードがある。

(5) 考察

試料は、細粒の火山ガラスを主体とするテフラである。上述した火山ガラスの形態と屈折率および芦ノ口遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田洋ほか1981・1984、Arai et al.1986、町田洋・新井房夫2003など）との比較から、火山ガラスは、十和田aテフラ（To-a）に由来すると考えられる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている（町田洋ほか1981）。また、その噴出年代については、早川由紀夫・小山真人（1998）による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。なお、町

田洋・新井房夫（2003）に記載されたTo-aの火山ガラスの屈折率は、 $n_{1.496-1.508}$ の広いレンジを示す。ただし、 $n_{1.502}$ 以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田湖周辺とその東方地域に分布が限られるとされている（町田洋ほか1981）。おそらく、今回検出されたテフラは、低屈折率の火山ガラスを含まないTo-aに相当するものと考えられる。

今回の試料が採取された火山ガラスから構成されるテフラ層は、前述した堆積状況からみて、To-aの降下堆積層であると考えられる。すなわち、テフラ層直下は10世紀の始め頃の年代を示し、テフラ層より上位の堆積層は10世紀以降に堆積したことになる。

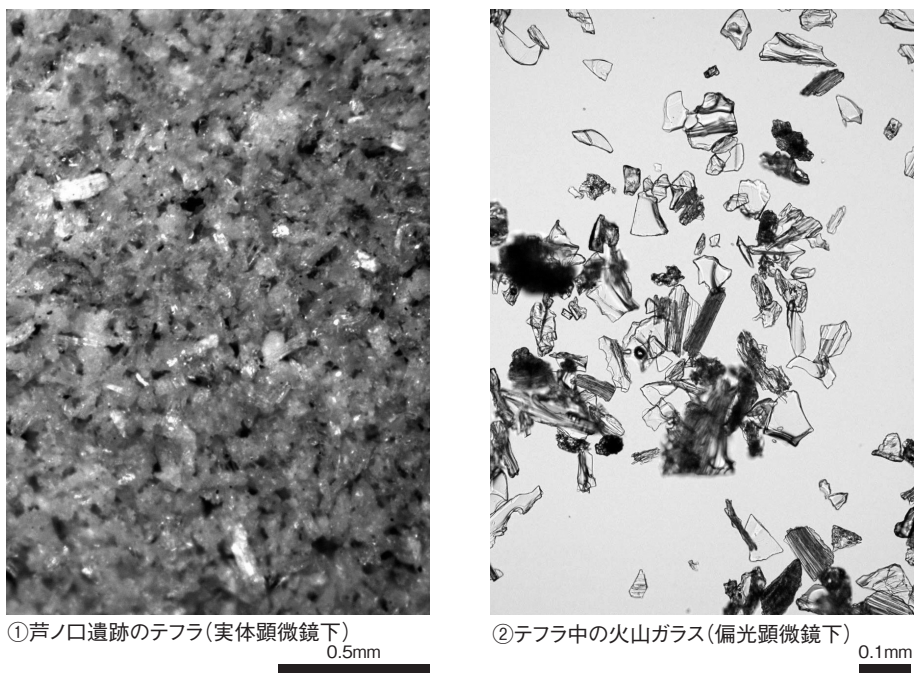


図12 芦ノ口遺跡第9次調査で確認されたテフラと火山ガラス
Fig. 12 Tephra and volcanic glass shards of TM9

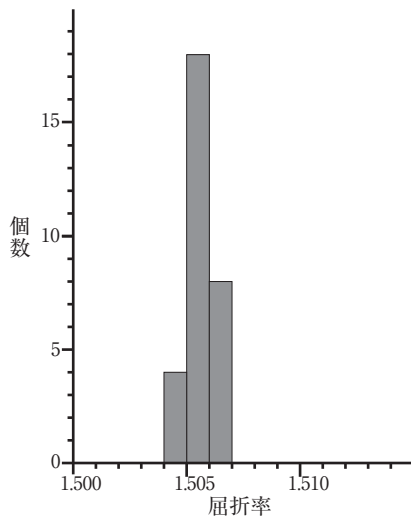


図13 テフラ試料中の火山ガラスの屈折率
Fig. 13 Refractive index of volcanic glass shards in tephra

8. まとめ

今回の調査では、縄文土器や土師器、石器などの遺物を回収すると共に沢跡を検出した。この沢跡は、埋土の状況から自然に埋没したものと考えられる。基本層序5層の上に、強い侵食を伴いながら基本層序4層が堆積すると同時に、沢跡が形成され⑤層が堆積する（図8）。この沢状の地形が形成されることと、基本層序5層上面が著しい侵食を受けていることなどから、時期は不明であるが、沢跡の形成時には荒れた環境下にあったことが想定される。その後、凹みを埋めるように基本層序3層と沢跡④層が堆積し始める。これらの層には縄文土器と土師器が混在し含まれていることや、それらの遺存状況などから、不安定な堆積状況が窺える。この沢跡④層が堆積した後に、十和田aテフラと推定されている灰層（③層）が堆積する。そして、沢跡には、基本層序3層に土質が類似する②層が継続して堆積することとなる。この火山灰は、基本層序では確認できなかったことから、時期は不明であるが、周辺からの流れ込みにより沢跡に再堆積したものであると考えられる。最後に、黒色土の基本層序2層・①層が堆積し、埋没することとなる。なお、このような火山灰の再堆積を生じさせる作用が、そのほかの堆積層に及んでいると考えるならば、降雨や何らかの要因により、沢跡の岸辺が侵食され、沢跡を通じて土壌が常に流失していた状況が想定できる。

明治から昭和初期の頃の地形図では、芦ノ口遺跡の東側は金洗沢へと緩やかに傾斜する様子が記録されている（図2-2・3）。こうした旧地形と対応させるならば、今回検出した沢跡は、東側へと注ぐ沢跡の一つだと考えられる。本調査で確認したこの状況は、本調査区より南東へ25m程離れた場所に位置する第8次調査区で確認された状況と類似する（『調査報告』3）。この第8次調査区でも西から東側に向かう小さな沢跡が確認され、摩耗した縄文土器・土師器片などが多数採集された。この第8次調査区と本調査の調査結果からは、この地域における小さな沢の形成と埋没は、古代までの間に細かに繰り返されたことが想定される。その後、この場では黒色土が安定的に堆積しながら、旧地表面（基本層序2層）が形成され、以前の地形図のような地形になったものと考えられる。

また、今回出土している縄文時代の土器は、晩期前葉の土器が多い。第8次調査区（『調査報告』3）や、北東側50m程に位置する第1次調査区（『年報』3）では、晩期の土器は少なく、前期・中期土器を主体としていた。晩期前葉の土器は、本調査区の北西100m程離れた場所に位置する第4次調査区（『年報』14）において、粘土採掘坑とともに発見されている。本調査区出土土器は、沢跡に向かって流れて堆積したと考えるならば、本調査区の南側の近接する場所から、縄文時代晩期前葉の何らかの遺構群が確認される可能性もある。

第三章 青葉山E遺跡第9次調査（AOE9）

1. 青葉山E遺跡の立地と周辺の遺跡

(1) 青葉山E遺跡の立地

青葉山E遺跡は、宮城県仙台市青葉区荒牧字青葉6-3に位置し、仙台市街地南西部の青葉山丘陵に立地する。この青葉山丘陵は、4面の高位段丘面から形成されており、それぞれ第Ⅰ～Ⅳ面に分かれる（中川久夫ほか1961）。本遺跡は、低いほうから2つ目の第Ⅲ面、標高約150mの地点に位置している。それより上位の第Ⅱ面には、愛島軽石層より古い軽石などが認められ、第Ⅲ・第Ⅳ面には愛島軽石層以降指標テフラのみが確認されることから、少なくとも青葉山Ⅱ面とⅢ面とでは、形成時期が異なることが指摘されている（大月義徳1987・1994）。

青葉山E遺跡の位置する地形は、丘陵上部の平坦面に位置する（図14）。この場所の北東部（三居沢）と南東部は、規模の大きな沢により開析され、東側には亀岡八幡宮北側へと下る小さな沢が存在する。遺跡の位置する場所は、これらの沢に囲まれており、沢をつたい広瀬川方面へ下るには利便性の高い場所であったと言える。

青葉山キャンパスから東へ下った川内キャンパスは、近世には仙台城二の丸とそれに隣接する武家屋敷地区であった。その後、明治維新を経た明治4年（1871年）の廢藩置県後に、仙台城が明治政府の管轄下に移り、二の丸には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれた。明治19年（1886年）には仙台鎮台から陸軍第二師団に改称され、現在の川内南キャンパスに師団司令部が置かれた。青葉山キャンパスには、詳細な地点は不明であるが明治前半頃には練兵場が設置され、大正から昭和初期の頃には現在の理学部周辺が広く利用されていた（加藤宏2011）。これまでに行われてきた発掘調査で、塹壕と推定される跡も実際に発見されている（『年報』2・20など）。また、現在の青葉山キャンパス工学部の近辺には、工兵第二連隊の作業場が設置されている（図14-2・3、加藤宏2011）。その後、アメリカ軍による利用、開拓者による入植などを経て、昭和40年（1965年）代前半より東北大学が移転を始める（東北大学百年史編集委員会編2005）。東北大学移転前となる昭和39年（1964年）の地形図では、地形は変化していないが、丘陵縁辺部に家の表記が認められる程度である（図14-4）。青葉山E遺跡の周辺では、昭和44年（1969年）に地学研究棟などが建設され、現在に至っている（図14-5）。

(2) 青葉山E遺跡の周辺遺跡

青葉山E遺跡の周辺の遺跡としては、青葉山B遺跡と青葉山C遺跡が存在する（図1-6・8）。青葉山B遺跡は、現在までに2回の本調査が行われている（『年報』2）。これらの調査では、旧石器時代のものと考えられる石器が出土していたが、2001年に発覚した旧石器ねつ造事件と関連し、ねつ造された危険性が排除できないため、歴史資料としての価値は否定される検証結果となっている（東北大学埋蔵文化財センター2003a）。ただし、これらの調査では、縄文土器・弥生土器・土師器などが出土しているため、縄文時代早期・縄文時代中期・弥生時代・古代の散布地として遺跡登録されている。そのほかに、平成14・16・18・19（2002・2004・2006・2007）年度に試掘調査を行っているが、遺構・遺物は確認されていない（『年報』20・22・24、『年次報告』2007）。平成18（2006）年度には、青葉山新キャンパス造成事業の一環として、青葉山C遺跡を含む地域の試掘調査が実施された（『年報』24）。その結果、一区画から後期旧石器時代に属する石器を13点発見することができた。

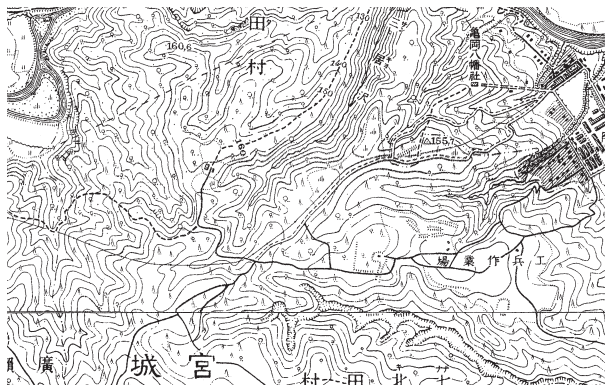
青葉山丘陵上のほかの遺跡には、より高い段丘面となる青葉台に位置する青葉山A遺跡と青葉山D遺跡がある（図1-9・10）。これらの遺跡では、後期旧石器時代に属する石器が表面採集されている（『年報』2）。青葉山A遺跡については、平成元年（1989年）仙台市教育委員会により発掘調査がなされたが、遺物・遺構などは発見されていない（佐藤隆ほか1990）。また、工学研究科が位置する青葉山東地区は、周知の遺跡の範囲から離れるが、ローム層が良好に遺されていることなどから、確認のための試掘・立会調査などを実施している（『年次報告』2007など）。しかし、遺構・遺物などは発見されていない。



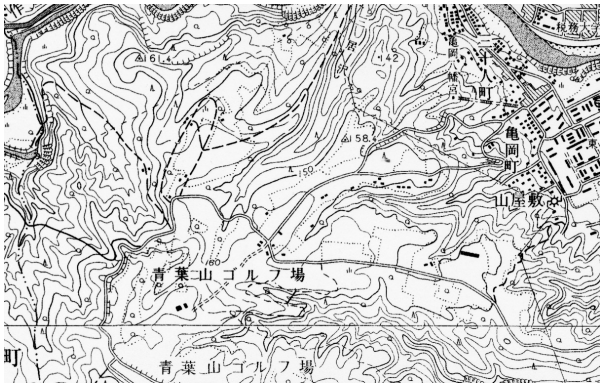
1. 青葉山地区周辺地形空撮 (昭和22年 (1947年) 10月23日撮影)



2. 青葉山地区周辺地形図①
(明治38年 (1905年) 測量『仙臺南部』)



3. 青葉山地区周辺地形図②
(昭和3年 (1928年) 測量『仙台北北部』・『仙台西南部』)



4. 青葉山地区周辺地形図③
(昭和39年 (1964年) 年改測『仙台北北部』・『仙台西南部』)



5. 青葉山地区周辺地形図④
(平成19年 (2007年) 更新『仙台北北部』・『仙台西南部』)

図14 青葉山地区周辺の地形
Fig. 14 Topographical map around Aobayama campus

2~5 : S=1/25,000

2. これまでの調査 (図15・表9)

青葉山E遺跡では、これまで8回の本調査が実施されている。昭和59(1984)年度の理学研究科化学機器分析センター新営に伴う第1次調査(AOE1)では、近世・近代の陶磁器などのほか、溝跡や土坑などが確認されている(『年報』2)。平成5(1993)年度の青葉山地区基幹整備のための共同溝建設に伴う第2次調査(AOE2)では、縄文時代早期・縄文時代中期・平安時代の遺物のほか、土坑やピットが発見され、青葉山E遺跡の範囲が大きく広がっていることが明らかとなった(『年報』11)。

平成6(1994)年度の理学研究科自然史標本館の新営に伴う第3次調査(AOE3)では、縄文時代早期後葉の住居跡2軒や多数の土坑、ピットが検出され、この区域が早期の居住域であることが判明した。また、4000点近い貝殻条痕文土器・石器が出土した。それらの資料から、早期後葉の土器型式として「青葉山E式」が新たに提唱された(『年報』12)。平成7・8(1995・1996)年度の理学研究科研究実験棟新営(1期)に伴う第4次調査(AOE4)では、陥し穴状土坑やピットなどが検出され、縄文時代早期後葉、晩期の土器の集中地点が確認された(『年報』13)。平成8(1996)年度の青葉山基幹整備受水槽、ポンプ室新営に伴う第5次調査(AOE5)では、陥し穴状土坑のほか、縄文時代早期の遺物を確認している(『年報』14)。平成8・9(1996・1997)年度の理学研究科研究実験棟新営(2期)に伴う第6次調査(AOE6)では、陥し穴状土坑やピットなどのほか、縄文時代早期、中期の土器が出土している(『年報』15)。平成13・14(2001・2002)年度には、理学部研究実験棟新営に伴う第7次調査(AOE7)、工学研究科共通駐車場整備に伴う第8次調査(AOE8)が実施されている(『年報』20)。第7次調査では、土坑とピットが確認されたほか、縄文時代早期・中期・晩期の土器や石器のほか、中期中葉の土偶2点が出土している。第8次調査では、時期不明のピットが確認されている。

表9 青葉山E遺跡における発掘調査一覧
Tab.9 List of excavation of Aobayama-E site

調査 回数	調査 年度	略称	目的	主な遺構など	主な遺物	文献	調査 面積 (㎡)
1次	1984	AOE1	科学機器分析センター新営に伴う調査	溝跡、土坑、陥し穴状土坑(要検討)	陶磁器、金属製品	『年報』2	400
2次	1993	AOE2	共同溝建設に伴う調査	土坑、ピット	縄文土器(早期・中期)、弥生土器(後期?)、土師器(平安)、石器	『年報』11	181
3次	1994	AOE3	理学研究科自然史標本館の新営に伴う調査	竪穴住居跡(早期)、土坑、ピット	縄文土器(早期・晩期)、石器、土師器(平安)	『年報』12	1862
試掘	1993・1994	—	大型計算機センター新営に関連する付帯施設部分の調査	無し	無し	『年報』11・12	16
4次	1995・1996	AOE4	理学部研究実験棟新営(1期)に伴う調査	溝、土坑、ピット	縄文土器(早期・晩期)、石器、土師器(古墳中期)	『年報』13	1380
5次	1996	AOE5	ポンプ室・受水槽新営に伴う調査	土坑、ピット	縄文土器(早期)、石器	『年報』14	654
6次	1996・1997	AOE6	理学部研究実験棟新営(2期)に伴う調査	土坑、陥し穴状土坑、ピット	縄文土器(早期・中期・晩期)、石器	『年報』15	1836
試掘	1998	98-1	サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター電源装置棟新営に伴う調査	無し	無し	『年報』16	117
7次	2001・2002	AOE7	理学部研究実験棟新営に伴う調査	土坑、ピット	縄文土器(早期・中期・晩期)、土偶、石器	『年報』20	1800
8次	2002	AOE8	工学研究科共通駐車場整備に伴う調査	ピット	縄文土器(早期)、石器?	『年報』20	750
試掘	2010	2010-2	超電導核磁気共鳴装置室新営工事に伴う調査	無し	無し	『年次報告』2011	59
9次	2012	AOE9	理学部研究実験棟新営に伴う調査	土坑	縄文土器(早期・中期)、石器	『調査報告』4(本報告)	342.5
試掘	2012	2012-10	理学研究科車庫新築計画(震災復旧)	無し	無し	『年次報告』2012	36

*前期旧石器ねつ造関連事項は表記していない(東北大学埋蔵文化財調査研究センター2003a・b)。



図15 青葉山地区調査地点 (AOE i.e. Aobayama-E site)

3. 調査経緯

(1) 調査地点の位置

東日本大震災によって、理学研究科では化学棟・物理棟などが大きく被害を受け、一部は使用ができなくなった。このことによって生じる研究室・実験室の不足解消のため、総合研究棟を新築し復旧することとなった。理学研究科では、自然史標本館の西側に、研究実験棟を3期に分けて整備する計画を有していた。これまでに1期・2期分の工事が終了し、総合研究棟として利用されている。新築復旧は、この3期分の計画場所を利用する形で実施されることとなった。今回の調査区は、第7次調査区の南側に隣接する場所である（図15）。

(2) 調査の経過

建物本体の部分は、すでに平成13・14（2001・2002）年度に、青葉山E遺跡第7次調査として事前調査を実施していた（『年報』20）。建物計画が変更され一部未調査区域が生じたことと、建物南側の外構整備の区域についても調査が未了であったため、今回記録保存のための事前調査を実施することとなった。

重機による表土除去の結果、標高の高い調査区西側では、表土直下から地山層（3層以下）が検出され、遺物包含層などは削平されていることが判明した。そのため、この地区では、攪乱部の掘り上げと地山面の検出で掘削を止めた。その他の調査区では、以前の調査と同様に旧表土面が検出され、以下の層に関しては手掘りによる調査を進めた（図16）。

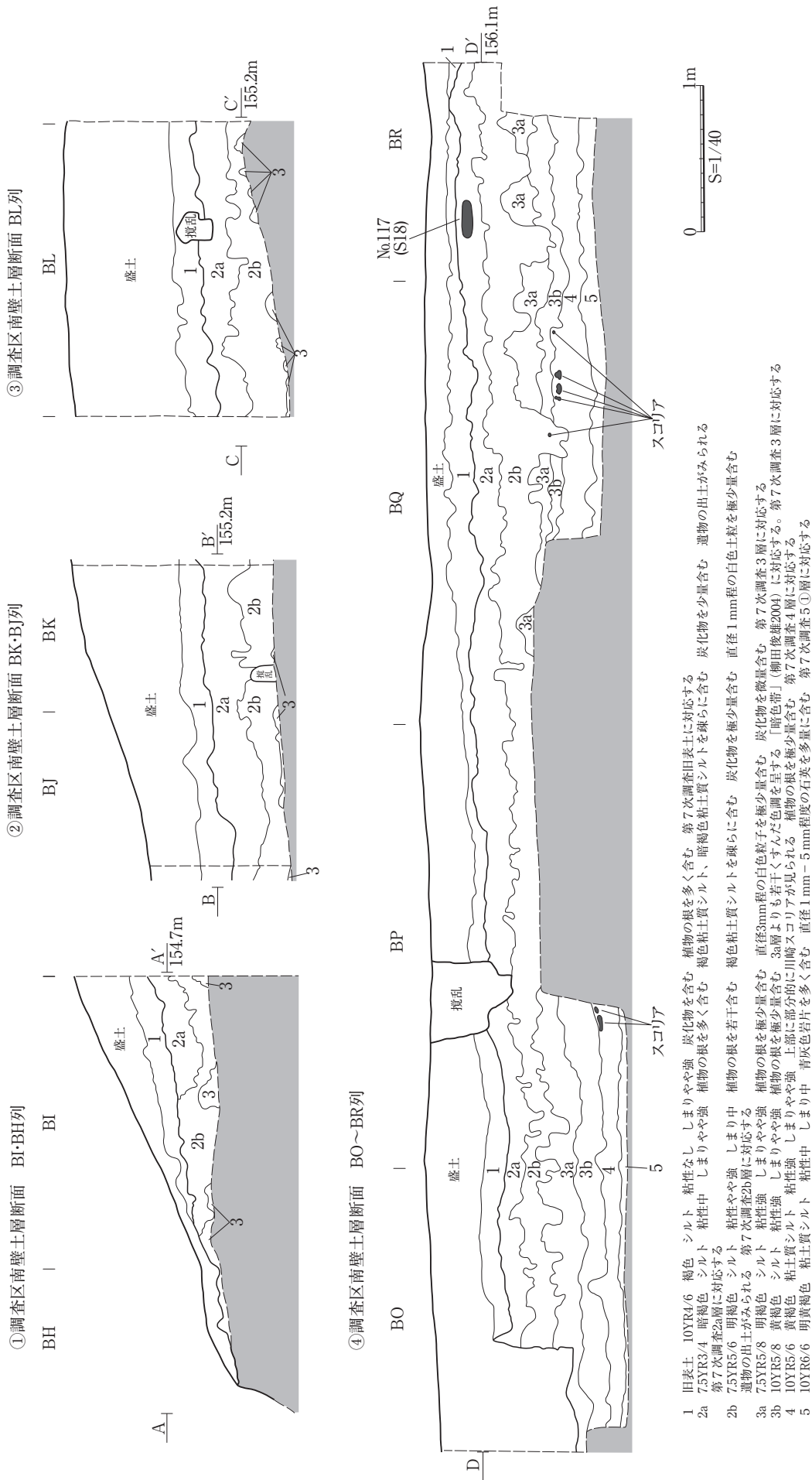
(3) 調査の方法

調査にあたっては、第3～6次調査におけるグリッド設定を用いた。そして、そのグリッドに合わせて任意座標を設定し、それに基づき遺物の取上げ、平面図などの作成を行った。遺物は、2層以下については座標を計測し取上げ、盛土・1層は層ごとに取上げている。出土した土器は、洗浄後にアクリル系合成樹脂「バインダーNo.17」を含浸させて補強した。座標の基準点は図16に示してある。平面図・断面図は、縮尺1/20で作成した。写真は35mmのモノクロとカラーリバーサル、デジタルカメラ（ニコンD5100）で適宜撮影した。

4. 基本層序（図17）

本調査区では、最上層に現表土のほか大学造成時の盛土などによる層を確認した。それ以下の基本層序は、大きく5層に分けることができる。1層は大学造成以前の旧表土と考えられる層である。遺物の取上げは、盛土層と1層、そして攪乱などを含めて1層として取上げた。2層は、縄文時代の遺物包含層であり、2a・2b層の2層に細分できる。2a層の方が、やや黒みが強い。また、両層ともに凹凸が認められるが、とくに2b層は3層を大きく挟むように凹む地点もある。これらの層の西端も捉えることができた（図16）。この分布範囲は、隣接する第7次調査区における2層の分布範囲と繋がる。3層以下は地山層と考えられる粘土層である。3層は3a・3b層に細分できる。3b層はいわゆる「暗色帯」に相当するものと考えられる（柳田俊雄2004）。4層上部では蔵王川崎スコリア（Za-Kw：板垣直俊ほか1980、町田洋・新井房夫2011）を部分的に含んでいた。5層は部分的に検出したのみである。これらの層位は、第7次調査（『年報』20）時における層位・層名とおおむね対応する。

本調査では、基本的に3層上面までの掘削に止め、堆積が良好な場所において、3×1mの範囲を2箇所設定し、5層を明確に確認できるまで掘り下げた（図16、図17-④）。これらの深堀区などでは、後期旧石器時代に属する石器は確認することができなかった。なお、第4次調査における火山灰の分析では、「暗色帯」より上層から始良Tn火山灰（AT：町田洋・新井房夫1976・2011）が検出されている（『年報』14：古環境研究所2001）。本調査区における「暗色帯」を含めた層序からは、この始良Tn火山灰を含む層は、今回の調査区では3a層に相当するものと推定される。



* 图中遺物の番号は、表 14 に対応する。

図17 青葉山巨遺跡第9次調査断面図
Fig. 17 Cross sections of AOE9

5. 検出遺構 (図18)

今回の調査では、1～3・5・6・8・9号土坑の7基の土坑を確認することができた。当初は遺構と認定した4・7号土坑は、調査の結果、遺構では無かったことが判明したため欠番とした。これらの土坑は、調査区中央のBN～BL・31・32区に位置する5基(1～3・5・6号土坑)と南西側に位置する2基(8・9号土坑)に分布が分かれる。中央で検出した土坑は、2a層上部にて検出した。部分的に現代の攪乱や木根で破壊はされているが、遺存状態は良い。また、この土坑の近辺では、多くの遺物が集中して発見されている(図19、図版15-1)。南西側の2基の土坑は、3層上面にて検出した。これらの土坑は、そのほとんどが攪乱などで消失しているため、詳細は不明である。

【1号土坑】(図18、図版12-7・8)

84×60cm(長軸×短軸。以下同様)の楕円形を呈する。床面は西から東方向に向かい傾斜する。壁は急に立ち上がる。遺物は出土していない。時期は検出層位や6号土坑の存在などから、縄文時代中期中葉と推定される。

【2号土坑】(図18、図版13-1・2)

74×64cmの円形に近い形状となる。床面は緩やかに窪み、壁も緩やかに立ち上がる。磨石(S15:図24)とチップ(S5:図23)が、それぞれ1点ずつ出土している。時期は、検出層位や6号土坑の存在などから、縄文時代中期中葉と推定される。

【3号土坑】(図18、図版13-3・4)

径36cmほどの円形を呈する。床面は北側が凹んでおり、木根による攪乱である可能性もあるが、埋土の状況からは判断が難しかった。南側はほぼ平らである。遺物は出土していない。時期は、検出層位や6号土坑の存在などから、縄文時代中期中葉と推定される。

【5号土坑】(図18、図版13-5・6)

北西側を攪乱によって破壊されている。72×(48)cm(括弧は残存長を示す。以下同様)の楕円形を呈する。床面は南側が窪む。この窪みも3号土坑と同様に木根による攪乱の可能性もある。遺物は、早期後葉の縄文土器1点のみが確認されているが、小片のため図示はしていない。時期は、検出層位や6号土坑の存在などから、縄文時代中期中葉と推定し、出土した土器小破片は混入したものと捉えた。

【6号土坑】(図18、図版13-7・8)

本調査区で最も規模の大きな土坑である。東側が大きく攪乱によって破壊されているが、その規模は(132)×128cmとなり、円形に近い形状となる。埋土は3層に分かれ、暗褐色土が基本となる2層には焼土が含まれている。遺物には縄文土器5点と粘土塊1点がある。縄文土器で時期が判明するのは、中期中葉2点のみである(P50・51:図22)。これらの土器は、小片ではあるが埋土2層から出土している。また、この埋土2層からは、粘土塊も1点出土している(図版18-58)。この土坑の時期は、埋土2層出土土器から中期中葉(大木8a式～大木8b式期)の遺構であると考えられる。また、出土している土器の時期、埋土に焼土が含まれることなどから、第7次調査区の7号土坑(大木8b式期)のあり方に類似する。

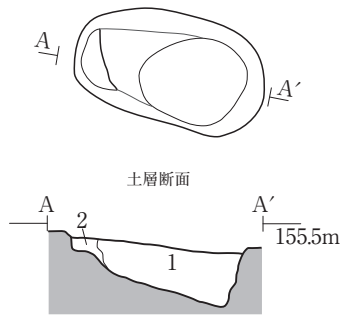
【8号土坑】(図18、図版14-1・2)

東西方向を攪乱によって破壊されており、全体の形状は不明である。規模は76×(24)cmとなる。床面には凹凸がある。遺物は出土していない。検出層位から、縄文時代の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

【9号土坑】(図18、図版14-3・4)

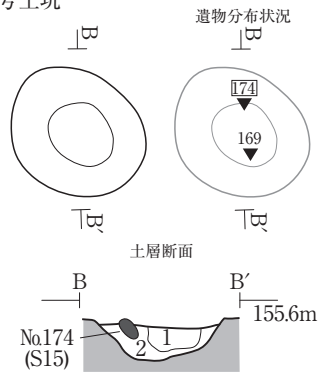
調査時に南壁際部に入れたサブトレンチにより南側が不明となってしまった。規模は76×(24)cmである。調査区南壁に本土坑の痕跡が認められないことから、調査区内で楕円状になるものと推定される。床面はほぼ平らであり、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。時期は8号土坑と同様に、縄文時代の遺構ではあるが、詳細な時期は不明である。

1号土坑



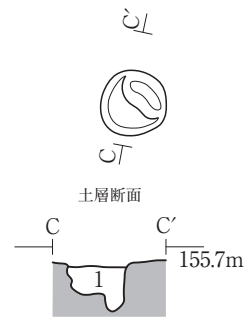
- 1 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性なし
しまり中 褐色粘土ブロックを少量含む
- 2 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性なし
しまり弱 褐色の砂質シルトブロックを少量含む

2号土坑



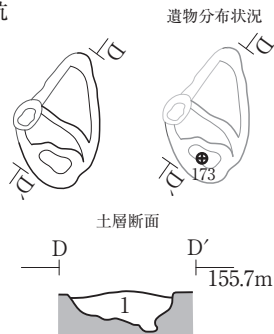
- 1 10YR4/6 褐色 砂質シルト 粘性中
しまり中 石器(敲石)を含む 植物の根を含む
- 2 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 粘性なし
しまり中 植物の根を含む 黄褐色の砂質シルトブロックを少量含む

3号土坑



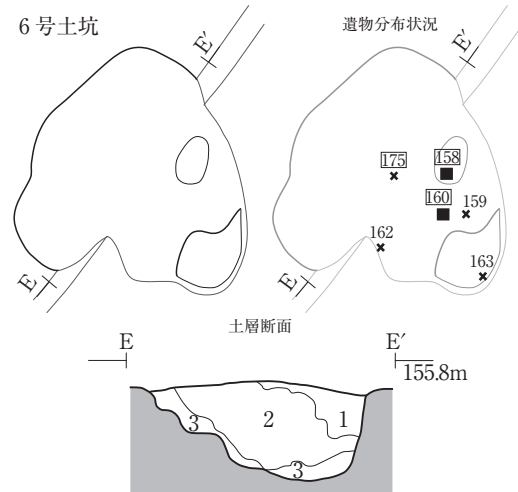
- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性なし
しまり弱 直径2mm程度の炭化物を少量含む
褐色の粘土ブロックをやや含む

5号土坑



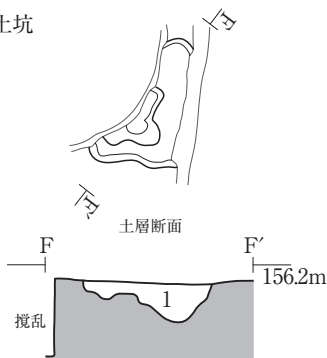
- 1 10YR4/6 褐色 砂質シルト 粘性なし
しまり弱 明黄褐色の粘土ブロックを斑に含む
黄褐色の粘土ブロックを少量含む
直径2mm程の炭化物を少量含む

6号土坑



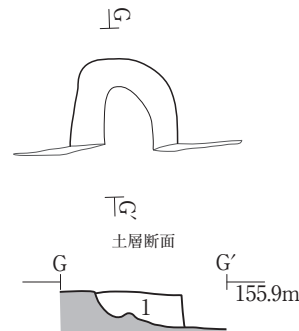
- 1 10YR4/3 黄褐色 シルト 粘性なし
しまり弱 直径5mm程の炭化物を少量含む
明黄褐色の直径1cm程の粘土のブロックを少量含む
- 2 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性弱
しまり弱 直径1-2mm位の焼土をやや含む
黒褐色 粘土ブロックをやや含む
- 3 10YR4/6 褐色 砂質シルト 粘性弱
しまり弱 直径2mm程度の炭化物を少量含む

8号土坑



- 1 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性弱
しまり中 明黄褐色シルトをブロック状にやや含む

9号土坑



- 1 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト 粘性中
しまり中 褐色土をブロック状に含む
径2-3mmの炭化物を僅かに含む
植物の根を多く含む

⊕ 早期後葉 ■ 中期中葉 × 不明 ▼ 石器

* 図中の遺物番号は、表14に対応する。

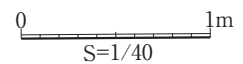


図18 青葉山E遺跡第9次調査遺構平面図・断面図
Fig. 18 Plans and cross sections of features at AOE9

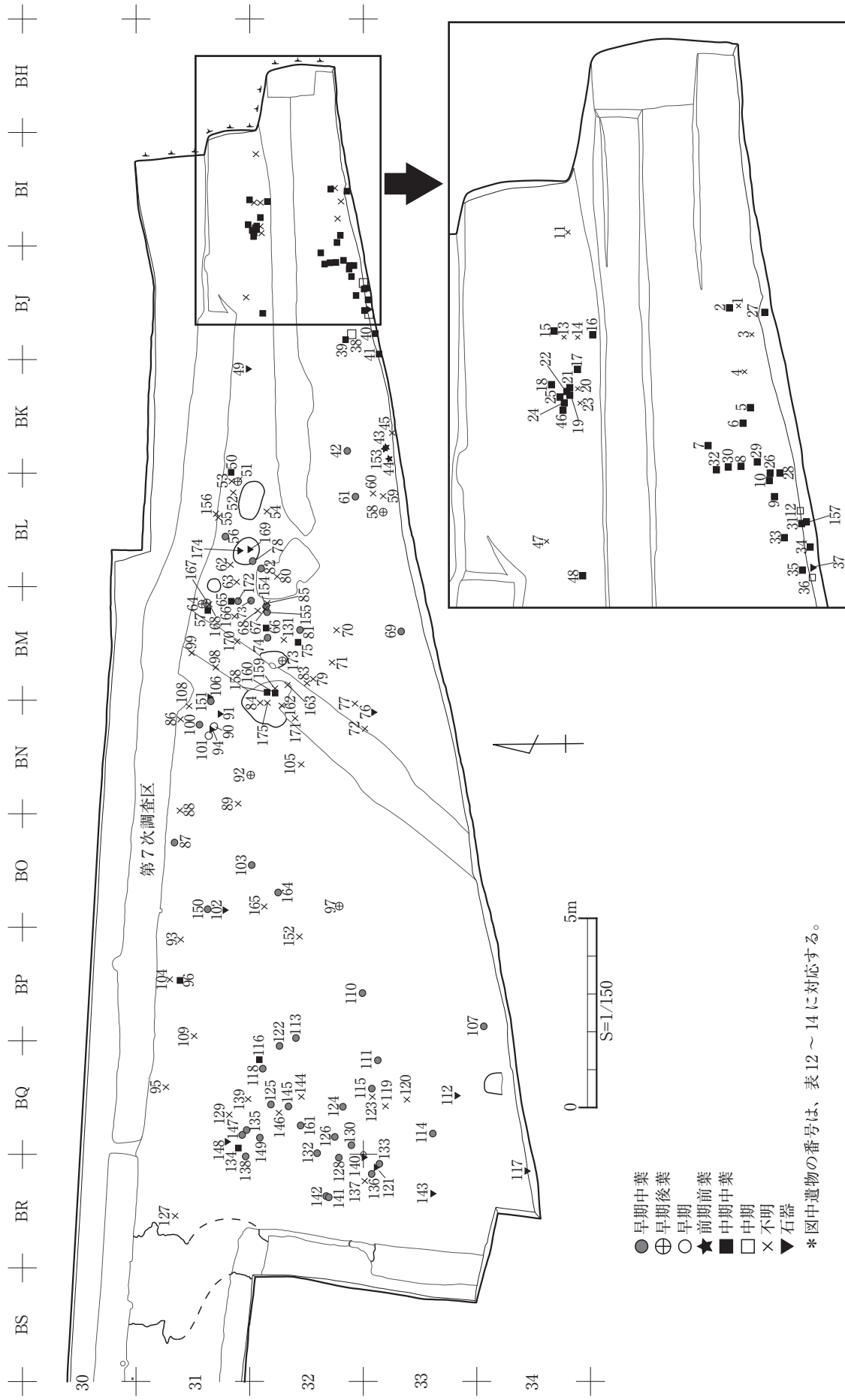


図19 青葉山E遺跡第9次調査遺物分布図
 Fig. 19 Distribution of the artifacts at AOE9

表10 青葉山E遺跡第9次調査遺構属性表
Tab. 10 Attribute of the features at AOE9

土坑名	区	規模			出土遺物		
		面積 (㎡)	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)	種別・点数	図	図版
1号土坑	BL-31・32	0.51	84×60	32			
2号土坑	BL-31・32	0.38	74×64	22	縄文土器（時期不明2）、チップ1、磨石1	23-S5 24-S15	19、20
3号土坑	BM・BL-31	0.10	36×36	24			
5号土坑	BM-32	(0.22)	72×(48)	20	縄文土器（早期後葉1）	—	—
6号土坑	BN・BM- 31・32	(1.13)	(132)×128	50	縄文土器（中期中葉2、時期不明3）、粘土塊1	22- P50・P51	18
8号土坑	BR32・33	(0.17)	76×(24)	20			
9号土坑	BQ-34	(0.23)	56×(44)	18			

*規模の（ ）は残存面積・残存長を示す。
*「深さ」は、最も深い値を示した。

表11 青葉山E遺跡第9次調査遺物集計表
Tab. 11 Distribution of various implements from AOE9

	縄文土器										粘土塊			その他	小計 点数	石器							合計 点数				
	早期中葉	早期後葉	早期後葉?	早期	早期?	前期前葉	中期	中期中葉	中期中葉?	時期不明	点数	重さ (g)	重さ/ 点数			点数	重さ (g)	重さ/ 点数	石鏃	剥片	その他	石皿		磨石	点数	重さ (g)	重さ/ 点数
1層	11	1				4	8		47	71	314.9	4.4	12	33.4	2.8	陶器1 磁器1 土師器1	86		2	石錘1		1	4	349.5	87.4	90	
2a層	22	4	1	1	1	4	30	2	39	105	1293.7	12.3	2	7.6	3.8		107	1	2	スクレイパー1 石核1		2	3	10	11098.4	1109.8	117
2b層	11	2					1		15	29	210.4	7.3					29	1	1				2	11.3	5.7	31	
2号土坑																				チップ1		1	2	628.8	314.4	2	
5号土坑		1								1	3.6	3.6					1						0			1	
6号土坑							2		3	5	7.5	1.5	1	3.2	3.2		6						0			6	
表採								1		1	4.1	4.1					1						0			1	
合計	44	8	1	1	1	8	41	3	104	212	1834.2	8.7	15	44.2	2.9	3	230	2	5	4	2	5	18	12088.0	671.6	248	

*土器の重さは保存処理後の重さである。

表12 青葉山E遺跡第9次調査遺物座標一覧表(1)
 Tab. 12 The coordinates of the implements from AOE9 (1)

取上げ 番号	登録 番号	層位	種類	時期	グリッド	X座標	Y座標	Z座標	図	図版	
1		2a	土器	不明	BI32	0.784	25.537	154.820	—	—	
2		2a	土器	縄文中期中葉	BI32	0.880	25.526	154.854	—	—	
3		2a	土器	不明	BI32	0.601	25.182	154.910	—	—	
4		2a	土器	不明	BI32	0.682	24.732	154.802	—	—	
5		2a	土器	縄文中期中葉	BI32	0.619	24.285	155.024	—	—	
6		2a	土器	縄文中期中葉	BI32	0.710	24.098	154.968	—	—	
7	同一個体	P34	2a	土器	縄文中期中葉	BJ32	1.150	23.828	154.934	21	18
9							0.338	23.201	155.110		
8	接合	P43	2a	土器	縄文中期中葉	BJ32	0.757	23.560	154.967	21	18
10							0.412	23.401	154.943		
11		2b	土器	不明	BI32	2.874	26.450	154.565	—	—	
12		2a	土器	縄文中期	BJ32	0.030	23.038	155.008	—	—	
13		2a	土器	不明	BI32	2.909	25.161	154.910	—	—	
14		2a	土器	不明	BI32	2.752	25.161	154.904	—	—	
15	P31	2a	土器	縄文中期中葉	BI31	3.036	25.237	154.827	21	17	
16	P35	2a	土器	縄文中期中葉	BI32	2.584	25.182	154.793	21	17	
17	P44	2a	土器	縄文中期中葉	BI32	2.751	24.760	154.981	22	18	
18	P45	2a	土器	縄文中期中葉	BI31	3.070	24.581	154.798	22	18	
19	接合	P46	2a	土器	縄文中期中葉	BI32	2.849	24.458	154.943	22	18
24							2.915	24.367	155.012		
20		2a	土器	不明	BI32	2.757	24.541	154.891	—	—	
21	P32	2a	土器	縄文中期中葉	BI32	2.850	24.538	154.851	21	17	
22		2a	土器	縄文中期中葉	BI32	2.868	24.492	154.892	—	—	
23		2a	土器	不明	BI32	2.733	24.362	154.952	—	—	
25		2a	土器	縄文中期中葉	BI32	2.945	24.427	154.857	—	—	
26	P38	2a	土器	縄文中期中葉	BJ32	0.388	23.509	155.001	21	18	
27	P33	2a	土器	縄文中期中葉	BI32	0.458	25.466	154.694	21	17	
28	P40	2a	土器	縄文中期中葉	BJ32	0.290	23.498	154.938	21	18	
29	P37	2a	土器	縄文中期中葉	BJ32	0.551	23.625	154.872	21	18	
30	P41	2a	土器	縄文中期中葉	BJ32	0.917	23.569	154.864	21	18	
31	接合	P42	2a	土器	縄文中期中葉	BJ33	-0.019	22.884	154.934	21	18
157							-0.028	22.893	154.919		
32	P49	2b	土器	縄文中期中葉	BJ32	1.049	23.528	154.816	22	18	
33	P36	2a	土器	縄文中期中葉	BJ32	0.228	22.696	155.084	21	18	
34	P54	1	土器	縄文中期中葉	BJ33	-0.093	22.584	155.139	22	18	
35	P30	2a	土器	縄文中期中葉	BJ33	-0.007	22.301	155.019	21	17	
36		2a	土器	縄文中期	BJ33	-0.116	22.215	154.993	—	—	
37	S9	1	石器	縄文時代	BJ33	-0.138	22.323	155.138	23	19	
38		2a	土器	縄文中期	BJ32	0.340	21.670	155.164	—	—	
39		2a	土器	縄文中期中葉	BJ32	0.499	21.534	155.156	—	—	
40	接合	P29	2a	土器	縄文中期中葉	BJ33	-0.293	21.689	155.112	21	17
48							2.681	22.126	155.193		
41	P57	1	土器	縄文中期中葉	BJ33	-0.392	21.159	155.305	22	18	
42	P02	2a	土器	縄文早期中葉	BK32	0.454	18.596	155.295	20	16	
43	接合	P28	2a	土器	縄文前期前葉	BK33	-0.550	18.695	155.385	21	17
153							-0.529	18.655	155.254		
44							-0.654	18.383	155.369		
45		2a	土器	不明	BK33	-0.740	19.061	155.327	—	—	
46		2a	土器	縄文中期中葉	BI32	2.930	24.282	154.869	—	—	
47		2a	土器	不明	BJ31	3.129	22.652	155.163	—	—	
49	S7	2a	石器	縄文時代	BK31	3.070	20.760	155.313	23	19	
50		2a	土器	縄文中期中葉	BK31	3.538	18.025	155.495	—	—	
51	P24	2a	土器	縄文早期後葉	BL31	3.358	17.788	155.460	20	17	
52		2a	土器	不明	BL31	3.475	17.490	155.524	—	—	
53		2a	土器	不明	BL31	3.510	17.796	155.455	—	—	
54		2a	土器	不明	BL32	2.576	16.986	155.542	—	—	
55		2a	土器	不明	BL31	3.871	16.831	155.526	—	—	
56	P01	2a	土器	縄文早期中葉	BL31	3.669	16.324	155.509	20	16	
57	同一個体	P48	2a	土器	縄文中期中葉	BM31	4.142	14.390	155.699	22	18
65							3.519	14.625	155.653		
58		2b	土器	縄文早期後葉	BL33	-0.492	16.975	155.213	—	—	

表13 青葉山E遺跡第9次調査遺物座標一覧表(2)
 Tab. 13 The coordinates of the implements from AOE9 (2)

取上げ 番号	登録 番号	層位	種類	時期	グリッド	X座標	Y座標	Z座標	図	図版	
59		2b	土器	不明	BL33	-0.494	17.385	155.175	—	—	
60		2b	土器	不明	BL33	-0.225	17.465	155.170	—	—	
61		2b	土器	縄文早期中葉	BL32	0.241	17.390	155.186	—	—	
62		2a	土器	不明	BL31	3.544	15.592	155.534	—	—	
63		2a	土器	不明	BL31	3.361	15.131	155.638	—	—	
64		2a	土器	縄文早期後葉?	BM31	4.310	14.556	155.630	—	—	
66	P39	2a	土器	縄文中期中葉	BM32	2.594	13.914	155.685	21	18	
67	P59	2a	粘土塊	不明	BM32	2.618	14.427	155.646	—	18	
68		2a	土器	不明	BM32	2.810	14.360	155.670	—	—	
69		2a	土器	縄文早期中葉	BM33	-0.973	13.822	155.535	—	—	
70		2a	土器	不明	BM32	0.728	13.858	155.577	—	—	
71		2a	土器	不明	BM32	0.840	12.990	155.648	—	—	
72		2a	土器	不明	BN33	-0.011	11.241	155.733	—	—	
73	P03	2a	土器	縄文早期中葉	BM32	2.998	14.642	155.564	20	16	
74	P14	2a	土器	縄文早期中葉	BM32	2.558	13.660	155.528	20	16	
75		2a	土器	縄文中期中葉	BM32	1.759	13.524	155.549	—	—	
76	S11	2a	石器	縄文時代	BN33	-0.260	11.685	155.624	24	19	
77		2a	土器	不明	BN32	0.246	11.908	155.633	—	—	
78		2b	土器	縄文早期中葉	BL32	2.946	15.069	155.464	—	—	
79		2a	土器	不明	BM32	1.344	12.557	155.678	—	—	
80		2a	土器	不明	BL32	2.303	15.277	155.490	—	—	
81	P06	2a	土器	縄文早期中葉	BM32	1.700	13.866	155.603	20	16	
82		2a	土器	縄文早期中葉	BL32	2.619	15.491	155.455	—	—	
83		2a	土器	不明	BM32	1.506	12.450	155.559	—	—	
84		1	土器	不明	BN32	2.741	11.930	155.816	—	—	
85		2b	土器	不明	BM32	2.565	14.572	155.405	—	—	
86		2a	土器	不明	BN31	4.856	11.499	155.898	—	—	
87	P04	2a	土器	縄文早期中葉	BO31	5.007	8.247	156.006	20	16	
88		2a	土器	不明	BN31	4.860	9.076	155.959	—	—	
89		2a	土器	不明	BN31	3.318	9.273	155.861	—	—	
90	P27	2a	土器	縄文早期	BN31	3.969	11.319	155.815	20	17	
91	S1	2a	石器	縄文時代	BN31	3.798	11.651	155.782	23	19	
92	P23	2a	土器	縄文早期後葉	BN31	3.015	10.035	155.829	20	17	
93		2a	土器	不明	BP31	4.846	5.685	156.073	—	—	
94	S4	2a	石器	縄文時代	BN31	4.094	11.236	155.819	23	19	
95		2a	土器	不明	BQ31	5.247	1.789	156.298	—	—	
96	P47	2a	土器	縄文中期中葉	BP31	4.860	4.605	156.170	3	18	
97	P26	2a	土器	縄文早期後葉	BO32	0.665	6.572	155.991	20	17	
98		2a	土器	不明	BM31	3.930	12.862	155.686	—	—	
99		2a	土器	不明	BM31	4.570	13.246	155.619	—	—	
100	P07	2a	土器	縄文早期中葉	BN31	4.349	11.361	155.769	20	16	
101		2a	土器	縄文早期?	BN31	4.107	11.072	155.762	—	—	
102	S17	2a	石器	縄文時代	BO31	3.658	6.472	155.866	24	20	
103	P16	2b	土器	縄文早期中葉	BO32	2.985	7.653	155.792	20	16	
104		2b	土器	不明	BP31	5.129	4.621	155.996	—	—	
105		2b	土器	不明	BN32	1.664	10.305	155.710	—	—	
106	S6	2a	石器	縄文時代	BM31	4.066	12.085	155.691	23	19	
111	接合	P13	2a	土器	縄文早期中葉	BQ33	-0.363	2.492	156.109	20	16
124						BQ32	0.548	1.254	156.191		
141	接合					BR32	0.925	-1.158	156.293		
142						BR32	0.983	-1.106	156.246		
107	同一個体					BP34	-3.176	3.386	156.017		
110						BP32	0.039	4.267	156.040		
113						BP32	1.791	3.080	156.149		
115						BQ33	-0.213	1.735	156.201		
132						BQ32	1.235	0.028	156.180		
133						BR33	-0.419	-0.257	156.157		
136	BR33	-0.214	-0.525	156.270							
108		2b	土器	不明	BN31	4.624	11.859	155.651	—	—	
109		2a	土器	不明	BP31	4.503	3.131	156.001	—	—	
112	S13	2a	石器	縄文時代	BQ33	-2.482	1.555	156.114	24	20	

表14 青葉山E遺跡第9次調査遺物座標一覧表(3)
 Tab. 14 The coordinates of the implements from AOE9 (3)

取上げ 番号	登録 番号	層位	種類	時期	グリッド	X座標	Y座標	Z座標	図	図版
114	P12	2a	土器	縄文早期中葉	BQ33	-1.829	0.545	156.161	20	16
116		2a	土器	縄文中期中葉?	BQ32	2.774	2.510	156.205	—	—
117	S18	2a	石器	縄文時代	BR34	-4.337	-0.456	156.160	25	20
118		2a	土器	縄文早期中葉	BQ32	2.674	2.273	156.167	—	—
119		2a	土器	不明	BQ33	-0.554	1.263	156.202	—	—
120		2a	土器	不明	BQ33	-1.153	1.442	156.102	—	—
121	S12	2a	石器	縄文時代	BR33	-0.347	-0.340	156.242	24	20
122	P08	2a	土器	縄文早期中葉	BQ32	2.202	2.872	156.042	20	16
123		2a	土器	不明	BQ33	-0.220	1.518	156.226	—	—
125	P09	2a	土器	縄文早期中葉	BQ32	2.452	1.323	156.233	20	16
126		2a	土器	縄文早期中葉	BQ32	0.762	0.450	156.220	—	—
127		2a	土器	不明	BR31	4.987	-1.626	156.304	—	—
128		2a	土器	縄文早期中葉	BR32	0.650	-0.091	156.294	—	—
129		2b	土器	不明	BQ31	3.552	1.044	156.188	—	—
130	P10	2a	土器	縄文早期中葉	BQ32	0.323	0.238	156.225	20	16
131		2b	土器	不明	BM32	2.122	13.600	155.420	—	—
134		2a	土器	縄文中期中葉?	BQ31	3.308	0.170	156.259	—	—
135		2a	土器	縄文早期中葉	BQ31	3.094	0.650	156.213	—	—
137		2a	土器	不明	BR33	-0.023	-0.724	156.314	—	—
138	P19	2b	土器	縄文早期中葉	BR31	3.114	-0.054	156.211	20	17
139		2b	土器	不明	BQ31	3.056	1.460	156.179	—	—
140	S14	2a	石器	縄文時代	BR33	-0.281	-0.080	156.143	24	20
143	S2	2b	石器	縄文時代	BR33	-1.846	-1.034	156.108	23	19
144		2b	土器	不明	BQ32	1.646	1.514	156.111	—	—
145	P21	2b	土器	縄文早期中葉	BQ32	1.988	1.275	156.103	20	17
146		2b	土器	不明	BQ32	2.241	1.100	156.129	—	—
147	P20	2b	土器	縄文早期中葉	BQ31	3.217	0.511	156.143	20	17
148	S8	2b	石器	縄文時代	BQ31	3.596	0.328	156.182	23	19
149	P22	2b	土器	縄文早期中葉	BQ32	2.757	0.441	156.151	20	17
150	P17	2b	土器	縄文早期中葉	BO31	4.123	6.461	156.116	20	16
151	P11	2a	土器	縄文早期中葉	BN31	4.054	11.981	155.564	20	16
152		2b	土器	不明	BP32	1.719	5.757	155.849	—	—
154	P05	2a	土器	縄文早期中葉	BM32	2.593	14.497	155.556	20	16
155		2a	土器	縄文早期中葉	BM32	2.577	14.337	155.570	—	—
156		2a	土器	不明	BL31	3.905	16.928	155.491	—	—
158	P51	6号土坑埋土2	土器	縄文中期中葉	BM32	2.575	12.216	155.379	22	18
159		6号土坑埋土2	土器	不明	BM32	2.359	12.298	155.414	—	—
160	P50	6号土坑埋土2	土器	縄文中期中葉	BM32	2.347	12.203	155.365	22	18
161		2b	土器	縄文早期中葉	BQ32	1.667	0.764	156.031	—	—
162		6号土坑埋土3	土器	不明	BN32	2.188	11.875	155.403	—	—
163		6号土坑埋土3	土器	不明	BM32	2.028	12.402	155.426	—	—
164	P15	2b	土器	縄文早期中葉	BO32	2.274	6.932	155.688	20	16
165		2b	土器	不明	BO32	2.633	6.545	155.681	—	—
166		2b	土器	不明	BM31	3.423	14.226	155.575	—	—
167	P25	2b	土器	縄文早期後葉	BM31	4.145	14.585	155.561	20	17
168		2a	土器	不明	BM31	4.102	14.499	155.564	—	—
169	S5	2号土坑埋土	石器	縄文時代	BL31	3.009	15.996	155.443	23	19
170		2a	土器	不明	BM31	3.365	13.546	155.584	—	—
171	P60	2a	粘土塊	不明	BN32	1.835	11.535	155.429	—	18
172	P18	2a	土器	縄文早期中葉	BM31	3.339	14.627	155.534	20	17
173		5号土坑埋土	土器	縄文早期後葉	BM32	2.166	13.045	155.323	—	—
174	S15	2号土坑埋土	石器	縄文時代	BL31	3.278	15.977	155.355	24	20
175	P58	6号土坑埋土2	粘土塊	不明	BN32	2.567	11.945	155.423	—	18

6. 出土遺物

遺物は、調査において、1層出土の遺物は、日付と層位を記して取り上げた。2a層、2b層、遺構出土の遺物は、日付、層位のほか、出土位置を平面図に記録して取り上げている（図19、表12～14）。取上げNo.34、37、41については、1層からの出土だが、遺物が比較的集中して出土したBJ32・33区のため、出土位置を記録した。同じく取上げNo.84も、攪乱からの出土であるが、遺構と重なる場所であったため、出土位置を記録している。

出土遺物の点数は表11に示す通りである。2a層からは、土器105点、粘土塊2点、石器10点、2b層からは、土器29点、石器2点が出土している。遺構からは、2号土坑から石器2点、5号土坑から土器1点、6号土坑から土器5点、粘土塊1点が出土している。1層からは、縄文土器71点、粘土塊12点、石器4点のほか、土師器1点、近代以降の陶器、磁器が各1点出土している。

図化して掲載した土器、粘土塊には、登録番号P1～P61の番号を、石器には登録番号S1～18の番号を付している。遺物出土位置属性表、観察表には、登録番号と、調査時に出土位置を記録した取上げ番号の両方が記載されている。図、図版に付されている番号は、登録番号である。

(1) 土器（図20～22、表11～16、図版16～18）

土器は、洗浄・乾燥の後に、補強のため、アクリル系合成樹脂「バインダーNo.17」を含浸させ、接合した。

接合、同一個体の同定後の土器の点数は、212点である。接合作業の際には、青葉山E遺跡第7次調査出土資料（『年報』20）との接合も試みた。第7次調査と本調査地点は隣接しており、土器群としては一連と考えられるためである。しかし、接合する破片は確認できなかった。

報告に際しては、口縁部破片や体部の有文破片を中心として、残存状態のよいもの、文様や調整痕などの土器の特徴がわかるものを抽出して図化している。抽出した資料は、縄文土器57点、粘土塊6点である（図20～22、図版16～18）。縄文時代早期中葉、早期後葉、前期前葉、中期中葉の時期の土器が確認された。これらの特徴については、観察表にまとめている（表15～16）。

後述するように、中期中葉の土器は2a層からの出土が中心であるが、早期の土器は2a層、2b層の両方から多く出土しているため、層位的に時期を分類することは難しい土器群である。そのため、型式学的に土器を検討し、分類している。以下に、それぞれの特徴を述べていく。

【縄文時代早期中葉の土器】

貝殻条痕文土器のうち、外面に貝殻条痕文が施文され、内面はナデやミガキ調整のものを縄文時代早期中葉の土器と分類した。繊維は含まない（P1～22）。2a層から22点、2b層から11点、1層から11点出土している。

口縁部破片は、2点のみ確認された（P1、15）。いずれも貝殻条痕による器面調整の後、口縁部外面に縦位の刻みが施文されている。P15は、波状の貝殻の痕跡が確認される。P1も貝殻による縦位の刻みと推測されるが、施文に用いられた貝殻の種類が異なるため、波状の痕跡はみられない。

体部に、貝殻腹縁文がみられる土器は、P16、17である。貝殻条痕による器面調整が行われた後、縦位の貝殻腹縁文が横に連続して施文されている。P17の破片では、貝殻腹縁文が4段分確認され、貝殻腹縁文と貝殻腹縁文の間に、下の段の貝殻腹縁文が施文される構成になっている。

P13、14は、底部に近い体部下半の破片と考えられる。明瞭な貝殻条痕文はみられず、ナデによって縦方向に器面調整を行った痕跡のみが観察される。

貝殻条痕文は、条痕が同じ方向に揃っていて明瞭なもの（P4、7、8、9、12、19、20、21）と、方向の異なる条痕が重なるもの（P2、3、5、6、10、11、18、22）とがみられる。条痕の方向が重なるものは、器面調整の要素が強いように観察される。方向を揃えた貝殻条痕文は、条痕の痕跡も明瞭な場合が多く、器面調整として施文されただけでなく、土器の装飾としての要素もあったのではないかと推測される。

これらの土器は、以前に調査を行った青葉山E遺跡第7次調査において比較的多く出土している（『年報』20）。第7次調査と、本調査地点とは隣接しており、資料群としては連続したものである。土器の特徴や型式についての考察は、『年報』20において詳細に触れているため、参照されたい。

宮城県内では、これらと類似する土器の出土はほとんど例がなく、七ヶ浜町吉田浜貝塚（後藤勝彦1968）からごくわずかに出土している程度である。そのため、これらの土器を適切に示す土器型式は今のところないと理解している。東北地方北部の白浜式、関東地方の広義の田戸下層式と併行する時期（領塚正浩2005）と捉えられ、縄文時代早期中葉の年代が考えられる。

【縄文時代早期後葉の土器】

P23～26は、内面、外面ともに貝殻条痕文が観察され、胎土に繊維を含む土器である。口縁部はなく、いずれも体部の破片であり、器形や文様などの特徴はわからない。

青葉山E遺跡第3次調査では、この時期の土器が2000点近く出土しており、それらを基準に「青葉山E式」を設定している（『年報』12）。第7次調査でも、縄文時代早期後葉の土器は、比較的多く出土している。P23～26の土器は、貝殻条痕文の特徴と、胎土に繊維を含むことなどから、縄文時代早期後葉の青葉山E式と考えられる。2a層から5点（可能性のあるもの含む）、2b層から2点、5号土坑から1点、1層から1点出土している。

【縄文時代前期前葉の土器】

縄文時代前期前葉と考えられる土器は、P28の1点のみである。2a層から出土している。体部破片で、胎土には繊維を含み、外面には網目状撚糸文が施文されている。撚糸文と胎土中に繊維を含む特徴から、縄文時代前期前葉の大木2a式に相当すると考えられる。青葉山E遺跡のこれまでの調査で、縄文時代前期前葉の土器は確認されておらず、初めての出土となる。

仙台市内では、三神峯遺跡の発掘調査（岩淵康治・佐藤則之ほか1980）の第2a層から大木2a式土器が出土している。宮城県名取市今熊野遺跡の第2群土器（村田晃一・小川出1986）、名取市泉遺跡A地点包含層（大友透・鴫崎哲也1998）、同泉遺跡第3群土器（鴫崎哲也・大友透ほか2010）から大木2a式土器が出土しており、類似した網目状撚糸文の土器が出土している。

【縄文時代中期中葉の土器】

P29～51、54～57は、縄文時代中期中葉の土器と考えられる。器形全体や文様構成がわかるものはなかった。2a層からの出土が中心で、2a層から32点（可能性のあるもの含む）、2b層から1点である、6号土坑から2点、1層から8点出土している。

P29～34は、口縁部破片である。P29、30は、縦位押圧縄文（LR縄文）が施文される土器である。P29は、口縁部に低いS字状突起が付き、その口唇部に縦位押圧縄文が施文されている。P30は、口縁部に縦位押圧縄文が巡り、無文部分を挟んで下に縦位押圧縄文が施文される。縦位押圧縄文はP50にもみられる。P31、32は、渦巻きをモチーフとした突起の一部である。P31は、残存部の下側にも突起が展開していたとみられ、剥落した痕跡が観察される。P32も欠損した突起であり、横方向に渦状の隆帯が展開する可能性が考えられる。P33は、口縁部の渦巻きから沈線がのびるモチーフである。P34は、キャリパー形の深鉢の口縁部である。文様は、口縁部の沈線文とLR縄文であるが、器表面に粘土紐が剥落したような痕跡が観察され、本来は縄文の上に浮線文が展開した可能性が考えられる。P54、55も同様に、剥落した浮線文が観察される。P49は、器面の摩滅のため明瞭ではないが、剣先付き渦巻文の一部になるとみられる。

P36～40、56は、深鉢の頸部破片である。P36、38は、頸部と胴部のくびれ部分で、口頸部は隆沈線文、胴部は横位並行沈線文となる。P36は、頸部に無文帯はなく、P38、37、56は無文帯を持つ。

P41～48、57は、深鉢胴部破片で、縄文施文の後、並行沈線文が描かれる。P41は、頸部に4条の並行沈線文、胴部には曲線の文様が描かれる。他には、横走する3条の沈線文（P42～44）や、縦位方向の2条の並行沈線文

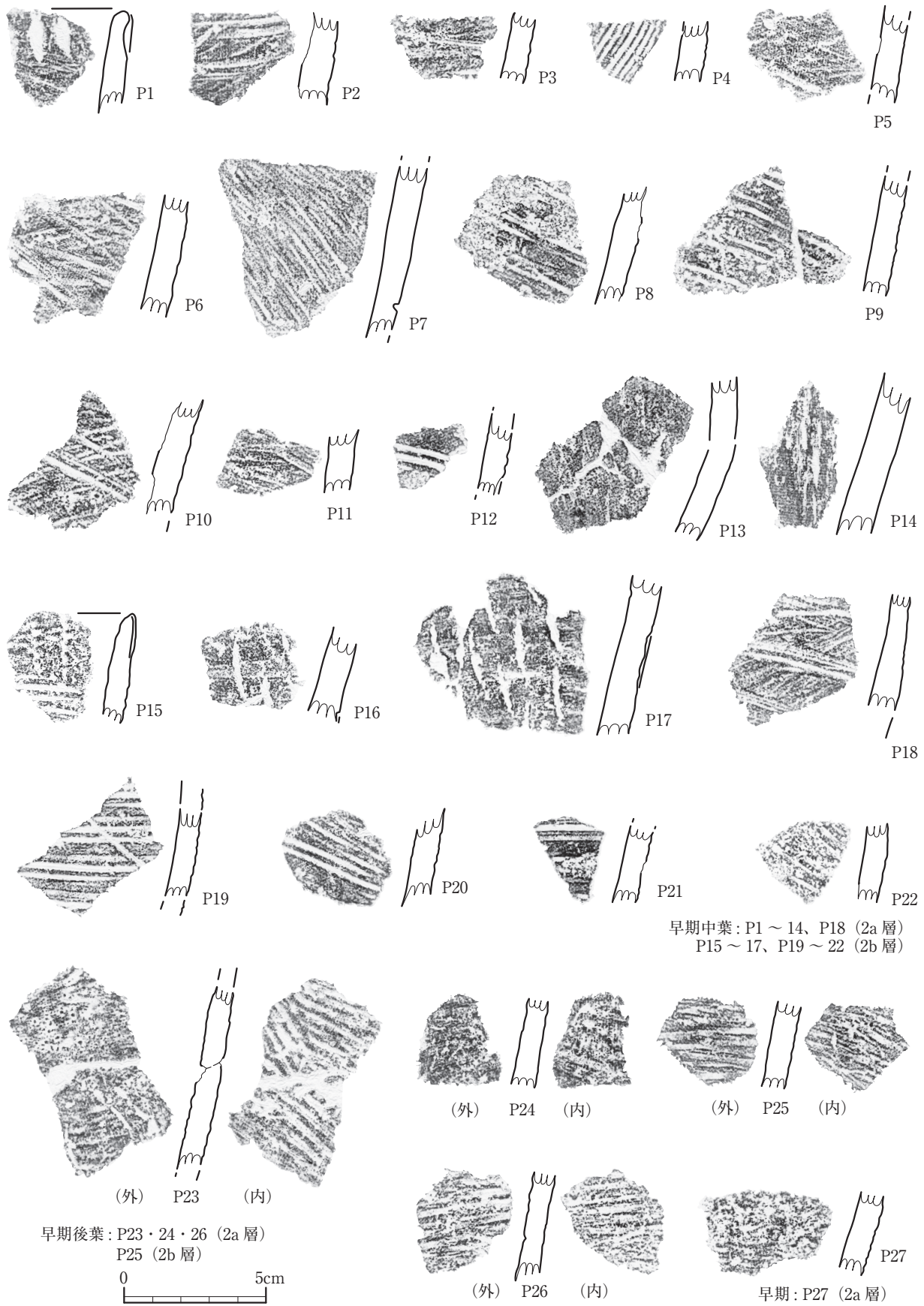
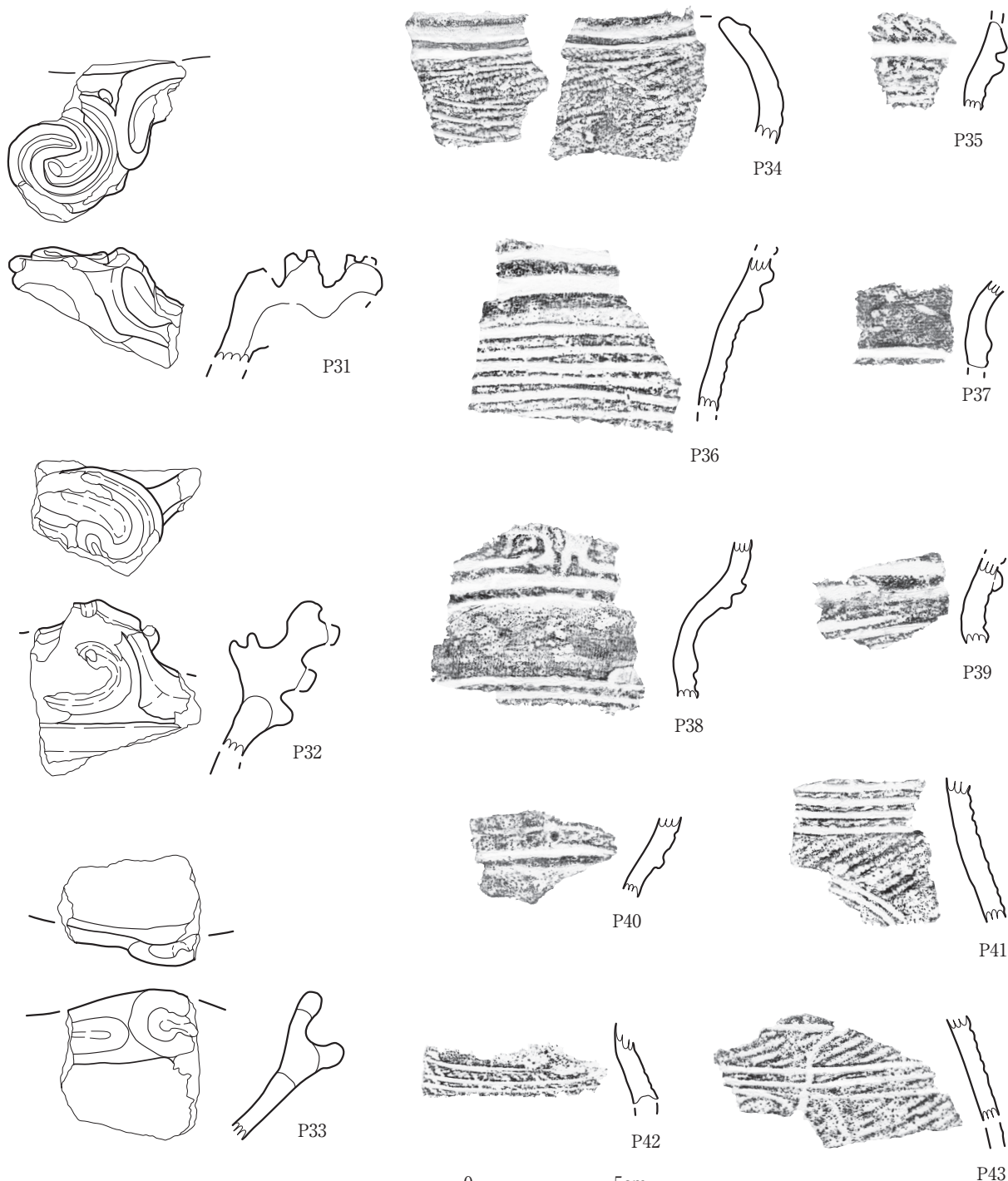


図20 青葉山E遺跡第9次調査出土土器 (1)
 Fig. 20 Pottery from AOE9 (1)



前期前葉：P28 (2a層)



中期中葉：P29 ~ 43 (2a層)

図21 青葉山E遺跡第9次調査出土土器 (2)
Fig. 21 Pottery from AOE9 (2)

(P44、45) や、曲線文 (P46)、縦位沈線文に縦位波状文が沿う文様 (P47) がみられる。

土器型式としては、縄文時代中期中葉の大木8a式から大木8b式に相当し、大木8b式の特徴の土器が多く、やや古い大木8a式の要素が若干含まれているといった様相である。大木8a式は2段階、大木8b式は3段階の細分(中野幸大2008)を基に考えると、もう少し時期を限定して捉えられる可能性も考えられる。

P29、30の土器は、縦位押圧縄文が施文されており、大木8a式の特徴を持つ土器と考えられる。P36~40は、大木8b式の頸部破片であるが、無文帯をもつもの(P37、38、40、56)と、無文帯のないもの(P36)が存在する。大木8b式の中でも、古段階相当(P36)と中段階相当(P37、38、40、56)が存在する可能性が考えられる。胴部の破片では、数条の沈線文で施文された土器に限られ(P41~48)、隆線に沈線を添わせるものや、肥厚した隆線に磨き加わるものなどは確認されないことから、大木8a式の古段階や大木8b式の新段階の要素はみられないのではないかと考えられる。本資料は、いずれも器形全体や文様構成がわかる土器でなく、破片資料による断片的な要素ではあるが、大木8a式から大木8b式中段階の土器に相当すると考えられる。

仙台市内では、上野遺跡(主浜光朗・結城慎一1989)、高柳遺跡(佐藤好一1995)から、大木8a式から大木8b式の土器が出土している。宮城県川崎町中ノ内B遺跡(手塚均ほか1977)、大和町勝負沢遺跡(丹羽茂ほか1982)、加美町三本松遺跡(吉田桂2011)、登米市長者原貝塚(阿部恵・遊佐五郎1978)からも当該期の土器が多数出土している。上野遺跡、中ノ内B遺跡出土の土器は、大木8b式でも新しい段階の土器で、本資料はこれらよりも古い様相を示していると考えられる。

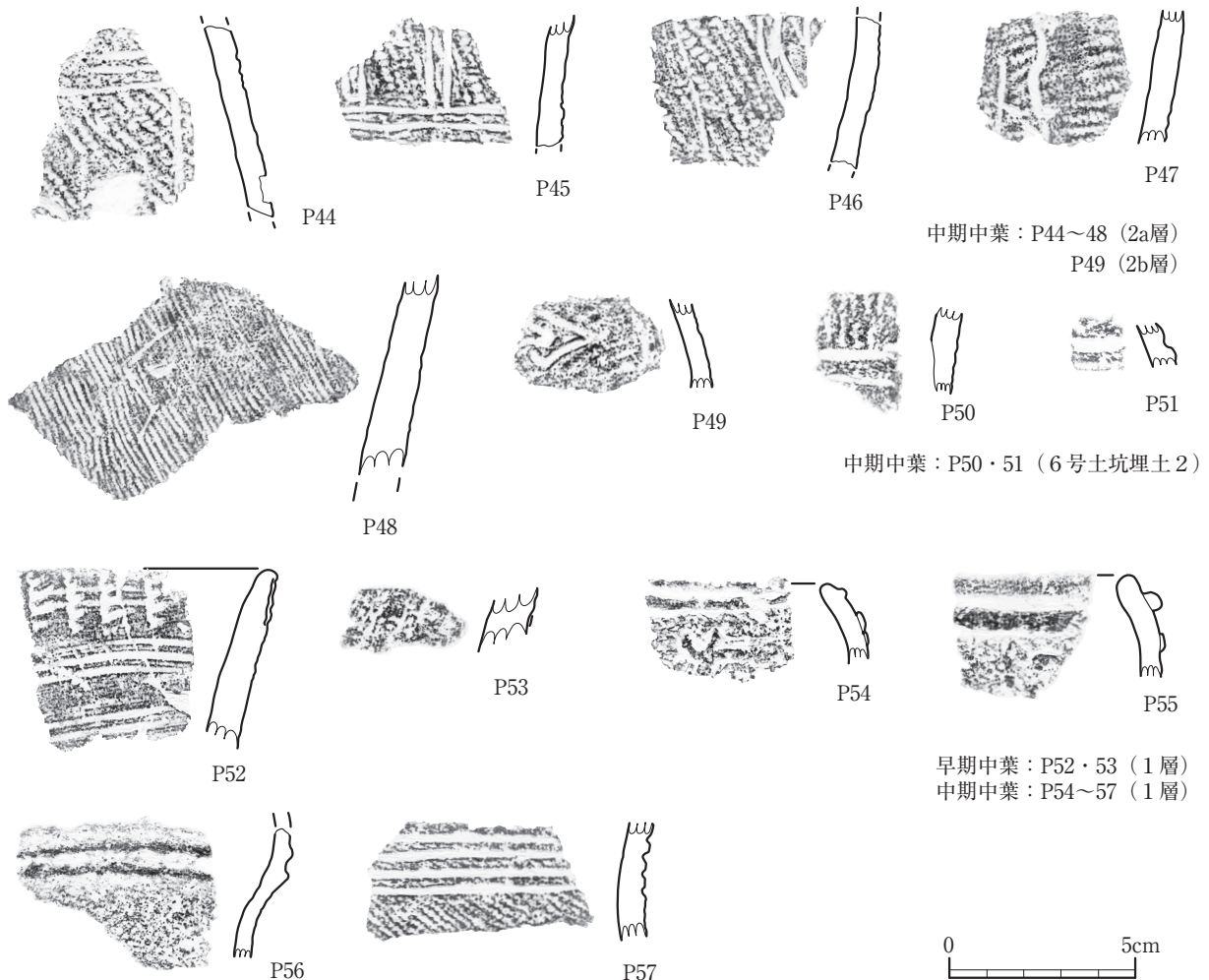


図22 青葉山E遺跡第9次調査出土土器 (3)
Fig. 22 Pottery from AOE9 (3)

表15 青葉山E遺跡第9次調査出土土器観察表(1)
Tab. 15 Attribute list of pottery from AOE9 (1)

登録番号	取上げ番号	区	出土場所	時期	器種	部位	端面形	口縁形態	内面調整	外面調整	特徴	器厚(mm)	図	図版
P01	56	BL31	2a層	早期中葉	深鉢	口縁	平坦	平坦	ナデ	貝殻条痕文	口縁部縦位刻み	7	20	16
P02	42	BK32	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	貝殻条痕文	—	11	20	16
P03	73	BM32	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	貝殻条痕文	—	8	20	16
P04	87	BO31	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	貝殻条痕文	—	10	20	16
P05	154	BM32	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ミガキ	貝殻条痕文	—	8	20	16
P06	81	BM32	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	貝殻条痕文	海面骨針	9	20	16
P07	100	BN31	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ミガキ	貝殻条痕文	—	10	20	16
P08	122	BQ32	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	貝殻条痕文	—	8	20	16
P09	125	BQ32	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	貝殻条痕文	—	8	20	16
P10	130	BQ32	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	不明	貝殻条痕文	—	10	20	16
P11	151	BN31	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ミガキ	貝殻条痕文	—	9	20	16
P12	114	BQ33	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	貝殻条痕文	—	8	20	16
P13	107・110・111・113・115・124・132・133・136・141・142	BP32・BP34・BR32・BR33・BQ32・BQ33	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	ナデ	—	9	20	16
P14	74	BM32	2a層	早期中葉	深鉢	底部	—	—	ナデ	ナデ	調整痕が縦方向に観察される	10	20	16
P15	164	BO32	2b層	早期中葉	深鉢	口縁	尖る	平坦	不明	貝殻条痕文	口縁部縦位刻み(貝殻)	7	20	16
P16	103	BO32	2b層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ミガキ	貝殻条痕文	貝殻腹縁文	11	20	16
P17	150	BP31	2b層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ミガキ	ナデ	貝殻腹縁文	11	20	16
P18	172	BM31	2a層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ミガキ	貝殻条痕文	—	10	20	17
P19	138	BR31	2b層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	貝殻条痕文	—	7	20	17
P20	147	BQ31	2b層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	貝殻条痕文	—	9	20	17
P21	145	BQ32	2b層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	貝殻条痕文	—	8	20	17
P22	149	BQ32	2b層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	貝殻条痕文	—	8	20	17
P23	92	BN31	2a層	早期後葉	深鉢	体部	—	—	貝殻条痕文	貝殻条痕文	縦文	8	20	17
P24	51	BL31	2a層	早期後葉	深鉢	体部	—	—	貝殻条痕文	貝殻条痕文	縦文	8	20	17
P25	167	BM31	2b層	早期後葉	深鉢	体部	—	—	貝殻条痕文	貝殻条痕文	縦文	9	20	17
P26	97	BO32	2a層	早期後葉	深鉢	体部	—	—	貝殻条痕文	貝殻条痕文	縦文	8	20	17
P27	90	BN31	2a層	早期	深鉢	体部	—	—	ナデ	ナデ	網目状燃系文 縦文	9	20	17
P28	43・44・153	BK33・BL31	2a層	前期前葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	—	網目状燃系文 縦文	8	21	17
P29	40・48	BJ33・BJ32	2a層	中期中葉	浅鉢	口縁	尖る	突起	ナデ	ナデ	縦位押圧縄文(LR)	8	21	17
P30	35	BJ33	2a層	中期中葉	深鉢	口縁	尖る	平坦	ナデ	ナデ	縦位押圧縄文(LR)	8	21	17
P31	15	BI31	2a層	中期中葉	深鉢	口縁	—	立体的突起	ナデ	—	立体的突起の外面側は剥落している	10	21	17

表16 青葉山E遺跡第9次調査出土土器観察表(2)
Tab. 16 Attribute list of pottery from AOE9 (2)

登録番号	取上げ番号	区	出土場所	時期	器種	部位	端面形	口縁形態	内面調整	外面調整	特徴	器厚(mm)	図	図版
P32	21	BI32	2a層	中期中葉	深鉢	口縁	—	立体的突起	ナデ	縄文		7	21	17
P33	27	BI32	2a層	中期中葉	浅鉢	口縁	—	横位渦巻状隆沈線文	ナデ	ナデ		5	21	17
P34	7・9	BJ32	2a層	中期中葉	深鉢	口縁	平坦	平坦	ミガキ	縄文	LR縄文 隆沈線	7	21	18
P35	16	BI32	2a層	中期中葉	深鉢	口頸部	—	—	不明	ナデ	沈線文	6	21	17
P36	33	BJ32	2a層	中期中葉	深鉢	頸部	—	—	ナデ	不明	隆線文 海面骨針	6	21	18
P37	29	BJ32	2a層	中期中葉	深鉢	頸部	—	—	ナデ	ナデ	沈線文	8	21	18
P38	26	BJ32	2a層	中期中葉	深鉢	頸部	—	—	ナデ	ナデ	隆沈線文	7	21	18
P39	66	BM32	2a層	中期中葉	深鉢	頸部	—	—	ナデ	—	隆沈線文 海面骨針	6	21	18
P40	28	BJ32	2a層	中期中葉	深鉢	頸部	—	—	ナデ	不明	沈線文 隆線剥落	6	21	18
P41	30	BJ32	2a層	中期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	縄文	LR縄文 沈線文	6	21	18
P42	31・157	BJ33	2a層	中期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	縄文	沈線文 海面骨針	7	21	18
P43	8・10	BJ32	2a層	中期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	縄文	沈線文	6	21	18
P44	17	BI32	2a層	中期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	縄文	LR縄文 沈線文	7	22	18
P45	18	BI31	2a層	中期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	縄文	LR縄文 沈線文	6	22	18
P46	19・24	BI32	2a層	中期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	縄文	LR縄文 沈線文	7	22	18
P47	96	BP31	2a層	中期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	縄文	RL縄文 沈線文	7	22	18
P48	57・65	BM31	2a層	中期中葉	深鉢	体部	—	—	ミガキ	不明	細沈線縦位鋸歯状文 縄文骨針	9	22	18
P49	32	BJ32	2b層	中期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	不明	沈線文	5	22	18
P50	160	BM32	6号土坑埋土2	中期中葉	深鉢	体部	—	—	不明	縄文	縦位押圧縄文 (LR縄文) 沈線文	7	22	18
P51	158	BM32	6号土坑埋土2	中期中葉	不明	不明	—	—	ナデ	ナデ	沈線文	7	22	18
P52	—	—	1層	早期中葉	深鉢	口縁	丸み	平坦	ナデ	貝殻条痕文	口縁部縦位刻み (貝殻)	8	22	18
P53	—	—	1層	早期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	不明	貝殻腹縁文	11	22	18
P54	34	BJ33	1層	中期中葉	深鉢	口頸部	丸み	平坦	ナデ	縄文	隆線文 海面骨針	6	22	18
P55	—	—	1層	中期中葉	深鉢	口縁	丸み	平坦	ナデ	ナデ	隆沈線文 隆線文	6	22	18
P56	—	—	1層	中期中葉	深鉢	頸部	—	—	不明	ナデ	沈線文	5	22	18
P57	41	BJ33	1層	中期中葉	深鉢	体部	—	—	ナデ	縄文	LR縄文 沈線文	7	22	18
P58	175	BN32	6号土坑埋土2	不明	粘土塊	—	—	—	—	—	粘土塊	—	—	18
P59	67	BM32	2a層	不明	粘土塊	—	—	—	—	—	粘土塊	—	—	18
P60	171	BN32	2a層	不明	粘土塊	—	—	—	—	—	粘土塊	—	—	18
P61	—	—	1層	不明	粘土塊	—	—	—	—	—	粘土塊	—	—	18

(2) 石器 (図23~25、表11~14・17、図版19・20)

出土石器は、石鏃2点、石錐1点、スクレイパー1点、石核1点、剥片5点、チップ1点、磨石5点、石皿2点である。今回は、長さや幅がともに2cm以下で明確な二次加工が認められないものに関してはチップとして分類した。石材別では、石鏃(S1)は珪質頁岩、石鏃(S2)、石錐、スクレイパー、チップ、剥片4点、石核は頁岩、剥片1点(S9)は玉髄、磨石5点、石皿2点は安山岩である。

出土した石器は、18点である。内訳は、2a層から10点、2b層から2点、2号土坑から2点、1層から4点である(表11)。2a層、2b層、2号土坑出土の石器は、すべて出土位置を記録して取り上げている。1層出土の4点のうち、3点(S3、10、16)については、出土位置は記録していない。残りの1点(S9)は、遺物が集中して出土した場所のため、出土位置を記録している。出土した18点すべてを図化して掲載しており、表17の観察表に特徴をまとめている。

石鏃(S1)は非常に薄手であり、石鏃(S2)は石鏃(S1)よりは厚手である。この2点の石鏃には、明確な欠損は認められない。石鏃の製作的特徴を見ると2点とも、剥離面は両面とも左側は左上から右下方向に向かって連続的に剥離されているのに対して、右側は右上から左下方向に向かって連続的に剥離されているのが確認できる。

石錐(S3)は、素材剥片の末端側の両側縁に連続的に剥離を施すことによって、先端部を作出している。先端部には明確な摩滅などの痕跡は認められない。

スクレイパー(S4)は、素材剥片の末端部の一部に同一面からの連続的な剥離により刃部が作出されている。背面の一部に自然面が残存している。刃部は若干摩滅している。刃部以外には、素材剥片の右側縁に連続する剥離が認められるが、刃部に比べると一つの剥離面は大きい。またほぼ同じ部分の腹面の一部に背面からの剥離が確認できる。

チップ(S5)は、石錐(S3)と剥片(S7)と同一母岩であると考えられる。

剥片のS6とS8は、スクレイパー(S4)と同一母岩であると考えられる。剥片(S8)は末端部が欠損している。剥片S6とS8はともに、背面は腹面と同一方向の剥離面で構成されている。剥片(S7)は、背面の一部に自然面が残存している。打面構成は単設打面であり、腹面にはバルバースカーが確認できる。背面は、腹面と同一方向と横方向の剥離面で構成されている。剥片(S9)は、玉髄製であり、今回図示した石器の中で玉髄製のものはこの剥片1点のみである。背面の大部分に自然面が残存している。打面は小さい。背面は、腹面と同一方向と横方向の剥離面で構成されている。腹面にはバルバースカーが発達している。剥片(S10)は、両ゴジ剥片である。打面部は欠損している。

石核(S11)は、大部分に自然面が残存している。正面からみて上面と下面は折れにより欠損している。その折れ面が、折れの方向の側面まで及んでいる。

磨石は、すべて安山岩製である。磨石(S12)は、楕円形で比較的薄手である。重量は709gである。磨石(S13)と磨石(S15)は、長楕円形を呈している。重量は、磨石(S13)は391gであり、磨石(S15)は627gである。磨石(S13)は、半分は折れにより欠損している。また、表面は若干赤色化しており、被熱している可能性がある。先端部には、わずかにつぶれが認められる。磨石(S14)は、長方形を呈している。重量は816gである。表面は若干赤色化しており、被熱している可能性がある。磨石(S16)は、球形を呈している円礫である。重量は315gである。

石皿は、すべて安山岩である。石皿(S17)は、大きく欠損した石皿の一部である。重量は857gである。内側に非常に浅い凹みが認められる。石皿(S18)は、円礫である。無縁のため、採集礫をそのまま使用していると考えられる。重量は、8095gである。断面形は若干の凸状の盛り上がり呈している。表面は若干赤色化しているため、被熱している可能性がある。部分的に浅い凹みも認められる。

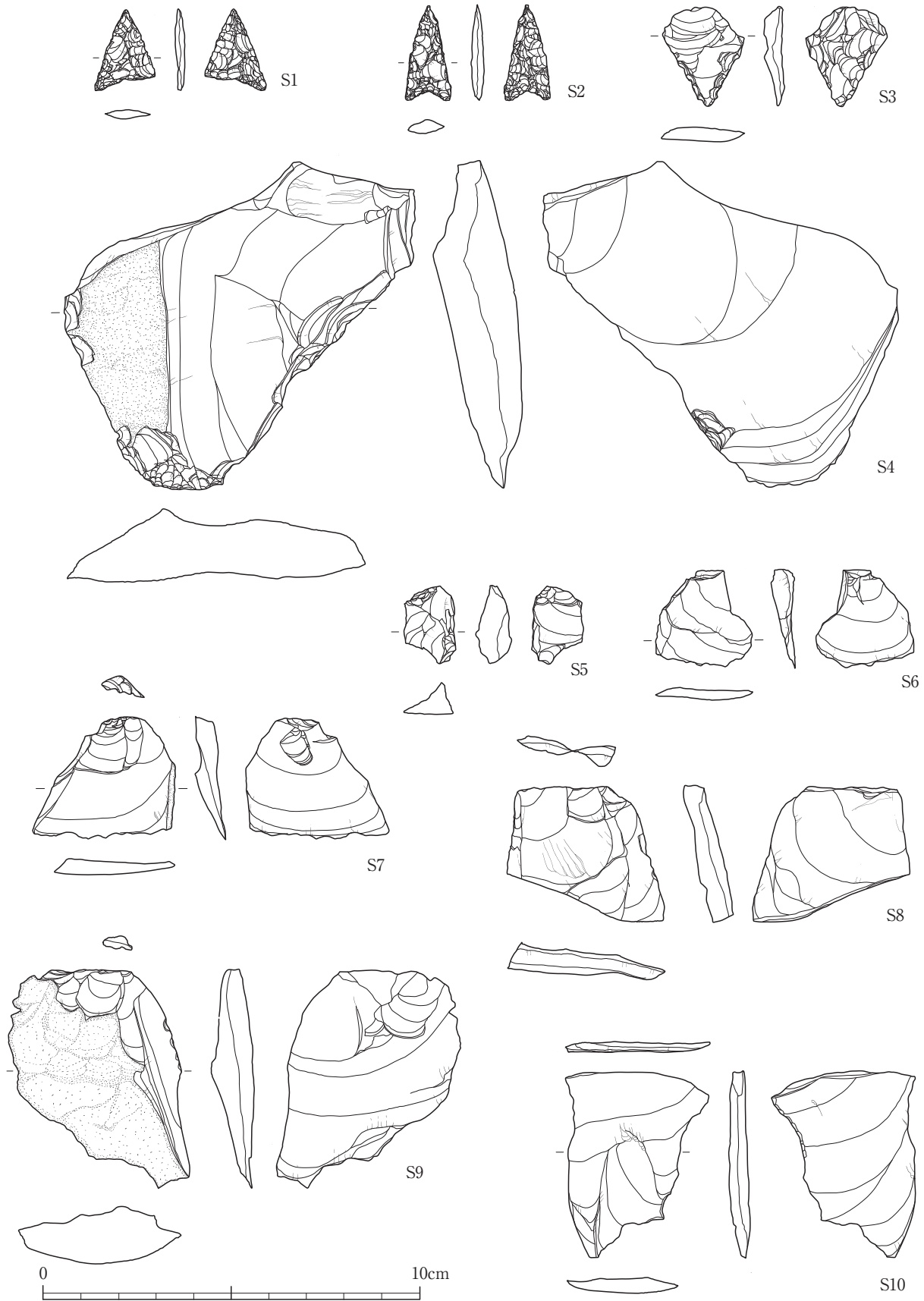


図23 青葉山E遺跡第9次調査出土石器 (1)
 Fig. 23 Stone tools from AOE9 (1)

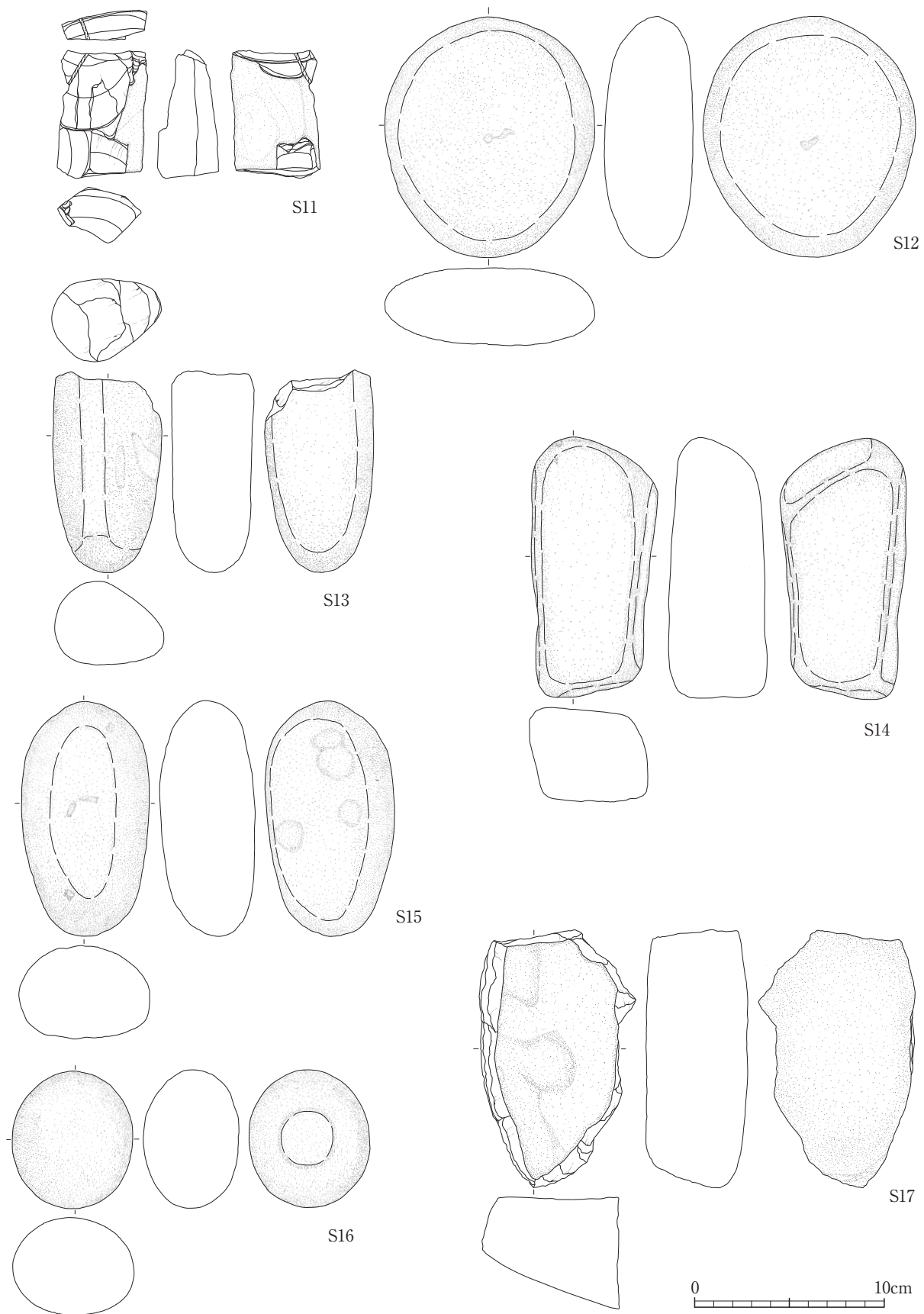
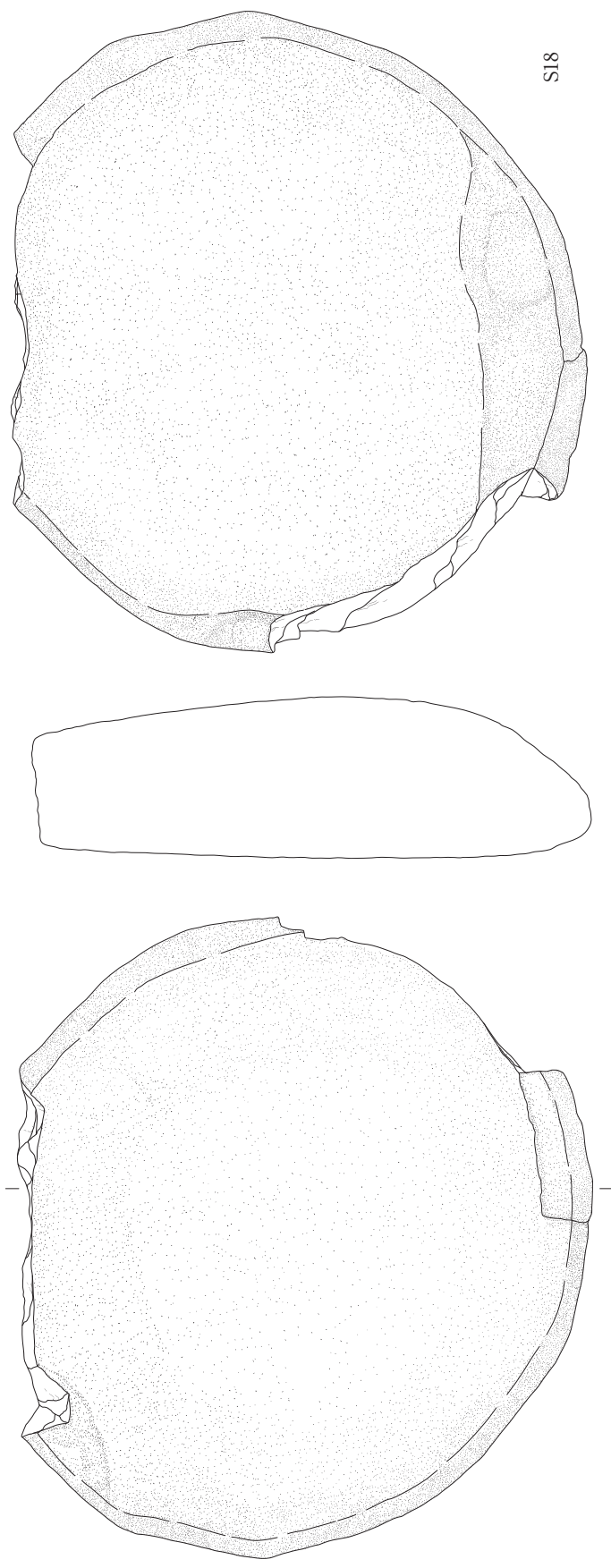


図24 青葉山E遺跡第9次調査出土石器 (2)
 Fig. 24 Stone tools from AOE (2)



S18



图25 青葉山E遺跡第9次調査出土石器 (3)
Fig. 25 Stone tools from AOE9 (3)

表17 青葉山E遺跡第9次調査出土石器観察表
Tab. 17 Attribute list of stone implements from AOE9

登録番号	取上げ番号	グリッド	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図	図版
S1	91	BN31	2a層	石鎌	160	215	25	0.5	珉質頁岩	23	19
S2	143	BR33	2b層	石鎌	250	122	32	0.8	頁岩	23	19
S3	—	—	1層	石錐	260	215	55	2.3	頁岩	23	19
S4	94	BN31	2a層	スクレイパー	855	915	245	109.5	頁岩	23	19
S5	169	BL32	2号土坑埋土	チップ	204	137	96	1.8	頁岩	23	19
S6	106	BM31	2a層	剥片	252	255	62	1.9	頁岩	23	19
S7	49	BK31	2a層	剥片	318	376	80	4.5	頁岩	23	19
S8	148	BQ31	2b層	剥片	356	411	130	10.5	頁岩	23	19
S9	37	BJ33	1層	剥片	570	476	111	24.5	玉髓	23	19
S10	—	—	1層	剥片	489	380	60	7.7	頁岩	23	19
S11	76	BN33	2a層	石核	664	470	325	114.0	頁岩	24	19
S12	121	BR33	2a層	磨石	1252	1095	460	709.0	安山岩	24	20
S13	112	BQ33	2a層	磨石	1045	570	430	391.0	安山岩	24	20
S14	140	BR33	2a層	磨石	1359	660	520	816.0	安山岩	24	20
S15	174	BL31	2号土坑埋土2	磨石	1221	662	500	627.0	安山岩	24	20
S16	—	—	1層	磨石	716	628	500	315.0	安山岩	24	20
S17	102	BO31	2a層	石皿	1346	815	530	857.0	安山岩	24	20
S18	117	BR34	2a層	石皿	2562	2842	2490	8095.0	安山岩	25	20

表18 青葉山E遺跡第9次調査地区・層位別出土土器・石器点数
Tab. 18 The number of potteries and stone implements by area and layer at AOE9

		土器										石器
		早期	早期?	早期後葉	早期後葉?	早期中葉	前期前葉	中期	中期中葉	中期中葉?	不明	
西部	2a層			1		10			1	2	8	5
	2b層					8					7	2
中央部	1層										1	
	2a層	1	1	2	1	12	1		4		23	4
	2b層			2		2					7	
	2号土坑埋土											2
	5号土坑埋土			1								
	6号土坑埋土2								2		1	
東部	6号土坑埋土3										2	
	1層								2			1
	2a層							3	24		8	1
	2b層								1		1	

*座標を測定した土器(表12~14)について集計した。

(3) 分布状況

本調査区では、248点の遺物が発見された（表11）。主体となるのは2a層と2b層から出土した148点の遺物である。とくに縄文時代早期中葉と中期中葉の土器の出土量が多い。早期中葉の土器は2a・2b両層から多く出土しているが、中期中葉土器は2a層からとくに多く出土しており、2b層からは1点のみしか出土していない。こうした状況からは、2a層と2b層の形成時期の違いがある可能性が想定できる。本項では、出土土器の帰属層と分布に関する分析から、包含層の形跡時期について検討する。

早期中葉の土器は、BK列から西側に分布する。主体的な分布域は、土坑が集中する調査区中央の区域（BK～BN列）と、調査区西側（BO～BR列）である（図26）。このBO列とBN列の間の空白地区を境として、西部と中央部と仮に呼称する。座標を測定した2a層・2b層出土の早期中葉・中期中葉の土器の点数は、西部21点、中央部18点となる（表18）。

西部で出土した取上げ番号No.107・110・111・113・115・124・132・133・136・141・142の土器は、部分的に接合した同一個体（P13：図20）であった。この同一個体の土器が、西部の範囲内で広く分布している状況が理解できる。西部の2b層からは、早期中葉の土器しか出土しておらず、それ以後の土器は、全て2a層から出土している。中央部でも類似する状況を示している。中央部の2b層からは早期中葉（2点）と早期後葉（2点）の土器が出土し、2a層から前期前葉（1点）や中期中葉（4点）の土器が出土している。なお、前期前葉土器1点は3点が接合したもの、中期中葉の土器4点のうち1点は2点が接合したものである。この接合関係は、近接した場所の土器と接合している。このような、西部・中央部における出土土器の接合関係と分布状況からすると、2b層は縄文時代早期中葉頃に形成されたものと考えられる。

一方、中期中葉の土器は、先に設定した西部・中央部からも出土しているが、その点数は少ない。西部では3点、中央部では4点のみである。この時期の土器の中心の分布域は調査区東側（BJ・BI列）にある。これを東部と呼称する。

東部の2a層・2b層では、早期中葉の土器は出土しておらず、中期中葉の土器25点のみが出土している。比較的近い位置で中期中葉の土器5点分の破片が接合している。そして、2b層から1点のみ出土しているものの、その大多数は2a層からの出土となる。今回図示した中でも大型の破片（P31など：図21）は、この区域の2a層に属している。こうした状況を踏まえて、2a層の形成時期は縄文時代中期中葉頃と推定したい。なお、先に遺構の項で、中央部に位置する1～3・5・6号土坑の帰属時期を中期中葉頃とした。これらの遺構は2a層上部で検出しており、層形成と遺構構築の時期は整合的である。

また、石器の分布は、地区不明の3点を除くと、西部7点、中央部6点、東部2点となる。なお、S7はBK区であるが、分布状況から東部に含めた。地区不明のものも含めると総数18点であり、土器に比べてその出土量は少ない。西部では、2a層5点、2b層2点が出土している。2b層の2点は、薄手で凹茎の石鏃（S2：図23）と、末端部は欠損しているが、背面と腹面が同一方向の剥離面で構成される剥片（S8：図23）である。中央部は、2a層から4点、2号土坑埋土から2点出土している。東部の2点は、1層と2a層からそれぞれ1点ずつの出土となる。層の形成時期からすると、S2とS8の2点は早期に帰属する可能性がある。

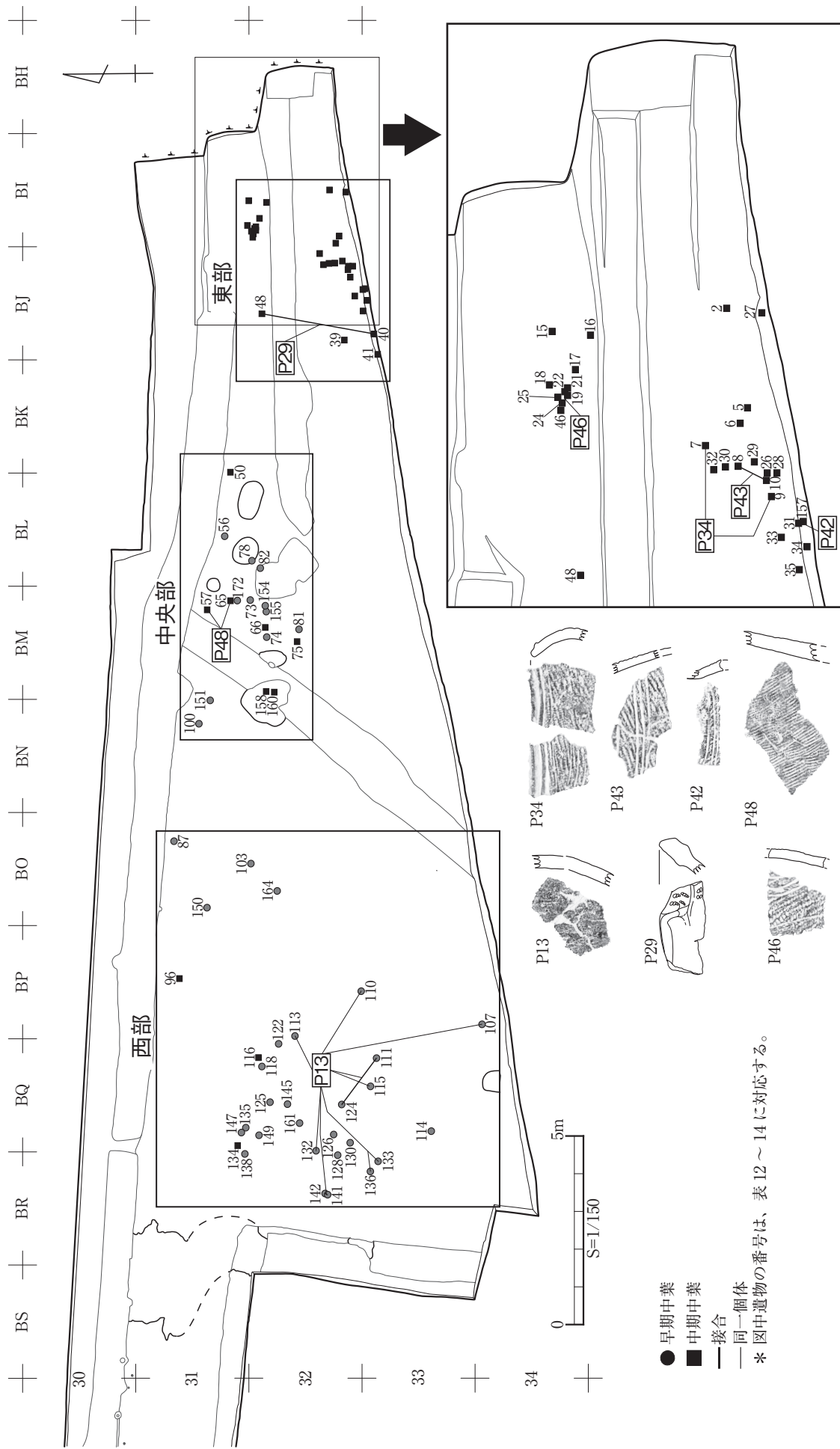


図26 青葉山巨遺跡第9次調査における早期中葉・中期中葉土器の分布
 Fig. 26 Distribution of the Early and Middle Jomon pottery at AOE9

7. まとめ

今回の調査では、縄文土器・石器などの遺物のほか、土坑が7基確認された。6号土坑では焼土などが確認されているが、これらの7基の土坑の用途は不明である。また、特徴的な遺物としては粘土塊もある。今回の調査では、粘土塊15点出土しているが、そのほとんどは1層から出土している。その他では、2a層から2点、6号土坑から1点出土している。出土地点からは、粘土塊の時期が縄文時代中期中葉である可能性も指摘できるが、粘土塊が存在する詳しい背景は不明である。

最後に、隣接する第7次調査区（A O E 7：『年報』20）の遺物出土状況と比較する（図27）。第7次調査区では、2a・2b層から縄文時代早期中葉・中期中葉の土器のほか、青葉山E式と命名された早期後葉の土器が多量に出土している。それらの土器の帰属層は、両層にまたがっており、明瞭に分けることができない。一方、その分布状況からは、ある程度の傾向は読み取れる。

早期後葉の土器は、第7次調査区北東側に主体的に分布しており、今回の調査区が位置する南側では出土点数が少ない。今回の調査区でも早期後葉土器の出土量は極僅かである。従って、早期後葉の時期において、今回の調査区周辺の場合はあまり活用されていなかった可能性が高い。

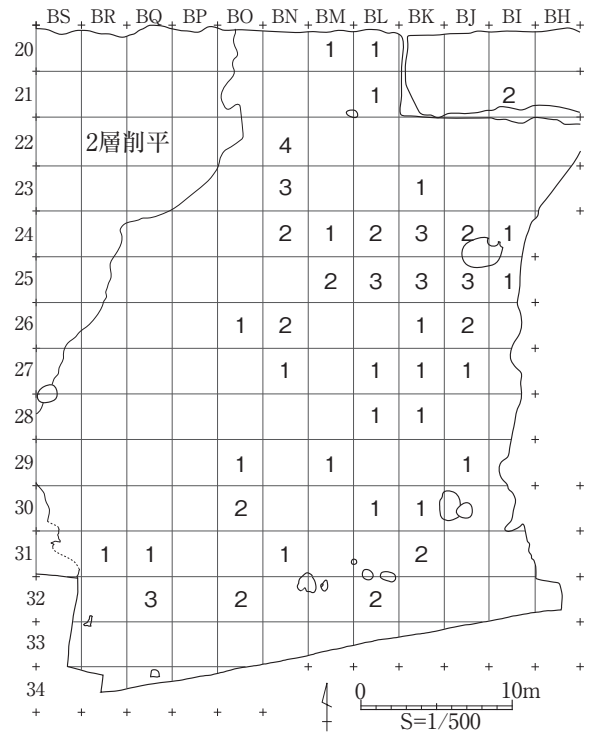
第7次調査における早期中葉の土器は、BI～BQ列を主体に広く分布している。2a層ではその範囲内に散漫に広がる。2b層ではBJ～BN・22～25区周辺に主体的な地域が認められるが、全体的に散在している様子は2a層と変わらない。今回の調査区でも、同様の傾向が認められる。一区画の出土点数は、最大で2a層5点（BM32・BQ32区）、2b層3点（BQ32区）となり、継続して少ない。また、BK区から西側に分布しているのも同様な傾向となる。

第7次調査における中期中葉の土器は、23列周辺から南東方向に向かい帯状に出土している。今回の調査区での東部における当該期の集中地区は、この帯状の分布に繋がるものと考えられる。第7次調査区では最大で13点（BL25区2a層）が確認されたが、今回の調査区でも11点（BI32区2a層）出土しており、早期の事例より集中する程度が高い。また、第7次調査区では、2b層にもBJ27区で9点が出土しているが、今回の調査区では見られない現象である。

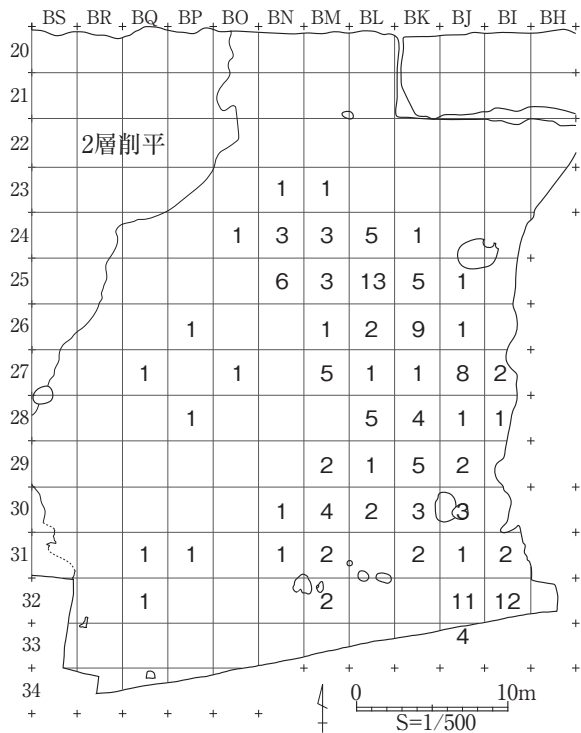
第7次調査における出土土器と層位の関係は、明瞭に区分できない。しかし、2a層と2b層の時期が区分できた今回の調査区における遺物分布のあり方とは、ほぼ一致する。本調査区と第7次調査区では、2a・2b層堆積当時の堆積進度や周辺環境の違いや、当時の人々の土地利用の仕方により、包含層の形成過程が異なっていたものと推察される。



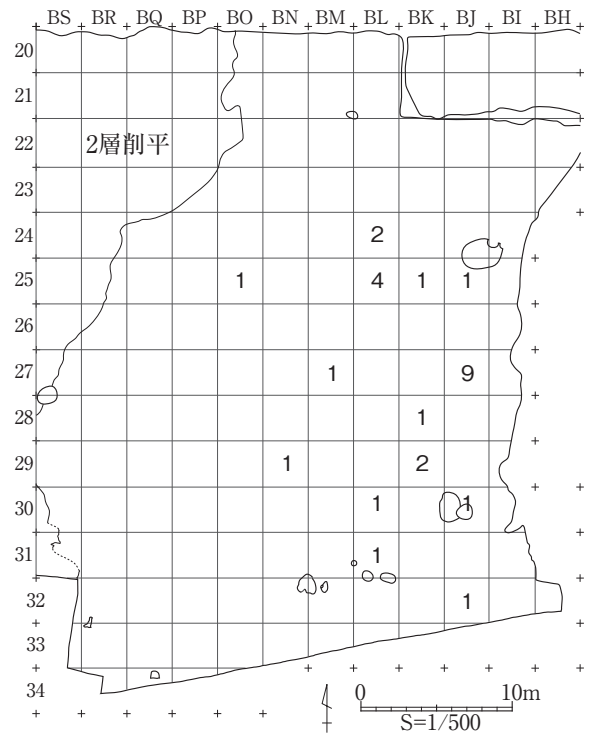
①早期中葉(2a層)



②早期中葉(2b層)



③中期中葉(2a層)



④中期中葉(2b層)

図27 青葉山E遺跡第7・9次調査グリッド別土器密度図
Fig. 27 Density of potteries at AOE7 and AOE9

引用・参考文献

- 相原淳一ほか 1986 『小梁川遺跡遺物包含層土器編』 宮城県文化財調査報告書第117集 宮城県教育委員会
- 阿部 恵・遊佐五郎 1978 『長者原貝塚』 南方町文化財調査報告書第1集 南方町教育委員会
- 板垣直俊・豊島正幸・寺戸恒夫 1980 「仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層」 『東北地理』 33-1 pp.48-53
- 伊東信雄 1950 「仙台市内の古代遺跡」 『仙臺市史3 別編1』 仙台市 pp.1-106
- 岩淵康治ほか 1980 『三神峯遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第25集 仙台市教育委員会
- 大久保弥生ほか 2009 『三神峯遺跡-第6次発掘調査報告書-』 仙台市文化財調査報告書第338集 仙台市教育委員会
- 大友 透・鶴崎哲也 1998 『宮城県名取市泉遺跡』 名取市文化財調査報告書第39集 名取市教育委員会
- 大月義徳 1987 「宮城県中南部の中期更新世示標テフラ」 『東北地理』 39-4 pp.268-282
- 大月義徳 1994 「(3) 山地・丘陵地の地形」 『仙台市史特別編1 自然』 仙台市 pp.56-69
- 加藤 宏 2011 『旧第二師団軍事施設配置に関する歴史的研究』 加藤宏
- 小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編 2005 『東北日本の地形3』 東京大学出版会
- 小岩直人・平野信一・松本秀明 2005 「仙台平野とその周辺地域」 『東北日本の地形3』 東京大学出版会 pp.91-133
- 古環境研究所 2001 「7. 青葉山遺跡E地点の火山灰分析」 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 14 pp.55-59
- 後藤勝彦 1968 「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚(1)」 『仙台湾周辺の考古学的研究』 宝文堂出版 pp.1-20
- 小林圭一 2010 『亀ヶ岡式土器成立期の研究-東北地方における縄文時代晩期前葉の土器型式-』 早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所
- 小林達雄編 2008 『総覧縄文土器』 アム・プロモーション
- 佐伯修一 2010 『三神峯-三神峯遺跡第4・5次発掘調査 三神峯古墳群確認調査報告書-』 仙台市文化財調査報告書第379集 仙台市教育委員会
- 佐藤 隆・荒井 格・佐藤 淳 1990 「青葉山A遺跡」 『富沢遺跡第49次 東光寺遺跡第3次 青葉山A遺跡』 仙台市文化財調査報告書第142集 仙台市教育委員会 pp.27-38
- 佐藤好一 1995 『高柳遺跡』 仙台市文化財調査報告書報告書第190集 仙台市教育委員会
- 白鳥良一 1974 「仙台市三神峯遺跡の調査」 『東北の考古歴史論集』 宝文堂出版 pp.1-54
- 主浜光朗 1992 『土手内』 仙台市文化財調査報告書第165集 仙台市教育委員会
- 主浜光朗・結城慎一 1989 『上野遺跡』 仙台市文化財調査報告書第127集 仙台市教育委員会
- 庄子 敦ほか 1987 『菅谷六田遺跡』 利府町文化財調査報告書第3集 利府町教育委員会
- 庄内昭男 1994 「貝殻文」 『縄文文化の研究』 5 雄山閣 pp.203-218
- 須藤 隆ほか 1995 『縄文時代晩期貝塚の研究2-中沢目貝塚II-』 東北大学文学部考古学研究会
- 東北大学百年史編集委員会編 2005 『東北大学百年史五 部局史二』 東北大学
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2003a・b 「17宮城県仙台市青葉山B」・「18宮城県仙台市青葉山E」 『前・中期旧石器問題の検証』 日本考古学協会 pp.140-146・146-152
- 手塚 均ほか 1977 『中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他』 宮城県文化財調査報告書第121集 宮城県教育委員会
- 鶴崎哲也・大友 透ほか 2010 『宮城県名取市泉・前野田東・北台遺跡他 愛島東部第二土地区画整理関係発掘調査報告書』 名取市文化財調査報告書第59集
- 戸沢充則編 1994 『縄文時代研究事典』 東京堂出版
- 豊島正幸ほか 2001 「仙台地域における台ノ原段丘面の形成時期」 『第四紀研究』 40-1 pp.53-59
- 内藤正恒 1939 『宮城県利府村春日瓦焼場大澤瓦窯址研究調査報告』 東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部研究報告第1 東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部

- 中川久夫 1998 「(2) 遺跡周辺の地質・地形」『東北大学埋蔵文化財調査年報』9 pp.74-76
- 中川久夫・相馬寛吉・石田琢二・竹内(小川)貞子 1961 「仙台付近の第四系および地形(2)」『第四紀研究』2-1 pp.30-39
- 中田 高ほか 1976 「仙台平野西縁・長町-利府線に沿う新規地殻変動」『東北地理』28-2 pp.111-120
- 中野幸大 2008 「大木7a~8b式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション pp.352-359
- 丹羽 茂 1994 「大木式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣 pp.43-60
- 丹羽 茂・阿部博志・小野寺祥一郎 1982 「勝負沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書第83集 宮城県教育委員会
- 早川由紀夫・小山真人 1998 「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日」『火山』43-5 pp.403-407
- 早瀬亮介・菅野智則・須藤 隆 2006 「東北大学文学研究科考古学陳列館所蔵大木罎貝塚出土基準資料」『Bulletin of the Tohoku University Museum』5 pp.1-40
- 早瀬亮介 2008 「前期大木式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション pp.226-233
- 藤沢 敦 1995a 「三神峯古墳群」『仙台市史 特別編2 考古資料』仙台市 p.265
- 藤沢 敦 1995b 「富沢窯跡」『仙台市史 特別編2 考古資料』仙台市 pp.350-351
- 藤沼邦彦・関根達人 2008 「亀ヶ岡式土器(亀ヶ岡式系土器群)」『総覧縄文土器』アム・プロモーション pp.682-693
- 古澤 明 1995 「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』101-2 pp.123-133
- 町田 洋・新井房夫 2003 『新編火山灰アトラス』東京大学出版会
- 町田 洋・新井房夫 2011 『新編火山灰アトラス(新編第2刷)』東京大学出版会
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51-9 pp.562-569
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 1984 「テフラと日本考古学」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』同朋舎 pp.865-928
- 松永篤知 2008 「網代・敷物」『総覧縄文土器』アム・プロモーション pp.942-945
- 村田晃一・小川 出 1986 『今熊野遺跡II 縄文・弥生時代編』宮城県文化財調査報告書第114集 宮城県教育委員会
- 柳田俊雄 2004 「東北地方中南部地域の「暗色帯」とそれに対応する層から出土する石器群の特徴について」『Bulletin of the Tohoku University Museum』3 pp.69-89
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 山内清男先生没後25年記念論集刊行会 1996 『画龍点睛-山内清男先生没後25年記念論集-』
- 吉田 桂 2011 『三本松遺跡-県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書』加美町文化財調査報告書第20集 加美町教育委員会
- 領塚正浩 2005 「東北・北海道地方における早期中葉の土器編年」『第18回縄文セミナー早期中葉の再検討』縄文セミナーの会 pp.61-140
- 領塚正浩 2006 「縄文時代早期中葉土器群の研究史」『第4回縄文時代早期中葉土器群の再検討』海峡土器編年研究会 pp.1-32
- 領塚正浩 2008 「貝殻・沈線文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション pp.94-103
- 渡邊泰伸ほか 1974 『富沢窯跡仙台三神峯丘陵所在埴輪窯跡調査報告』研究報告3 古窯跡研究会
- Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyachi, T.・Soda, T.・Yamagata, K. 1986, Catalog for late quaternary marker - tephra in Japan II, *Geographical reports of Tokyo Metropolitan University* No.21, pp.223-250.

東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

《東北大学埋蔵文化財調査年報》

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報 1	1985	昭和58年度（1983年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第1地点（NM1）	
		仙台城跡二の丸第2地点（NM2）	
		仙台城跡二の丸第3地点（NM3）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 2	1986	昭和59年度（1984年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		青葉山B遺跡第1次調査（AOB1）	
		青葉山B遺跡第2次調査（AOB2・旧称AOF）	
		青葉山E遺跡第1次調査（AOE1）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 3	1990	昭和60年度（1985年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第6地点（NM6）	
		芦ノ口遺跡第1次調査（TM1）	
		芦ノ口遺跡1976年考古学研究室による調査（TK） 研究編－東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題ほか	
東北大学埋蔵文化財調査年報 4・5	1992	昭和61年度（1986年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和62年度（1987年度）事業概要	
		仙台城跡二の丸第4地点（NM4）	
		仙台城跡二の丸第7地点（NM7） 仙台城跡二の丸第8地点（NM8）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 6	1993	昭和63年度（1988年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第5地点（NM5）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 7	1994	平成1年度（1989年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第5地点（NM5）付帯施設部分	
		仙台城跡二の丸第5地点（NM5）調査成果の検討	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第5地点（BK5） 川渡農場町西遺跡第1地点（KW1）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 8	1997	平成2年度（1990年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第9地点（NM9）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 9	1998	平成3年度（1991年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第10地点（NM10）	
		芦ノ口遺跡第2次・3次調査（TM2・TM3） 考察編－仙台城二の丸跡の考古学的調査－	
東北大学埋蔵文化財調査年報10	1998	平成4年度（1992年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第13地点（NM13）	
		青葉山地区分布調査 研究編－相馬藩における近世窯業生産の展開	
東北大学埋蔵文化財調査年報11	1999	平成5年度（1993年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第12地点（NM12）	
		仙台城跡二の丸第14地点（NM14）	
		青葉山E遺跡第2次調査（AOE2）	
東北大学埋蔵文化財調査年報12	1999	平成6年度（1994年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第15地点（NM15）	
		青葉山E遺跡第3次調査（AOE3）	
東北大学埋蔵文化財調査年報13	2000	平成7年度（1995年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第11地点（NM11）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第4地点（BK4）	
		青葉山E遺跡第4次調査（AOE4） 研究編－東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土漆器資料の材質と製作技法	
東北大学埋蔵文化財調査年報14	2001	平成8年度（1996年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第6地点（BK6）	
		青葉山E遺跡第5次調査（AOE5）	
		芦ノ口遺跡第4次調査（TM4）	
東北大学埋蔵文化財調査年報15	2001	平成9年度（1997年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第16地点（NM16）	
		青葉山E遺跡第6次調査（AOE6）	

*これらの刊行物は、宮城県遺跡リポジトリおよび東北大学機関リポジトリTOURで全て公開している。
宮城県遺跡リポジトリ <http://rar.miyagi.nii.ac.jp/>
東北大学機関リポジトリTOUR <http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/>

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報16	2001	平成10年度（1998年度）事業概要 研究編－糖アルコール浸法における予備実験	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報17	2002	平成11年度（1999年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報18	2005	平成12年度（2000年度）事業概要 仙台城跡二の丸第17地点（NM17）	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第1分冊	2006	平成13年度（2001年度）事業概要 芦ノ口遺跡第5次調査（TM5） 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 遺構	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第2分冊	2009	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 陶磁器・土器・土製品・瓦	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第3分冊	2007	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 木簡・墨書ある木製品	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第4分冊	2008	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） その他の遺物	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第5分冊	2010	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 分析・考察	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報20	2006	平成14年度（2002年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第8地点（BK8） 青葉山E遺跡第7次調査（AOE7） 青葉山E遺跡第8次調査（AOE8）	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報21	2007	平成15年度（2003年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点（BK9） 芦ノ口遺跡第6次調査（TM6）	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報22	2008	平成16年度（2004年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報23	2009	平成17年度（2005年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報24	2010	平成18年度（2006年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10） 青葉山新キャンパス地区試掘調査	東北大学埋蔵文化財調査室

《東北大学埋蔵文化財調査室調査報告》

シリーズ名	書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告1	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区 第11地点・第12地点 －仙台市高速鉄道東西線機能補償 関係調査報告書－	2011	東西線補償関係埋蔵文化財調査の概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11） 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（BK12） 川内地区の絵図記載人名の検討 川内地区における江戸時代の道路の復元	東北大学 埋蔵文化財調査室
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告2	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区 第13地点	2013	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）	東北大学 埋蔵文化財調査室
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告3	芦ノ口遺跡第7次・第8次調査	2014	芦ノ口遺跡第7次調査（TM7）・芦ノ口遺跡第8 次調査（TM8）	東北大学 埋蔵文化財調査室
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告4	芦ノ口遺跡第9次調査・青葉山E 遺跡第9次調査－東日本大震災復 旧関係調査報告書－	2015	芦ノ口遺跡第9次調査（TM9）・青葉山E遺跡第 9次調査（AOE9）	東北大学 埋蔵文化財調査室

*これらの刊行物は、宮城県遺跡リポジトリおよび東北大学機関リポジトリTOURで全て公開している。

宮城県遺跡リポジトリ <http://rar.miyagi.nii.ac.jp/>

東北大学機関リポジトリTOUR <http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/>

《東北大学埋蔵文化財調査室年次報告》

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007	2010	平成19年度（2007年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2008	2010	平成20年度（2008年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2009	2012	平成21年度（2009年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2010	2012	平成22年度（2010年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2011	2013	平成23年度（2011年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2012	2014	平成24年度（2012年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2013	2015	平成25年度（2013年度）事業概要 芦ノ口遺跡第10次調査（TM10）	東北大学埋蔵文化財調査室

* これらの刊行物は、宮城県遺跡リポジトリおよび東北大学機関リポジトリTOURで全て公開している。

宮城県遺跡リポジトリ <http://rar.miyagi.nii.ac.jp/>

東北大学機関リポジトリTOUR <http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/>

国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

平成6年5月17日 規第56号

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(目的)

第2条 調査室は、国立大学法人東北大学（以下「本学」という。）の特定事業組織として、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

(職及び職員)

第3条 調査室に、次の職及び職員を置く。

- 室長
- 文化財調査員
- 特任准教授
- 事務職員
- その他の職員

(室長)

第4条 室長は、調査室の業務を掌理する。

- 2 室長は、本学の専任の教授をもって充てる。
- 3 室長の選考は、第6条に規定する運営委員会の議に基づき、総長が行う。
- 4 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(文化財調査員)

第5条 文化財調査員は、室長の命を受け、調査室の業務に従事する。

- 2 文化財調査員は、調査室の職員をもって充てる。

(運営委員会)

第6条 調査室に、その組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

(運営委員会の組織)

第7条 運営委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 東北大学施設整備・運用委員会各地区キャンパス整備委員会の委員 各1人
- 二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授 若干人
- 三 発掘調査地に関連のある部局の教授又は准教授で、その都度委員長が指名するもの
- 四 施設部長

(委員長)

第8条 委員長は、室長をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会の会務を総理する。
- 3 委員長は、必要があると認めるときは、運営委員会の同意を得て、委員以外の者を運営委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

(調査部会)

第9条 運営委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、調査部会を置く。

(調査部会の組織)

第10条 調査部会は、部会長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 調査室の特任准教授
- 二 文化財調査員
- 三 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授 若干人
- 四 施設部計画課長
- 五 発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

(部会長)

第11条 部会長は、室長をもって充てる。

2 部会長は、調査部会の会務を掌理する。

(委嘱)

第12条 第7条第1号から第3号まで並びに第10条第3号に掲げる委員は、室長が委嘱する。

(任期)

第13条 第7条第1号から第3号まで並びに第10条第3号に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 前項の委員は、再任されることができる。

(幹事)

第14条 運営委員会に幹事を置き、施設部計画課長をもって充てる。

(事務)

第15条 調査室の事務については、国立大学法人東北大学事務組織規程（平成16年規第151号）の定めるところによる。

(雑則)

第16条 この規程に定めるもののほか、調査室の組織及び運営に関し必要な事項は、室長が定める。

附 則

- 1 この規程は、平成6年5月17日から施行する。
- 2 東北大学埋蔵文化財調査委員会規程（昭和58年規第38号）は、廃止する。
- 3 東北大学公印規程（昭和46年規第17号）の一部を次のように改正する。

〔次のよう〕略

附 則（平成16年4月1日規第207号改正）

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則（平成18年4月26日規第80号改正）

- 1 この規程は、平成18年4月26日から施行し、改正後の国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程の規定は、平成18年4月1日から適用する。
- 2 平成18年4月1日（以下「適用日」という。）の前日にセンター長の任にある者は、適用日において改正後の第4条第3項の規定により室長となったものとみなし、その任期は、同条第4項の規定にかかわらず、平成18年5月16日までとする。

附 則（平成19年4月1日規第76号改正）

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成25年4月23日から施行し、改正後の第7条第1項の規程は、平成25年4月1日から適用する。

RESEARCH REPORTS
IN ARCHAEOLOGY ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY
No.4 MARCH 2015

The Archaeological Research office
On the Campus, Tohoku University
1-1, Katahira 2chome, Aoba Ward, Sendai
980-8577 JAPAN

Summary

On the campus of Tohoku University a lot of archaeological sites are known. Tomizawa campus includes Jomon and Kofun period sites. Aobayama campus includes remarkable Jomon sites.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. The Office mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on campus.

This report carries the research result of salvage excavations of TM9 (the 9th excavation of Ashinokuchi site at Tomizawa campus) and AOE9 (the 9th excavation of Aobayama E site at Aobayama campus), which was conducted by the Archaeological Research Office on the Campus of Tohoku University in 2012.

TM9 (the 9th excavation of Ashinokuchi site at Tomizawa campus)

This area was excavated prior to construction of a new building of Research Center for Electron Photon Science. This building was damaged by the great East Japan Earthquake. The area of the excavation was 89.6m². In the area, an old swamp stream was found under the old black topsoil.

In this research, we retrieved some important elements to think about the old geographical features in the Ashinokuchi site. It is considered that the buried swamp stream was formed by natural forces, indicated in the conditions of sedimentary layers and discovered pottery sherds. A volcanic ash deposit was found in the sedimentary layer. As the result of expert analysis, the volcanic ash was identified as To-a tephra which had fallen down in the year 915 A.D. And some Jomon potteries, Haji wares and stone tools were found from inside the swamp. These Jomon potteries and Haji wares were in bad conditions. They were small pieces and their surfaces were heavily damaged.

AOE9 (the 9th excavation of Aobayama site at Aobayama campus)

This area was excavated prior to construction of a new building for the Graduate School and Faculty of Sciences, due to the damage by the great East Japan Earthquake. The area of the excavation was 342.5m². In this excavation, we found the distribution of earthen pits and a layer containing cultural remains dated to the initial Jomon and the middle Jomon period.

Seven earthen pits were found, and dated to the middle Jomon period based on associated artifacts. From the layer containing cultural remains, a number of potteries were found, which belong to the initial, the early and the middle Jomon period. All potteries were small pieces, and their original shapes are unclear.

写 真 图 版



1. 調査区全景（北東から）



2. 調査区全景（南から）

図版1 芦ノ口遺跡第9次調査全景
Pl. 1 View of TM9



1. 調査区西壁土層断面（東から）



2. 調査区南壁土層断面（北から）

図版2 芦ノ口遺跡第9次調査土層断面（1）
Pl. 2 Cross sections of TM9 (1)



1. 調査区東壁土層断面（西から）



2. 調査区北壁西側土層断面（南から）

図版3 芦ノ口遺跡第9次調査土層断面（2）
Pl. 3 Cross sections of TM9 (2)



1. 沢跡西側土層断面（東から）



2. 沢跡東側土層断面（西から）

図版4 芦ノ口遺跡第9次調査沢跡土層断面
Pl. 4 Cross sections of the swamp at TM9



1. 火山灰堆積状況（西から）



2. 遺物（P17：No.12）出土状況（西から）



3. 遺物（P5：No.28）出土状況（西から）



4. 遺物（P10：No.30）出土状況（西から）



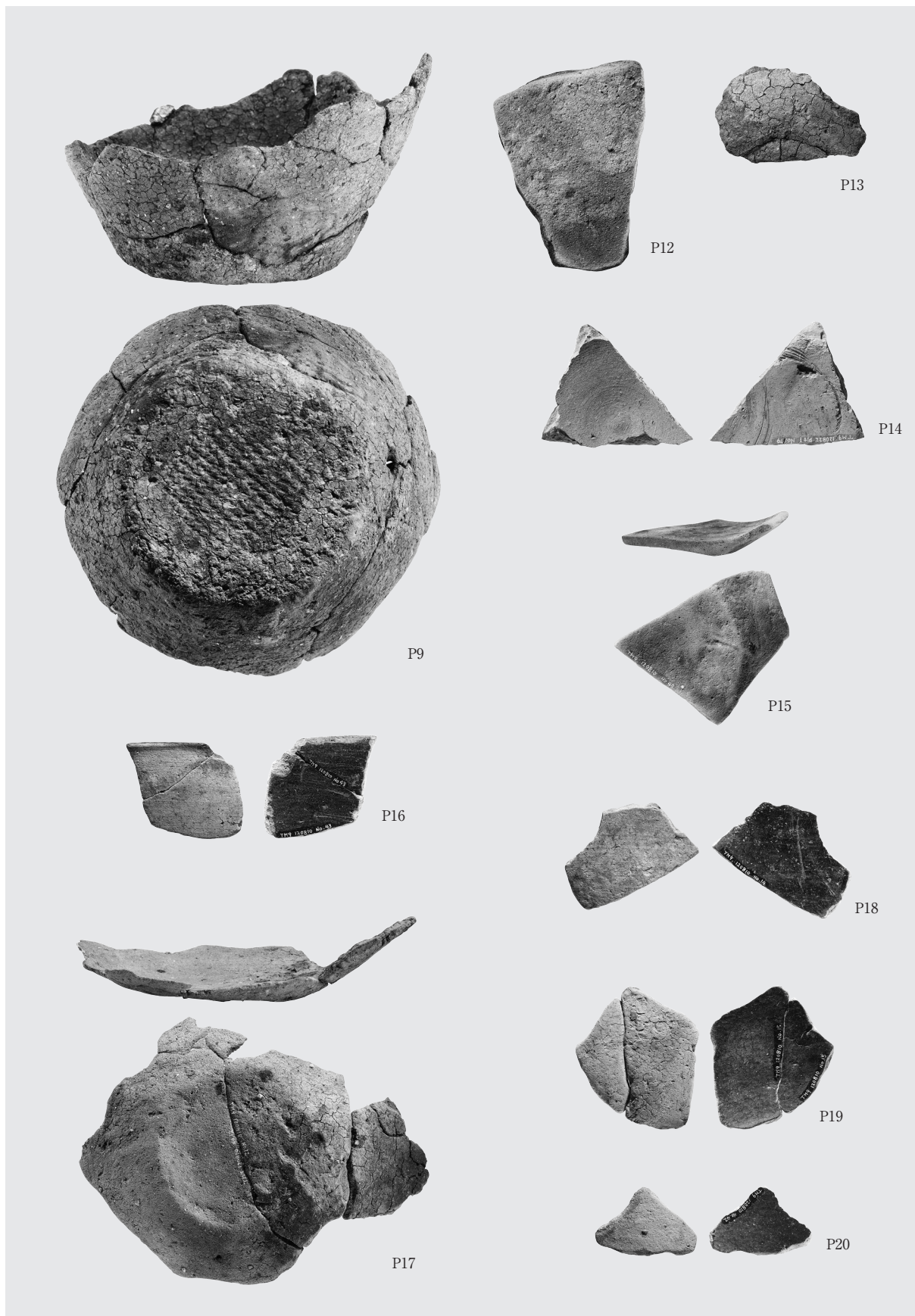
5. 遺物分布状況（南から）

図版5 芦ノ口遺跡第9次調査火山灰堆積状況・遺物出土状況
Pl. 5 Situation of the tephra deposition and artifacts at TM9



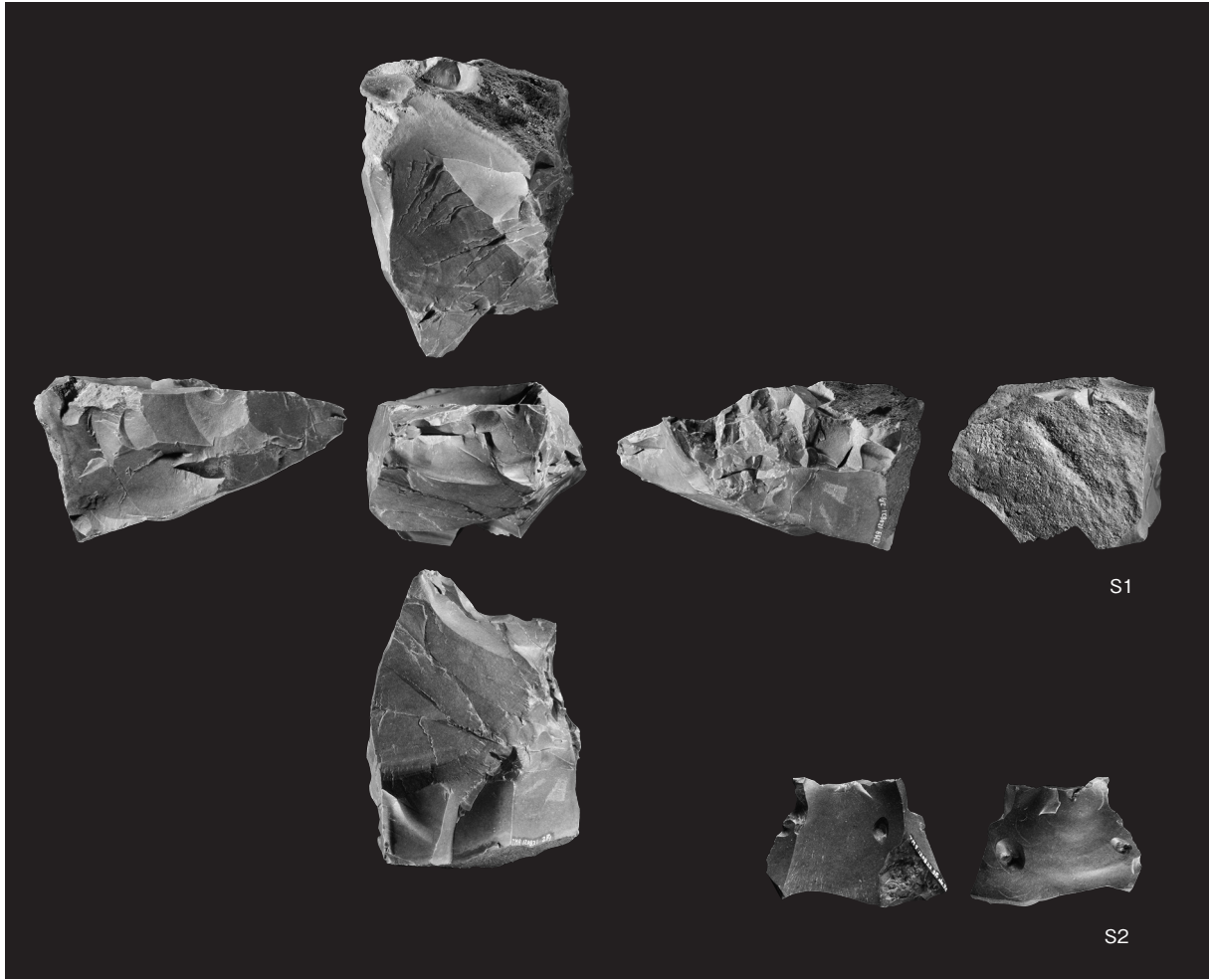
図版6 芦ノ口遺跡第9次調査出土土器 (1)
Pl. 6 Pottery from TM9 (1)

S= 1 : 2



図版7 芦ノ口遺跡第9次調査出土土器 (2)
Pl. 7 Pottery from TM9 (2)

S= 1 : 2

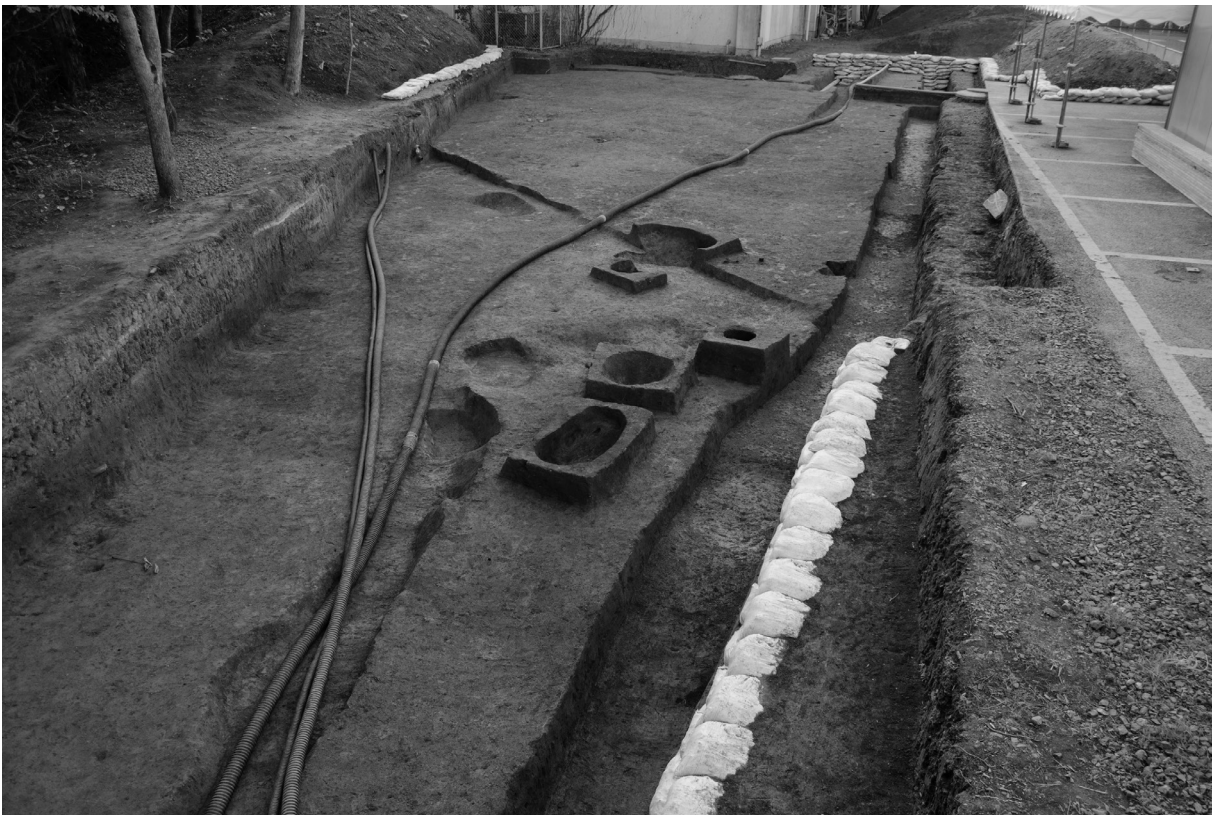


図版8 芦ノ口遺跡第9次調査出土石器
Pl. 8 Stone tools from TM9

S= 2 : 3



1. 調査区東側全景（西南から）



2. 調査区東側全景（東から）

図版9 青葉山E遺跡第9次調査全景（1）
Pl. 9 Views of AOE9 (1)



1. 調査区 (BP~BR区) 全景 (北から)



2. 調査区 (BS・BT区) 全景 (南から)

図版10 青葉山E遺跡第9次調査全景 (2)
Pl. 10 Views of AOE9 (2)



1. 調査区西側全景（西から）



2. 調査区南壁土層断面（BH・BI列）（北から）



3. 調査区南壁土層断面（BJ列）（北から）



4. 調査区南壁土層断面（BK列）（北から）



5. 調査区南壁土層断面（BL列）（北から）

図版11 青葉山E遺跡第9次調査全景・土層断面
Pl. 11 Views and cross sections of AOE9



1. 調査区南壁土層断面 (BM列) (北から)



2. 調査区南壁土層断面 (BM・BN列) (北から)



3. 調査区南壁土層断面 (BN・BO列) (北から)



4. 調査区南壁土層断面 (BO・BP列) (北から)



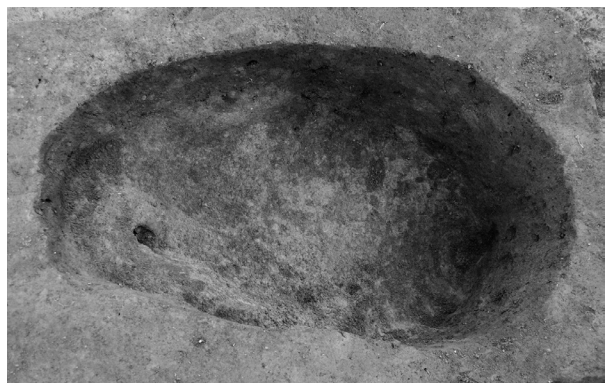
5. 調査区南壁土層断面 (BP・BQ列) (北から)



6. 調査区南壁土層断面 (BQ・BR列) (北から)



7. 1号土坑土層断面 (南から)

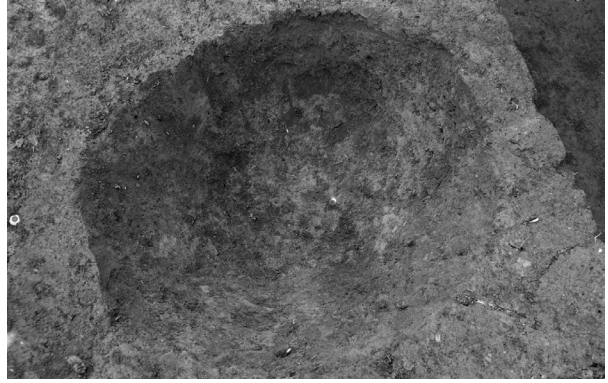


8. 1号土坑 (南から)

図版12 青葉山E遺跡第9次調査土層断面・土坑
Pl. 12 Cross sections and pits of AOE9



1. 2号土坑土層断面（西から）



2. 2号土坑（西から）



3. 3号土坑土層断面（東から）



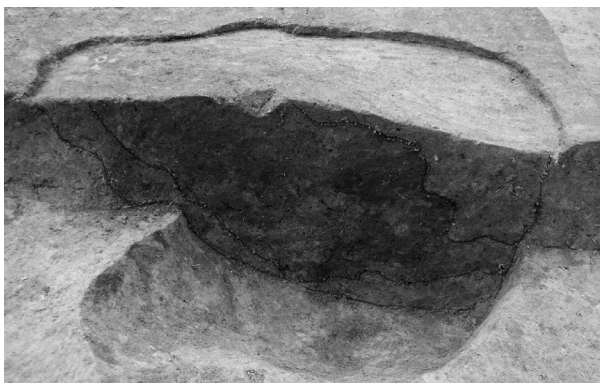
4. 3号土坑（東から）



5. 5号土坑土層断面（西から）



6. 5号土坑（西から）



7. 6号土坑土層断面（東から）



8. 6号土坑（東から）

図版13 青葉山E遺跡第9次調査土坑
Pl. 13 Pits of AOE9



1. 8号土坑土層断面（北西から）



2. 8号土坑（西から）



3. 9号土坑土層断面（西から）



4. 9号土坑（東から）



5. 調査区東側遺物出土状況（南西から）

図版14 青葉山E遺跡第9次調査土坑・遺物出土状況
Pl. 14 Pits and plan of artifacts at AOE9

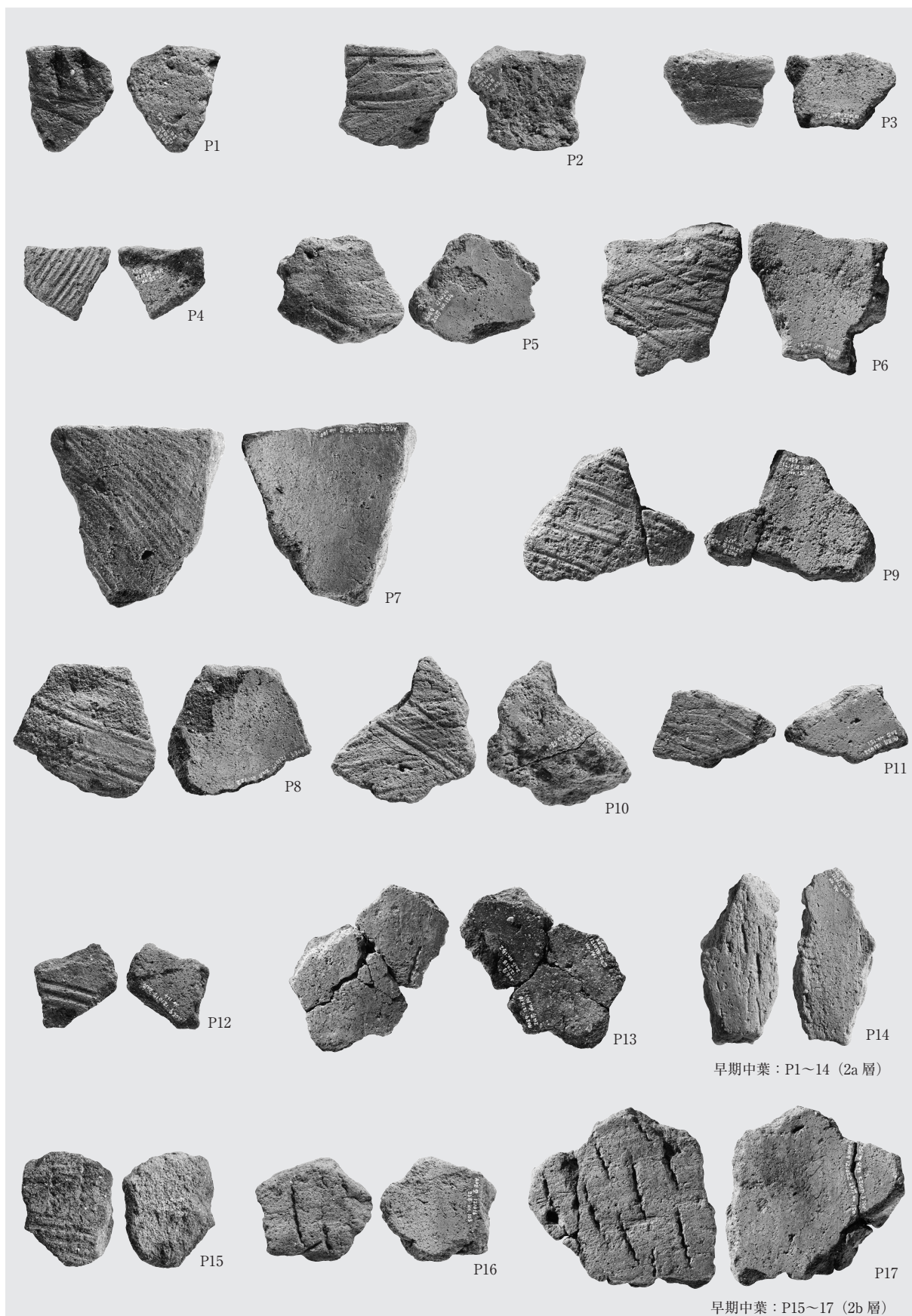


1. 中央部 (BL・BM列) 遺物出土状況 (北から)



2. 東部 (BI・BJ列) 遺物出土状況 (北から)

図版15 青葉山E遺跡第9次調査遺物出土状況
Pl.15 Plan of artifacts at AOE9



図版16 青葉山E遺跡第9次調査出土土器 (1)
Pl. 16 Pottery from AOE9 (1)

S=1 : 2



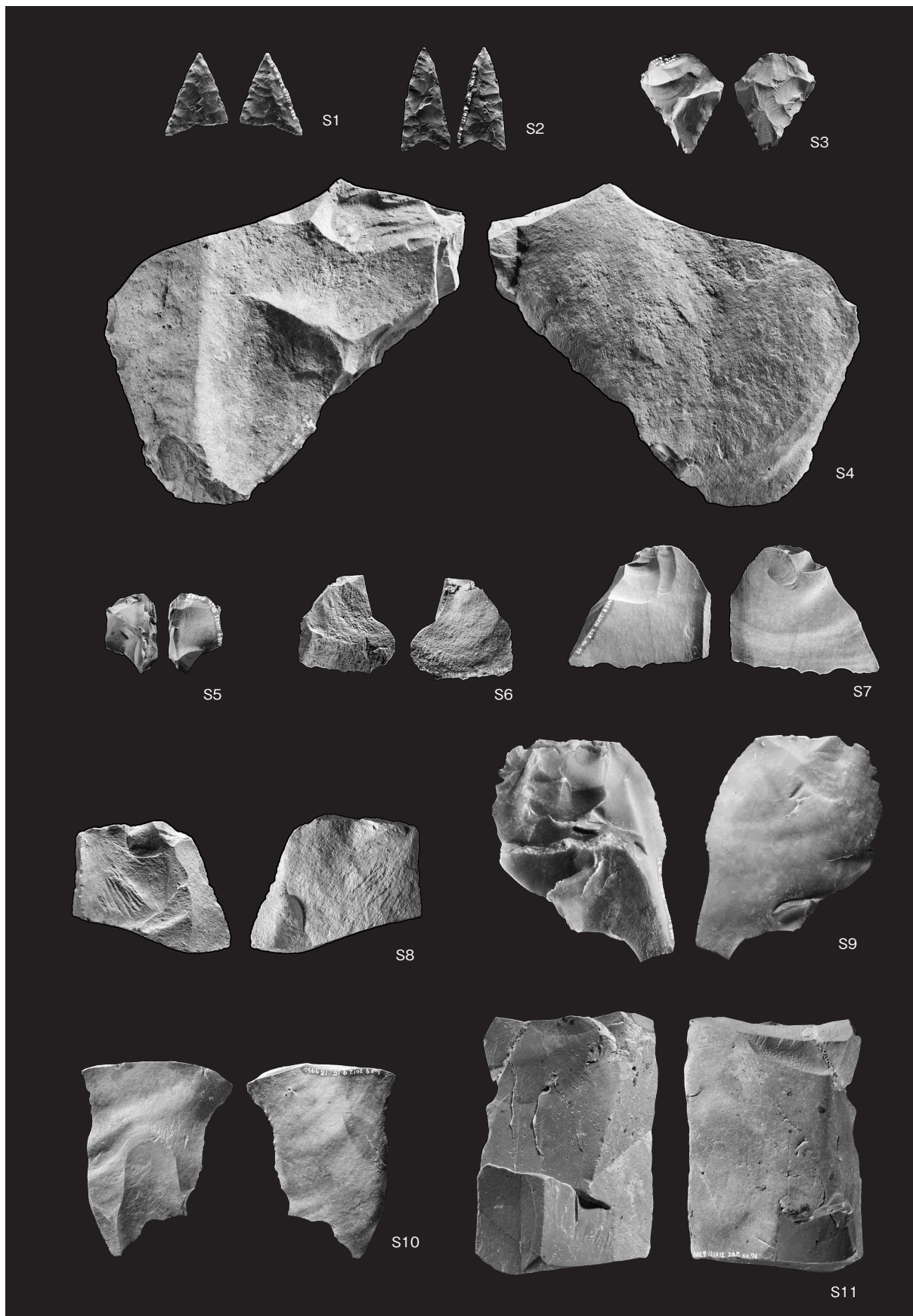
図版17 青葉山E遺跡第9次調査出土土器 (2)
Pl. 17 Pottery from AOE9 (2)

S = 1 : 2



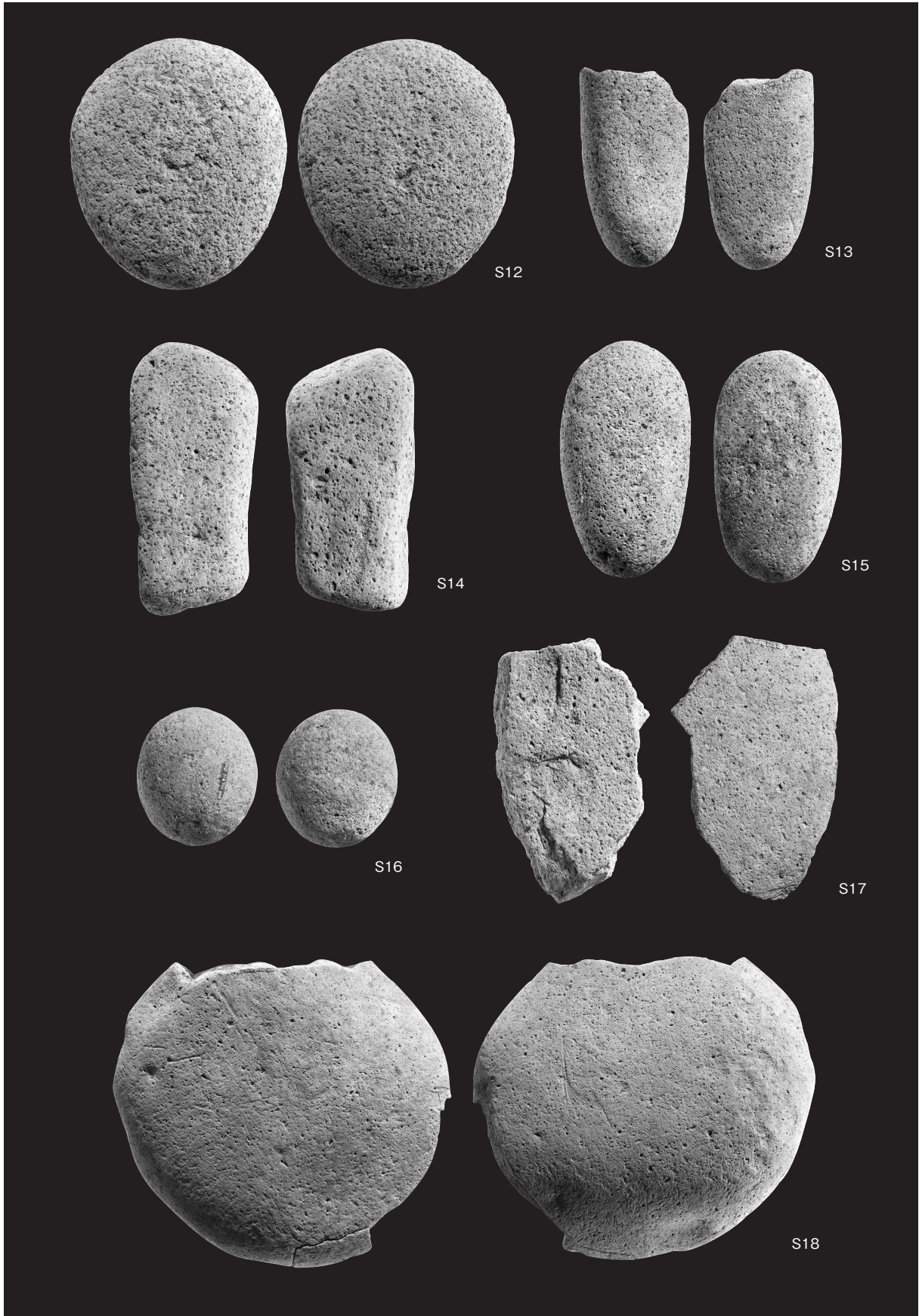
図版18 青葉山E遺跡第9次調査出土土器 (3)
 Pl. 18 Pottery from AOE9 (3)

S= 1 : 2



図版19 青葉山E遺跡第9次調査出土石器 (1)
 Pl. 19 Stone tools from AOE9 (1)

S= 2 : 3



図版20 青葉山E遺跡第9次調査出土石器 (2)
 Pl. 20 Stone tools from AOE9 (2)

S18のみ S=1 : 5
 その他 S=1 : 3

報 告 書 抄 録

ふりがな	あしのくちいせきだい9じちょうさ あおばやまEいせきだい9じちょうさ							
書名	芦ノ口遺跡第9次調査 青葉山E遺跡第9次調査							
副書名	東日本大震災復旧事業関係調査報告書							
巻次								
シリーズ名	東北大学埋蔵文化財調査室調査報告							
シリーズ番号	4							
編著者名	菅野智則・柴田恵子・傳田恵隆							
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平二丁目1-1 TEL022-217-4995							
発行年月日	西暦2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
あしのくちいせき 芦ノ口遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいほくくみかみね 太白区三神峯 いちちょうめほか 一丁目・他	04100	01035	38度 13分 35秒	140度 51分 20秒	2012.8.1 ～ 2012.8.30	89.6㎡	電子光物理学研究 センターRI排水 処理設備災害復 旧工事棟新営工 事
あおばやまEいせき 青葉山E遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 あおばくあらまき 青葉区荒巻 あざあおば 字青葉6-3	04100	01443	38度 15分 26秒	140度 50分 11秒	2012.9.3 ～ 2012.10.31	342.5㎡	総合研究棟（理 学系）新営その 他工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
芦ノ口遺跡 第9次調査	集落跡	縄文時代 平安時代	自然の沢跡		縄文土器・土師器・ 石器		十和田aテフラ (To-a)が確認さ れた。	
青葉山E遺跡 第9次調査	集落跡	縄文時代	土坑		縄文土器・粘土塊・ 石器			
要約 芦ノ口遺跡 第9次調査	縄文土器と土師器が混ざる包含層と共に、自然の沢跡を確認した。この沢跡は、西から東方向に流れ、金洗沢へと注ぐ沢跡の一つと考えられる。出土遺物は摩耗しきった小破片がほとんどである。その中でも、最も大きいのが縄文時代晩期前葉の土器片である。この時代の遺構群が、本調査区の南側に存在する可能性を想定した。							
青葉山E遺跡 第9次調査	縄文時代早期と中期の土器や石器などの遺物のほかに、7基の土坑を確認した。これらの土坑のうち5基は検出層位、出土遺物などから、縄文時代中期中葉の時期と考えられるが、その用途は不明である。また、土器の出土量、分布状況などの検討から、主要な包含層の堆積時期を早期中葉（2b層）と中期中葉（2a層）の2時期にあるものと推定した。							

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告 4

芦ノ口遺跡第9次調査・青葉山E遺跡第9次調査

— 東日本大震災復旧事業関係調査報告書 —

平成27年3月31日

発行 東北大学埋蔵文化財調査室
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1 TEL 022 (217) 4995

印刷 株式会社 東北プリント
〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24 TEL 022 (263) 1166

Research reports in archaeology on the campus of TOHOKU UNIVERSITY No.4

The 9th excavation on Ashinokuchi site (TM9)

The 9th excavation on Aobayama site Loc. E (AOE9)

Archaeological Research office on the Campus,
Tohoku University